

左今よりしてのち此国に鎮りまします神の御社いさ、かも思ひたることなくさたか  
しらる、やうになりぬるはいともかしこくいともうれしくなむかれそのよろこほひ思  
かあまりに其よしひとくだりかきしるしてこれかはし書とす天保十二年十一月なかは

(182)

源朝臣松平親年

(松平上総介殿)

天保十四年癸卯年十二月寫

三河国吉田縣

橘樹園主人藤原爲晒書

三河國古蹟考  
第三卷  
倭名鈔三河國郡郷考  
全



三國古語考 對各燈二國因派派考 全

倭名類聚鈔所載參河國郡鄉考

大 旨

樹卷カマクラも恐カシコき 皇産靈ミムスヒノ大神等ノの天上ウケより照覽シし坐マシて此浮漂ウツクへる国を修固ツクリカめなせと詔給へる  
 詔命ミコトノのまにク 伊邪イサ那ナ岐ギ伊邪イサ那ナ美ミニ柱ハ大神ノの生成ウミナし給ひ大名オホナ持モ少彦シコヒコ名のニ大神ノの葦アシ苗ノを  
 殖生ウツして造固ツクリカ意給ひしは大八島国オホヤシマノクニと称ナへ來キつ北キタと、後ノチには數々タビタビに割ワれたるなりそはまつ日  
 本紀ニ七之卷シチノマキ 成務天皇ナリノミコ五年秋九月云々、則隔山ナリノミ河カハ而分ワ 國縣クニノ隨ツ許陌コト以定ヨ 邑里ウチノ因ヨ以ヨ 東西ウチノ爲シ日縱ヒノ南北ノ爲シ  
 日横ヒノ山陽ヤマノ曰イハレ影カゲ面オモ山陰ヤマノ曰イハレ背セ面オモ云々へ古事記コトワザ中ナカ 同天皇ナリノミの条ノに故建内宿コトノ祢ニ爲シ大臣オホオミ定ヨ賜タマ大國オホクニ小  
 國コクニ之ノ造ツクリカ亦定賜オホ國々ノ之ノ塚ツツミ及ツ大縣オホアキ小縣コノアキ之ノ縣主アキノ世ヨとありとあるそ人の世となりて國所の境  
 を定め給ふことの見えたる始なる其のち於諸國置國コト史記コトワザ言事コトワザ達ツ四方志ヨシと日本紀ニ六ノ履仲  
 天皇の四年秋八月の条に見え、允恭天皇御世造立國境之標シラシと、新撰姓氏錄ニ上ノ坂合部連サカヘノの条ノ  
 に見え、孝德天皇太化二年、詔宜親國々コト壇タカヒ或書或圖シ持來モ奉ホ示シ、國縣名來クニノ時將定ト去リ、また  
 天武天皇十二年遣タ伊勢王イセノ云々、等巡ナ行リ天下ツ限分リ諸國之境ツ塚ツツミ然是年不堪ア限分リ十三年遣タ伊勢王  
 等定諸國境ツと日本紀ニ廿五ノ廿五丁ニ等に見え、また聖武天皇天平十年令タ天下ツ諸國造國郡ツ函進ツと續



日本紀六丁に見えたり。

さて国々の分属の古く見えたるは古事記中神天皇茶に高志道後の北陸同天皇家東二十道東海道なり日本紀同天皇茶北陸東海西道山陽また四道北陸東海西道また七ノ廿三丁東山道十五国など見え孝徳天皇の御卷九丁に畿内の定見えて持統天皇の御卷三十丁に四畿内此時は(いま)河内天武天皇の御紀四十三丁に山陽道山陰道また東海東山山陽山陰南海紫と六道並て見え七道の名は續日本紀文武天皇茶に始て見えたりさて諸国の総ての員数は古へに幾許ともいへる事物に見えず旧事記十卷の国造本記には百四十四国の国造を奉た北と古へは今の郡里なども固と云ひしかは猶洩れたるも多かるべし然れど孝徳天皇の御世々には隨に定まりつら心さて其後にも一國を二ツに分けまた二國を一つに合せなど御世々に彼此変りしも有つるを嵯峨天皇の御世弘仁十四年三月に越前國を割て加賀國を連られて(此事)日本後記拾芥抄當抄等に見えたり六十六国二島と定まりたるなり如此定りしは既に續紀に國守に任らるゝ事數多見え官位令に大上中下の國の分其國々の守介椽目などの位階を介記されれば早くより定まりしならむ乎全く備りて物に見えたるは延喜民部式卷二と當抄となり。上件の事どもは鈴屋大人の古事記傳の説によりていへり。

○かくて此參川國の事の古く物に見えたるは古事記神化天皇茶に朝廷別王三川之總別之祖開化天皇の玄孫なりまた皇行天皇の茶落別王吞三川之衣君之祖也(垂仁天皇第十ニの皇子と見え旧事記五ノ廿六丁早麻志麻治(四世孫)大木食命(三河國造)祖出雲醜大臣之子(孝安天皇

の御世の人なり)とあり是等や古からむさて同書野國造本紀に參河國造志賀高穴穗朝云(定賜國造)また穗國造泊瀬朝倉朝云(定賜國造)と見えたり其比は此國內の限りも參河國とのみは云はず今いふ郡ほどの地をば穗の國と号する如く何の國某の國といくつにも分れたりけむかし穗の國東三河の四郡をいふ。

三河國西三河の四郡をいふ。(萬葉云々)

大八島云々カクテハ皇國ノトノミ聞エテイカハ。

唐業云アシハラハシマトモト同言ナルヘシ。

アシハラノ中ノ國トイヘルモ大八島國トイヘルモ同語ナレバカラクニシマトモ考アリ

○さて一國八郡の分の物に見えたるは上にも云る如く式部式と當抄となり。

○參河といへる名の由來は古風土記絶て物に見えさ北と。

○國名風土記註には(此書皇承の刊本二卷有て題号に日本風土記卷首に日本記之内國名と有國々の名の故田をあらくと記せり)

三河とは此國ニ三ツノ河アリ一ツニハ男河ニツニハ豊川ニツニハ矢作河是也。コノ三ノ河ニ依テ名テ三河ト云又男神トハ河上ニ山神アリテ女神男神一所ニハ栖ミ玉ハズ立ヘタ、リテスミ玉フ、其処ヨリ出ルヲ男神河ト云、此神世俗ニハ白鬚明神ト申ストカヤ次ニ豊川トハ市(盛)長者アリケル、彼ヲ見レバ此河上ニスミ居玉フナリ、人屋サカンナル事廿里ナリ、彼民、家豊ニサカンナル故ニ其流ヲ豊川ト号ス又矢作河ハ日



本武尊東征ニ下向シ玉ヒシ時夷ノ兵トモ高石山ニテ(按ニ傍訓ノカウセキサンハ設ニテタカシ山ト訓ムヘシ此事ハ古哥名蹟考ニ云フベシ)待カケ奉リシ由ヲ聞召シ彼所ニテ多ク矢ヲ作ラセ玉ヒシ故ニ其所名ヲ矢作トモ又河ノ名ニモツケ玉フナリ。

○按ニ白鬚明神社ハ設樂郡長看平村隣村手洗所村ニアリテ俗ニ本地宮ト稱ス作手郷三十六村總社也又三川源ハ設樂郡切山村内ニ宇水ワカレト云処アリテ川三ツニナガレワカレタリトナリ。

○彦坂常征ノ履寛杖折ニ云(宝曆九年作)三川設樂郡名倉ノ西ニ段戸山ト云アリ其絶頂ヲ梅振ガ嶽ト云フ此峯ヨリ山ノ三方ヘ分レ流ル、処ヲ一ツ谷又巴川ト云テ方一里許ノ平原ナリ是ヲ三川ノ根山ト云フ南ヘ流ル、ハ宇連村ヘオナテ黒瀬川龍川ヘ流レテ豊川ナリ北ヘ流ル、ハ黒田村ヨリ信濃水ト一ツニナリ東美濃ヲ廻リテ挙母川ヘ出テ矢作川トナル西ヘ落ルハ駄山手ヘ流レ御領村立村ヲ廻リテ大平川トナル男川ナリトイヘドモ風土記ノ孫冊ニモ見アタラズ三川国画圖ニモ合ヒガタシム、根山ノ説イブカシトアリ

○また一本ニハ参河国有三ツ川一曰男川二曰豊川三曰矢作川男川者河上有山神白鬚明神也豊川者此河上有長者民屋豊饒故曰豊川矢作川者日本武尊東征時於河辺多作矢故曰矢作川トアリ。(此一本文藤原惺窩主ノ職原抄首書寛文同参考刊本等ニ風土記抄ニ云トテ引ケリ伴信友主云此本カナ書ノ方本ツ書ト見エタリサテ此書ムケニ近世ノモノニアラスト部家ヨリ出タルモノト見ユルヲアリ中ニハ現ニ古ヘ書ニ記セル古傳ヲトリテ書キタルモ

有レド凡テハ国ノ名ノ由緒ヲ作者ノ私ノ相當ニ考ヘタル物ニテ古ヘニ叶ハヌモノナリトイハレタリ。

○二葉松等ノ書にも此説に拠テ矢矧川は今も矢矧川と稱ヘ豊川は(又姉川ともいふ)今ノ吉田川をいひ男川(名狀止川又音川ともいへり)今ノ大平川をいふとも又は尾張との境なる川をいふとも云リ(古事記傳にも此説を挙げたり)また二葉松に或説を載テ之、川は元來あつと川也大貴臣命諸國を巡リ給ふ時の御足跡今に諸國に在リ御足跡池鯉鮒野に在リといふ菅清公記に足跡をト、と訓す彼是引考るに池鯉鮒宿の西に流る、川を男川といふなるべし。彼の川の川の西今岡村の西に又一流ありこれ境川にて彼のチリフの西の流と共に海に入る此境川古ヘ妹川といひし田なり今今岡村の續にイモ川、地名あり今は芋川と訛リ稱へとも実は妹川なり妹は女の通稱にて右の二流女川男川なるへしか、ればチリフの西の流うづなく男川なる事分明なるべしといへり。

○内山真菴の国号考予ホタその全書を見ずの説には参川美濃尾張と共に一國の地形なれど別置く事物に見えず上代には参川國とは云すして許呂母高巢庚鹿穂飲小月等(いへり)古事記に三川之衣君とあるは後を廻らして記せしなり後世に男川豊川天作此以稱國号といふは甚俗説なり三川と書ても加茂の御川の意なり垂仁紀に大津日子命者許呂母別高巢庚鹿之別落別王春小月之山之祖也これを始とす小月は加茂郡に月原山下に築山郷あり氏とす姓氏録に小槻山君は落別命之後也とあり凡矢作川に属たる地加茂郡衣郷築山郷額田郡



山綱以北、古時官道なり、加茂、国号あるへきを、加茂郡を流る、河に基て、御川国といふことになりけむと云り。(中には信かたき事も多かり、には其要とある事をつみて引リ)

○鳥丸光廣卿元和四年東路記にはをと川の在処今の太平川の如し。

○山崎闇齋の再遊紀行にも太平川旧謂之男川今俗亦曰夫川。

○ツネナリ云、三河ヨリ多ル名ニハアラシ。本ノ河東ニケ国セサレバ豊川ハ三河国ニアラズ。

○齊藤彦丸の諸国名義考にも上に挙たる風土記の文を引て、信友云、今遠江は(タ)カラ去遠江ニハアラズ二川といふ郷在て、よく似通ひて、聞ゆ、彦丸思ふに三大川に依て、国号としつるはうづなき物から又思へば、数をいはず、たゞ大河を称へて、御川と号けしにもあらむかといへり。

○因に(い)ふニ葉松に引る菅清公記とは、塵添蓋囊抄ニ云尾張国に登々川と云河あり、菅清公記云、大己貴少彦命と巡国之時、往還足跡故曰「跡」、注云俗跡謂之跡、々と云へり、されはと、と云ふは足あとの名にてあるへきにやとあり。此書より取れるなるべし。

○こは古事記上ノ大穴牟遲與少名毘古那二柱、神相並作、堅此国、また大三輪鎮座次第記に、初伊井諾伊井母、二神共生、大八洲国及処々小島、而地稚如、水田浮漂之時、大己貴命與少彦名命、戮力一心殖生、薦葺菅、固造国地、故号曰「國造」、大己貴命因以称曰「葺原国」と見えたる時の事にして、伊豫国風土記に、湯郡ハ大穴、將命見、悔耻、而宿奈、毘那命、而漬浴者、暫、間有、志、起、居、然、詠曰「真、暫、足、寢、哉、既、健、跡、處、今、在、湯、中、石、上」とあるも、其跡所の残れるなり。

當国の古老の口碑に、大古タイタラボツチといふ神在りて、本宮山、石巻山等、を海原より

荷ひあげて作れり、また其神本宮山に尻掛居て海にて其足を洗ひしなど云傳へたり、今其足跡といひ傳ふる地、所々にあり、近くは予が此羽田村の地内、字は西羽田といふ所より、西南の畑中に在りて、足の形の如き窪みたる空地ありて、草生てありしを、近年次々に埋て畑となし、今は其形さへ残らずなれり、近き此まで其跡ありしと村老もいへり、また同郡高足村に右の足跡、同郡小島村アタゴ山といふ地に在り、又同村カホウヤといふ処にもありと云り、丘の足跡と云傳ふる所あり。(本宮山にも、姥か足跡といひ傳ふる跡岩の上あり) 其餘にも、処々にあるべし。

○常陸國風土記に、那賀郡平津、驛家、西一ニ里有岡名曰「大櫛」、上古有人、身居、極長、大、身居、極長、大、身居、極長、大、手屋、御手補、屋、アトアリケンヲ、御手補ノ字、脱タルナルベシ、食之、其所、食、貝、積聚、成岡、時人、不朽之、義、由、大、朽之、義、謂、大、朽、ナド、古、文ノ、脱、名、ナル、ベシ、今、謂、大、櫛、之、岡、其、跡、跡、長、卅、余、步、廣、廿、餘、步、泉、穴、住、(跡ノ誤也) 可廿餘歩許。

山城国大田岡葛野五智山南大道法師足形池といふあり。

○また神原玄輔が、神原談苑といふ書に、から国に巨人跡といふは、此方の俗に、大多法師の足跡といふものなりといへり、按に、此大多法師、タイタラボツチなどいふは、大己貴命の御名を、訛傳へたるにて、神代の古傳の遺れるなるべし、案にもこの大神、少彦名命もろとも、かろうのえ



みしの八十国々造も造り堅めたまひし。なればかの国にもその跡所の遺りけむかし。  
○此書は醍醐天皇第四皇女勤子内親王の命を承て從五位上能登守源順主の撰録されたるものなり。順主は永観元年七十二歳にて卒られたる田大日本史<sup>二百十八</sup>に歌仙傳系図等を引て云はれたり。永観元年より今年天保十年まで八百五十六年になれり。

○此書の郡名を延喜式<sup>民部式</sup>と比<sup>較</sup>するに大かた合へり。  
○伴信友主の説に和名抄に收たる郷名は古の風土記などの如く諸国に課<sup>オホ</sup>て公に注進<sup>ノリ</sup>らせ給へるものにて諸国人の唱傳へたるまゝを注<sup>シ</sup>せるものと見えたり。故唱注の假字の用ひさまもとりくにて大概等しからず。或は仮字にて書る地名に唱注を施<sup>ケ</sup>け又讀<sup>マ</sup>がたき地名に唱注のなきものありてさまくなり。故古への唱のまゝなるあり古より言の通へるあり。後に言の轉<sup>カ</sup>り通へるあり音便にて訛<sup>ア</sup>れるあり言を省けるあり。名を換へたるあり。訛<sup>ア</sup>誤れるあり。字音に唱ふるあり。旧より字音に唱ふべきあり。韓語なるあり古へと仮字の違へるなど有てとりくなるは其国にて唱ふるまゝを録<sup>シ</sup>されたるなりといへり。  
○さて出雲風土記<sup>上ノ</sup>に郷字者依<sup>レ</sup>靈龜元年式改里爲郷と有て記<sup>中</sup>所名を悉<sup>ミ</sup>郷としるせしを始肥前豊後の風土記はいふもさらなり。後の總國風土記にも悉く郷と記<sup>シ</sup>せれば今はそれ<sup>ニ</sup>に柳<sup>ヨ</sup>て郡郷考とは号<sup>フ</sup>けつ。

天保十年五月

賢木園主人羽田莖敬雄判書

### 三川國古蹟考三之卷

### 倭名鈔參河國郡郷考

羽田莖敬雄輯考

#### 和名鈔五之卷國郡ノ部

參河(三加波) ○日本紀<sup>廿五</sup>同<sup>廿三</sup>續日本紀<sup>十五</sup>ノ旧事記<sup>四</sup>ノ令義解<sup>初</sup>ノ姓氏錄<sup>上</sup>ノ万葉集<sup>一</sup>等ニ參河と作り。

○古事記<sup>廿四</sup>ノ同<sup>廿四</sup>ノ旧事記<sup>廿五</sup>ノ等三川ニ作り。○旧事記<sup>廿六</sup>ノ日本紀<sup>廿五</sup>ノ續紀<sup>十五</sup>ノ令義解<sup>一</sup>ノ等ニ三河と作り。○旧事記<sup>廿七</sup>ノ續紀<sup>廿八</sup>ノ參川ニ作レリ其餘多アリ今畧之。

參河國 国府在寶飯郡

行程上十一日 下六日

○皇孫途々<sup>アツク</sup>藝命<sup>ノ</sup>天降<sup>マシ</sup>、時<sup>ニ</sup>皇產靈<sup>ノ</sup>大神<sup>天照</sup>大御神<sup>ノ</sup>詔<sup>ヲ</sup>もちて、諸部<sup>ノ</sup>の神等<sup>ヲ</sup>を副<sup>ス</sup>たまひて其職<sup>ニ</sup>供奉<sup>ス</sup>ること、天<sup>ノ</sup>の儀<sup>ノ</sup>の如くせよと御依<sup>リ</sup>し坐<sup>ル</sup>詔<sup>ノ</sup>命<sup>ノ</sup>のまに上<sup>リ</sup>つ御代<sup>ニ</sup>は



其神裔の夫人たち臣連伴造首を始ハト伴男の臣等歴世に其家々の職掌を守りて神世人の世の隔なく神事公事の分別もなく惟神に嗣き仕へ奉ていはゆる世官のさまに万々の御政事仕へ奉りまた各各郷里に住る國造には國造君別縣主村主稻置直などの差別ありて等正しく其所々を領治の神事を兼て皇祖神等の神初にまにこ、こ北もいはゆる封建のさまに仕へ奉り來て餘に吾が業に勝りて利ある職あるも其を望み欲する事なく掌る事なかりし故に各々其職業に精く人々其分々に安居して給る、事なく上を闕闕ひ他を冀望む事などはかつてもあらず若千の御々々々を経て御世は美しく治まり來しを、かの聖徳太子ふかく儒佛の道を好み給ひて方ッそれに倣はまほしく思召し位階を定め儀制を飾りなど強て戒風は威儀をもつつけ給ひまた佛道の女々しき説をも畏み給ひて取用ひ給へるより世の人意それに移行てうはべは雄々しく裡は女々しく成ゆくまに、次々に上べを取繕へる彼こちたき制をうつし給ひ且御政事を獲我氏の己か隨に爲つるよりそれ例となりて後々は臣等の權威のみ大きく強く成ぬべき有狀にて世の人意わか賢く變れる故に孝徳天皇の御世中大兄皇子と中臣鎌子連と御心を合せ給ひて彼獲我氏を滅し給ひさて其弊を直し臣等の勢を強からしめしと殊更に厳しき制度を設給ひてかの世官なる諸部の職を廢止めて百官を立給ひ其部ならぬ人にては才あるをば挙用ひて其職を掌らしめ給ひまた封建のさまなる國々の國造等をも停廢て郡縣の制を用ひて各各國府を定て國司郡司等を置て治めしめ給ふこと、はなりぬ。こは平田大人の古史徵聞題記の意を

うけていへり

○此時までは上つ御代より在來しま、に神事國政一つなりしかは朝廷にては大臣大連等を始其神事を兼掌り給ひ各各國にては國造その上として神事を掌しを此御制の時より朝廷には別に神祇官を置て其官人神事に掌らしめ給ひ各各國にては國司京より下りては國政は國司の知る事となりしかは國の神事は旧のま、國造の知り行ふ御制となりしなり此事諸書に見えて官社私考の上ツ卷の大意にりへるが如し。

○然して國には守介、椽、目、の四等郡には大、領、少、領、主、政、主、帳、の四等を定め給ひしなり、郡司とは則此四等の郡領の總名なり。

○孝徳天皇紀廿五ノ、大化二年八月詔に、卿大夫、臣連伴造、伏々、人等、咸可、聽聞、今以、汝等、使任、狀、香、政、公、旧、職、新、設、百、官、及、著、位、階、以、官、位、叙、去、々、又、昔、在、天、皇、等、所、立、子、代、之、民、処、々、屯、倉、及、臣、連、伴、造、國、造、村、首、所、有、部、曲、之、民、処、々、田、莊、仍、賜、食、封、之、有、り。

○職員令ハト守一人掌祠社戸口簿帳字養百姓勸課農桑糺察所部貢奉孝義田宅良賤訴訟組調倉廩徭役兵士器仗鼓吹郵驛傳馬烽候城牧過所公私馬牛關遺雜物及寺僧尼名籍事上。祠社義解謂祠者祭百神也社者檢校諸社也凡稱祠社皆准此例とあり。一人掌受事上抄勘署文案檢出替失讀申公文少目一人掌同大目史生三人。



○式部式十八ノ諸國史生者去々上國四人去々、並不得在當國人  
○職官令ハナニ上國守從五位介一人從六位椽一人從七位曰一人從八位史生三人とあり當國ははゆる上國  
北は上國の例のみ引り其意して見るべしさて後の世には上國にも守介椽ともは權官あ  
ること職原抄に見ゆ。

○さて守は一官の座上に在て惣裁たり大政官の大臣の如く今の老中の如し介は次官にて  
守を介けて手代となる役なり大政官の納言の如く今の若年寄の如し椽は其一官の事を  
執て其務多く下の事を上へ告し上の事を下に宣て大政官の少納言辨官等の如く俗に  
いふ役所の世話やきなり目は一官中執筆にて大政官の史の如く今の祐筆の如しとぞ。

○國司四年の任限にて交替する事なり。  
○續紀廿二ノ天平宝字二年九月勅、頃年國司交替皆以四年爲限云。  
○日本紀略弘仁六年七月云々諸國司交替以四年爲限日本後紀十二逸史廿三ノ九丁  
○類聚三代格承和二年七月云々諸國守介四年爲限云々此事續後紀には見えず  
○官職難義去一任とは四年を申すなり但陸奥出羽西海道は遠路なる間往還不便の故一年  
延て一任五年なり。

○さて戶令〇丁ノ凡國守毎年一巡行屬郡觀風俗云々  
○職官令ハナニ國博士醫師國別一人其學生去々上國卅人醫生減五分一と見えまた國々に軍  
團といふがありて兵士を數多置れし事なり。

○職官令ハナニ大郡大領一人掌撫養所部檢察郡領事上、主政三人掌糾判郡内審署文案勾、督失  
察非違上、主帳三人掌授事上抄、勅、署文案檢出督失、讀申公文、少領一人掌同大領  
○當抄五ノ長官曰大領次官曰少領判官曰主政佐官曰主帳。

○孝德天皇紀廿九ノ凡郡以四十里爲大郡三十里以下四里以上爲中郡三里爲小郡其郡司並取國  
造、性識清廉堪時務者爲大領少領強幹聰敏工書筆者爲主政主帳。  
○元明天皇紀廿九ノ和銅六年五月制夫郡司大少領以終身爲限非遷代之任云々 ○類聚國史  
神祇九、延曆十七年三月詔曰昔難波朝廷始置諸郡、仍擇有勞補於郡領、子孫相襲、永  
任其官、なとあり逸史七ノ四丁ニモ

○か、北は京より任に下れる國司等の官人は四ヶ年限に遷代北と郡司等は其國の住人を任  
らる北は身を終る迄替らざる也

○國に大上中下の差別ある事職官令を始續紀十六ノに大中上下の事見えた北と六十八ヶ國  
國毎に載したるは民部式其始也後世には拾芥抄四職原抄四などに見ゆ  
○系家漢語抄、領律云、行程百五十里四圍爲大國百里四圍爲上國八十里四圍爲中國五十  
里四圍爲下國とあり

○民部式廿二ノ參河國上とあるは上に奉たる如く上國といふ事なり鴨、祐之卿、大八洲記  
大ノ當國の条に、一云山河多而淺、一尺故五穀不熟、國乏下々小國也とあるは何等の書に出  
たるにや。○日本鹿子十六ノ下々國四方一日半



○さて上つ御代は如此御制にてありしを鎌倉の二位頼朝平家を討たまひし功に依て惣追捕使といふ職に任北給ひてより毎国に守護をおき郡毎に地頭を置て政事を執り行はせけられはいつとなく国司頼家の威勢うすうびゆき其工乱世打續きて武家威を權にせしかば後には国司の下り給ふ事等も絶て遂には其制も立すて今世の如くはななりつるなりされと自然に封建の制なる古へに復へるもやかて神の御意にもあらむかし。

○さて国府は国司の下りて館せる処をいへりつれの国なるも其国の真中に在て府又は府中ともいへり。武徳編年集成五十五頁文府中とあり。

○戎籍韻会に唐制大州曰府兵衛曰府とありとぞ。

○塩尻去国府又国衙ト称ス世説云近代通謂府爲公衙即古之公朝也然必件ノ同事ニシテ異議アリシ。

○指掌圖ニ云古昔国司居処謂之官府今存府中遺名後世戰国有神領司といへり此説しかば古の府の地は今の八幡白鳥又保迎より今の国府の迎まで係て悉其所なるべし古の説に古の街道は今の赤坂の北を通りて鷺坂にかゝり（八幡ハ廣幡ノ坐故名ニアラシ紀ニ因幡万葉引馬トアル則此辺ヲ云クハシクハ引馬野ノ考ニ出ス庸業云フ）今も八幡村西明寺の門前なる小坂を路鳥坂といへり太平記十四ノ十二丁建武二年十月鷺坂合戦の事あり上宿ハ幡の地内なり古の御油の宿なりといへり八幡に係りて豊川宿へ出今古宿村

より豊川村かけて古の豊川宿なるべし今の三明寺の辺より當古和田金田岩嶺産土神クラカケノ社あり建久中頼朝御鞍を奉納められたり等を経て山坂をこえて雲谷へ出昔門寺に建久年中頼朝御上洛の時の古跡あり橋下にはいたるこれ古の本街道なりといへり。

○伊豆日記の永暦元年三月源頼朝主伊豆の配所に趣き給ふ条に廿五日矢作宿廿六日大江入道定嚴が豊川之館休息去同日濱名宿。

○源平盛衰記廿三治承四年平家東征ノ条に十月四日三川国矢矧につく五日豊川につく六日遠江国橋下につく云々

○東鑑五ノ嘉禎四年二月將軍頼朝郷上洛ノ条に廿七日癸未若御橋本取云々八日甲申云々若御豊河宿云々九日乙酉矢作宿入御云々

○同書廿二同十月御坂路ノ条に十八日己未云々入御矢作宿云々十九日庚申云々戌一軒若御豊河駅廿日辛酉云々辰尅出御於本野原云々西尅橋下御宿云々

○同書本野建久三年十二月頼朝御関東下向ノ条に十八日小熊十九日宮路山中宿廿日橋下云々

○貞應海道記には難鯉射が馬場八幡矢矧宿泊赤坂本野原豊川宿泊峯野原高志山等を經て橋本に泊りし趣なり

○仁治道之記にも二村山八幡矢矧泊宮路山赤坂ほむのがはら豊川たかし山を過て橋本に泊りしと見えたりこれ等皆今の路鳥坂の辺より八幡へかゝり豊川の宿を經て橋本へ出



ける趣なり。されど仁治道之記の豊川宿の条に、此道は百よりよくなる方なりしかば、近き頃俄にわたらぶ渡津のことなるべしの今道といふかたに旅人多くかゝるあひた、今は其宿の人の家居をさへ外にうつすなどといふなる古々あるは其比より今の街道の方を往かふ人多くなりて、つひに豊川は古宿の名のみ残るなるへし。○統叢考には豊川にかゝるを上道といひ、志賀須吾の渡にかゝるを下道といふ、其二道に分る、処を二見、道といふといへり。

○されど今の街道の道もいと古くより有し事にてまづ

○延喜兵部式廿八諸国驛馬、条に、渡津十疋とあり。

○東鑑五丁、建長四年三月、宗尊親王、關東御下向、茶に廿三日丁未、昼ハ鳴海夜ハ矢作、廿四日戊申、昼ハ渡津夜ハ橋本とあり。渡津、草書ヨリ誤リニテ渡津ナルベシ

○兵部式廿八同茶に、尾張驛馬、馬津新溝、面村各十疋、参河国驛馬、鳥補山綱、渡津各十疋、

遠江国驛馬、猪鼻、栗原、○摩、橋尾、初倉各十疋とあり。

○當抄、空飲郡、茶に、度津、ワツツ郷あり。○伏桑畧記廿四、渡津郷と見え、兵部式に、馭馬をのせ、將軍宗尊親王、昼休し、玉ひし地なれば、馭なる事しるし、按、に今の宿村すなはち古への度津、馭にて、今の小坂井、辺かけて、其地なるべし、さるは小坂井に坐す、菟足神社の、應安三年の古鐘、銘に、空飲郡、渡津郷とあればなり。

○増基法師が、遠江道、記の趣も、こゝに泊りしかすがの渡をわたして、たかし山をこえて、濱名の

の橋にいたるとあり。

○阿佛尼のいざよひの日記にも、二むら山をこえて、八橋に泊り、宮が山を過て、わたう津に泊り、たかし山、濱名の橋を経て、ひくまの宿に泊りし趣なり。

○堯孝法師が、永亨四年、富士紀行の趣も、やはぎ宿泊（あり津より十二里）う治川の里（ふじ川なるべし）山中の宿、昼休、関口今八幡を経て、今はしに泊（ふはぎより八里）大（）は山を過て、橋本（今橋より五里）とあり。此比ハシカスガノ渡も、次々新田となりて、今いふ吉田川を舟渡せしのみなるべし、されと吉田川に始めて土橋をかけしといふ元龜元年より百三十余年の昔なれば、川幅も今よりいとく、弘かりけむこと思ひやるべし。

○同時藤原雅世郷の記行、阪路の条にも、橋下に泊り、いま橋を経て、矢はぎに泊りし趣なり。

○これら皆今の街道を往かひせし趣なり、されと古へは小坂井より吉田迄の間は、一つらの入海にて、しかすがの渡といへる舟渡のさまなれば、小坂井より吉田の関屋といふ所へわたせども、また牟呂村なる坂津といふ処まで渡せしともいひ傳へかたり、此事は古哥名蹟考、志加須賀、条にいへり。

○山本氏綜録には、古は日下部より又一流の大川有て、豊川里、岸を流し、故に豊川の名あり、明應六年八月十日の洪水に、淵瀬変りて、此川筋絶えたり、今も其川筋は深田にて、耕業に苦むといへり。

○佐野氏、三川國聞書に、去、明應七、戊午年六月十一日、天下同時地震、廿五日辰刻、大地震、豊川之



(吉田川) 瀬替(今之古川) 同八巳未年六月十日大地震大山崩而成湖在遠州名新居

今も今切桑名の渡などは、貴人たちはよけ給ふ如く、そを除て北の方に廻りて、豊川宿にかゝりて、住かひせりしを、其後入海もつきく、新りはりの田となりて、渡りもせはく、かれこれ便宜よければ、仁治道の記に、いへる如く、彼方は往かふ人少く、此方を通ふ人は、つきく、多くなれるを、まして元龜の元年の頃、かの関屋の舟渡を廢て、始て吉田川に土橋を架て、より猶たづきよければ、つひに東路の本街道とはなれるなるべし、すべて馭のことは古蹟雜考の宿駅の条に、いへると、こには其大旨を、いふのみなり。

○さて、国司の住たまひし館は、何処に在りしにや、詳ならず、今の国府には、其旧趾と思ふ処なしといへり、故坂ふるに、今ハ幡村の内字は上宿といふ処に、(西明寺門前より少し北の方、修験何がしりの北の方にあり、舟山といふが、あり、舟形に築きなしたる、如き小山なり、これ三河守大江定基の造られし、築山なりといひ傳へた北は、(又久保村、庄号を大江庄といへり)とを、(か)さまにも、其辺に在りしなるべし。剛補松には、在古大江定基三州、刺史たるとき、平尾に住す、財買、文殊は、愛妻力壽か骨を以て、造れりといへり。

●佐埜知竟三川國問書ト云モノニ云寛和二年国口大江定基云々定基館舍住国府辺(今ハ幡村、古城百跡なり)とあり

●宇治拾遺物語(四)三川入道遺世々 聞事といふ条に、参河入道(いま俗にありけるを、り、ちとのつまをはさりつ、若くかたぢよき女に思つきて、それを妻にて、三河へゐて下り

ける程に、その女又しくわすらひて、よかりける容も衰へて、失にけるを、悲さのあまりに、とかくもせて、夜もひるも語ひ、口を吸たりけるに、あさましき香の口より出来りけるに、ぞうと心出来てなく、はふりてける、それよりせうき物にこそありけれと思ひなりけるに、三河國に、風祭といふ事をしけるに、いけに、いふこと、猪をいけながら、おろしけるを見て、この國のきなんと、思ふ心付てけり、云々やがて、其日、国府を出て、京に上りて、法師に、なりけり、とあり。

○類聚三代格七ノ弘仁五年六月戊戌大政官符禁制国司任意造館事、右太政官公、四月廿六日、下五畿内諸国符、檢天平十年五月廿八日格、檢国司任意改造館舍、儻有一人病死、諱悪不肯居住、自今以後、不得除載、国、凶、進上之外、輒擅移、造、但隨壞修理、耳者、而諸国之吏、未有循行、或妄稱崇答、避、无定、或輒隨情願、改造、弥、繁、百姓勞擾、莫不由此、今被、右大臣宣、徐、奉、勅、宜、更、下、知、令、慎、將、奈、自、今、以後、国司之館、附、官舍、帳、每年、令、進、隨、破、修理、一、依、先、格、若、有、廢、其、本、館、更、營、他、處、乃、增、構、屋、宇、令、致、民、患、者、科、違、勅、罪、官、僚、而、不、糾、並、與、同、罪、(此事日本後紀十三卷ノノタリ)とあり、僅四年の年限なるに、死穢を忌避て館を造替らる、を見れば、いとかり、そのめなる作り、さまなるべし、當時の質素、今に比へて、思ひやるべし。

○延喜雜式、五々に、凡、国司、遣、代、者、皆、給、夫、馬、長、官、夫、三十人、馬、二十疋、六位以下、長官、并、次官、夫、廿八人、馬、十二疋、判官、夫、十五人、馬、九疋、主典、夫、十二人、馬、七疋、史生以下、夫、六人、馬、四疋、其、取、海、路、者、水、手、之、數、准、陸、道、夫、云々、但、依、犯、解、任、之、輩、不、在、給、限、とあり、長官、守、次官、介、判官、掾、主典、目



の事なり、二ルを今の大名たちの往かひし給ふに比ふれば、ひと少の事なりかし。  
● 續往生傳云、已於任国所愛之妻逝去、羨不堪、恋慕早不葬、歛觀、彼九相深起道心、遂以出家法名  
寂照とあり。

● 扶桑略記廿七、一条天皇長保五年秋時、参河守大江定基出家、入道法号寂照とあり。

● 豊川三明寺縁記には、大江定基、慶安力壽は二村、郷赤坂、弥太次郎が女にて、彼兼天は力壽が  
像なりといへり。

● 赤坂宿長福寺に力壽化石の墓あり、俗に女郎石といへり。此力壽のこと、源平盛衰記

四十五、貞應海道記仁治道之紀、續世継物語等にものせたり、委くは三川古哥名跡考にのへり。

● 仙覚万葉抄、ひなの都とは諸国の国府は田舎にとりての都なれば、ひなの都といふべしと  
あり、言葉集にもしれかといへり。

○ 貞竜の説に、国府は今の八幡社地なり、此廢府は、遠江、国府の例にて、天文十一年の比なり、諸  
国、廢府准之とあり。

○ 此国の国造は、国造本紀に、参河国造志賀高穴、總朝以物部連祖出雲色大臣命、五世孫知波  
夜命、定賜国造とあり。

○ 旧事記天孫本紀、宇麻志麻治命四世孫、大木食命、孝安天皇御代人なり。三河国造祖出雲醜大  
臣之子なり。○ 姓氏録中ノ、長谷部造神鏡、兼日命十二世孫、千速見命之後也ともあり。

○ 二は古事記神代卷、政建内宿、赤坂鳥大臣、定賜大國小國之國造云々とある時の事なるべし、さて

鈴屋大人の云はれたる如く、此時初めて定の玉ふには、あらず、是より前にしありつれど、此  
時更に廣く多く定の玉へりしなるべし、そは其国造本紀の首に、神武天皇の御時、大倭葛城  
凡河内山、代伊勢紀伊等、国造等を定め、玉ひて、又有功者、隨其勇能、定賜国造、誅戮逆者、量其功能、定賜縣  
主者、總任国造百四十四國といひて、大倭国造を始て、百三十五國、国造を載、左ればなり。○ さ  
て當國、国造、大木食命、知波夜命などは、室飲郡大木村、辺に住居、玉ひけん、と、按ふことは、既に  
官社私考下卷、出雲天神、茶又附録總社、茶にのへり。○ かくて國司の事は、孝德天皇の御代  
始て、任し玉ひしは、何人なりけん、詳ならぬ。

○ 国造は、國御臣の意にて、天皇の御臣として、其國の上として、其國を治むる人をいふなり。  
國司は、守介、椽目などを總いふなり、二ルをミコトモチといふは、命持にて、天皇の大命を

受賜り、負持て、其國の政を申す由の名なり、と鈴屋大人云はれたり。○ 又司は、官符につきて  
云ひ、守は、其人につきていふなり、靈異記に、國上と云りと、谷川士清いへり。

○ 仙覚万葉抄ハ云、みこともちとは、國司なり、國の守は、宣旨をもちて、任國に下りて、其宣旨  
を國の廳の節の上にかけて、其まへに、にして、政事をなす故なりと云り。

○ 續日本紀三ノ、慶雲三年九月甲辰、以從五位下坂合部宿禰三田麻呂、爲三河守、同六ノ、和銅六年八  
月丁巳、從五位下榎井朝臣廣國、爲参河守とあるなど、正史に見えたる始にて、次々の御世々

數多見えたり、こは、歷代事蹟考、其御代々の条に、いふべし。  
○ 行程の事、○ 雜令廿七ノ、凡度十分、爲寸十寸、爲尺、二尺二寸、爲大尺、一尺一寸、十尺、爲丈、又云、凡度、地、重



銀銅穀者皆用大此外官私悉用小又凡度地五尺爲步三百步爲里とあり。  
○延喜雜式五丁に凡度量權衡者官私悉用大但測景景合湯藥則用小者其度以大尺爲步以外如令とあり。

加、北は地を度るには、則大尺にして、小尺の一尺二寸にあたり、小尺は今の曲尺の寸に同じ、故に名は五尺大尺の違ひありとも、地に廣狭の異はなしと成形圖説に（へり、か北皇朝古への一里は、今の五町程にあたるなり。

○主計式廿四、参河国行程上十一日下六日とあり、當社は彼書に拠て記せるなるべし。  
○行程は京都より国府までを（ふ、今の三十六丁、一里にて積北は四十八里半なり。

○公式令廿九、凡行程は、馬は日に七十里歩は五十里、車は三十里とあり。  
○大塚氏の説に、上世は貴人と賤賤とにて旅行の日數過半参差ありと見えたり、貴人は輿馬に駕して行く故、其輿に役せらるゝ、人夫の勞煩をいとひ、其供奉の人多ければ、休息旅糧等の義も區々にては、かどりがゆるものなり、依て貴人の行程の日數多き定めと見ゆといへり、此説によれば、上は一日に四里半程を行き下は八里程を行く定なり。尚考ふべし。

管八 田六千八百二十町七段三百十歩  
○管八とは八郡を管るといふ事なり。  
○拾芥抄、田數七千五百十四町

○栗原信充が應仁武鑑に云、吉良左兵衛佐義貞居城三河吉良西條三河八郡田七千五百十四町（内一色保千七百七十町一色家領也）の獲稻三百五十二万七千束（此直錢廿一万千六百貫文なり此米今量十七万八千八百八十三石一斗五升に當）米六万七千七百六石四斗五升余（四斗入二万三千三百六十二俵余）三河守護職内、千四百七十七石一斗六升二合五勺は一色家領より收心。

○此時吉良左京大夫義勝は同国東条に居城して、幡豆郡千三百町を領す。  
○一色左京大夫義直は丹後宮津に居城して、當国設楽郡一色保千七百七十町を領す。

○運歩色葉集 田數七千五百十五町 天文十六七年、撰むたる書なり  
○以呂波字類抄 本田七千五百十四町

○海東諸国記 三河州郡八、水田八千八百二十丁 朝鮮人ノ著書  
○江源武鑑 天文二十二年日本國 三河国總高二十九万七百十五斛 伊勢貞文云、江源武鑑といふ書、板行にありて京師家の古記録の様に似せて作りたる偽作物なり、用ふべからずと

○日本城主記 高三十三万六千石、田七千五百十四町  
○和漢三才図會 高三十五万八千八百八十五石餘  
○三川雀 高三十五万八千八百八十五石九斗二升  
○二葉松 高三十五万八千八百八十五石八合  
○刪補松 古高三十五万石、余田七千五百十四町、當代高三十五万八千八百八十五石余



○日本鹿子六  
知行高三十三万六千石

正公各二十萬束

本稻四十七萬七千束

雜稻七万二千束

○正とは正税のことなり。正税は公田の租地子雜稻奉天子者都曰正税ともまた正税は田年貢なり、少しも不足なく御倉へ納むるなりといへり。  
上つ代は租税みな刈穂のまゝにて上納し故みな何束といへり。

○公とは公廩のことなり。或説に公廩は當年貢なり、国司并諸役人の役料は此内にて賜ふなりといへり。○制度通九云、公廩田と云は廩は官舎の事にて役屋鋪なり、其所務を所公用に供するなり、續日本紀を考ふれば、未進をつくふ爲に設けらるゝと見えたりと云り。

●職官令義解至、公廩云々

●考云国守以下、役料をつくる田地を支配する役屋敷なり。

○主税式、諸国出挙正税公廩雜稻、茶に

參河国正税公廩各二十万束、国分寺料二万束、修理志摩国分寺料三千束、文殊會料二千束、修理池溝料三万束、救急料二万二千束とあり。

按、其束数を数ふれば、合て四十七万七千束ありて、當抄の本稻の買数に合へり、また當抄に雜稻七万二千束とある数、国分寺料池溝料救急料の三ツを合せたる数に合へり。

○同式、廿六、凡公田、獲稻八上田ハ五百束、中田ハ四百束、下田ハ三百束、下々田ハ一百五十束、地子各依田品、令輸五分一、略其租一段穀一斗五升町別一石五斗皆令管人輸之とあり

○田令義解、初丁段、地獲稻五十束、束稻春得米五升とあれば上田一段にて五十束とれるを米に搗きて二石五斗あり、此内を一斗五升租に奉りて、殘米二石三斗五升作人の物になるなり、五分一を輸さしむとあれば五分一は二斗五升合なるなり、五分一よりは少し重き租なり。

○因に云、租税の事の始は須佐之男命の御荒によりて、宇氣田智命の御体より生出つる五穀を天熊大人悉取持て、天照大御神に奉りし時に、此物どもはうつしき青人草の食て活べき物と認給ひて、天邑君を定めて、其御田に殖始め給ひ皇孫途々藝命の天降まし、時天照大御神の詔命に以吾高天原所御斎庭之種亦當御於吾兒と詔給ひて、其瑞穂を給へり。故そを持下らして、天下の万民に殖しめ給へるを租税また御調物を貢る其根元なる故御代々々の天皇尊其大業を継々に聞食給ふに依て、先御即位の始に、大嘗會を行はせ給ひ、先其初穂を天照大御神を始奉り、天神地祇に奉り給ひて、殘りをは天皇尊の聞食し、并百官等にも賜ひ、天下の青人草に八十の櫛事あらしめ、其作りとつくる百穀物を雨風の災あらしめず、豊登しめ給へと、乞祈給ふ御事なり、また毎年に行はせ給ふ新嘗祭といふも、此はこれにて、其年の初穂を奉り給ひて、上件に如く祈り給ふ御祭祀なり。

○かくて人の世となりては、崇神天皇紀等に、其十二年秋九月始、校人民更科、調役此謂男之強之調、女之手末之調と見え、神功皇后紀、新羅国の八十船の調を貢る事見え、異国ともより



朝貢する事仁徳天皇紀廿二雄略天皇紀廿四等に見え、海表諸蕃遣使進調と清寧天皇紀廿五に見え、万民に三載の間悉除課役息百姓之苦給へる事仁徳天皇紀廿二に見えたり

○さて郡縣の制となりて後は、孝徳天皇紀廿五白雉三年正月班田既訖、凡田長三十歩爲段十段爲町、段租稻一束半、町租稻十五束とあり。此時の御定は一段の租米七升五合一町の租米七斗五升なり。コレヨリ先代ナリ御制令ノ如クナリキ。

○また大空年中の制は、田令ヲ段租二束二把、町租稻二十二束とあり、此の時は一一段の租米一斗一升一町租一石一斗なり、孝徳紀のよりや、重し。

○文武天皇紀廿三、慶雲三年九月遣使七道始定田租法、町十五束とあり、此時一一段租七升五合一斗一町租二石五斗なり、此一条イカアラシク可考。

○元正天皇紀廿九、養老六年閏四月、官符ニ公私出挙取利十分之一とあり、此れ一一段租二斗五升一町租二石五斗なり、此一条イカアラシク可考。

○延喜の御時は上に挙つる如く一一段租一斗五升なり、養老の御制よりや、軽きなり。  
○上に挙つる如く上つ御代は、租税の輕かりしを、次々戎風なる花美にうつり、其うへ將門純友などが逆亂保元平治の亂、尚源平の戰など出來て、公にも事繁く、武士なども多くなれりしを、まして頼朝卿惣追捕使に任られて、不論權門勢家庄、公可宛課兵糧米、段別五升と東鑑に挙たる比より、繼々に重くなり、足利の末の亂世より、猶また重くなりて、今の代御代に至りても古へに復へしがたき時勢にたれりなるべし。

○應仁武鑑云、文治元年諸国平均守護を置き、段別五升の兵糧米を宛課せらるしは、後に所謂五十合一の武家役の根元なり、たとへば一段の田に稻五十束を獲べく、一束の稻に米五升を得る定なればなり。足利尊氏將軍ハ草創の日事多端にして、改革にいとまなく、万事鎌倉の旧に從はれしに、義詮將軍の時に、執事尾張入道道朝改て廿分一となし、是を所領役と名けり、其法田一段の稻五十束の内二束半を割て守護に納め、残り四十七束半を二分して廿三束七分五厘を領家に收め、廿三束七分五厘を農民得分となせり。○へ太平記東寺文書正本文書、細尾古記等に散見する檢地目錄によりて記す、但二束半に米一斗二升五合を得べし、此量は長保延文の官升にして、方五寸深二寸五分、積六十二寸五分、(今升九合六勺九撮七七勺容)を法とす。

○さて公廩の事は  
○主税式廿六、凡国司處分公廩差法、若大上国長官六分、次官四分、判官三分、主典二分、史生一分、中国无介則長官五分、下国无椽則長官四分、貢外司者各准當負其国博士醫師准史生とあり、此處分は

○孝謙天皇紀廿二、天平宝字元年十一月、太政官處分、比年諸国司交替之日、各貧公廩競起爭論、中今故立式、凡国司處分公廩式者、惣計當年所出公廩先填官物之欠、負未納、次割國內之儲物、後以見發作差處分とありて、主税式の如く處分を挙げたり。

○猶續紀九十六、同廿二、同廿七、等に公廩の事をいへり、皆官物又負未納のたのに設らる



たふ事にいへり。

碧海

阿乎美 ○民部式ニテ碧海郡 ○拾芥抄ニテ碧海郡

○姓氏録ニテ青海首推根考命之後也 ○同石京皇則御立史云々持統天皇御代依居参河国青海郡御立地賜御立史姓

○続紀ニテ参河国碧海郡 ○同廿六ノ参河国碧海郡 ○類聚国史ニテ同上 ○本朝文粹

○万葉集ニ柿本人麿ノ哥ニ青角髪依網原人相鴨石走淡海縣物語とある淡海縣を鈴屋大人は遠江国司下る道三川ヨサミ原にて詠るなり。淡海アカタハ任国の遠江をさして云

リと云はれたりされと仮名は違へれど此郡に由ありけん可考。万葉集卷三ハヨサミハラニ人モアハヌカモトアリ注ニ人モハ人ニモトイフベキカクイヘリ後ニ流見テカヘル人モアハナントヨメルモ同シトアリ安全

○伴信及主云。主税式ニテ尾張緑海郡とあり尾張ニ此郡名なし縁は縁の誤にて緑海郡なるかといへり敬雄按雜式ニテ凡太宰貢雜官物船到綠海國澤引令知泊処とあれば縁の誤にはあらざるべし。

○此郡今も碧海郡と称て高七万八千七十石余ありて村數ハ三川雀に百廿四村ニ葉松に百廿六村三川堤に百四十三村を挙げたり。

賀茂

○民部式 ○拾芥抄同 ○當郡賀茂郷あり其より出たる郡名なるべし。

○此郡今も賀茂郡ト稱テ高五万九千八百八石余アリ。 ○村數春雨咄ニ百廿四村ニ葉松三百四十七村三川堤三百七十一村 ○刪補松ニ三百五十七村とあり。

額田

○民部式 ○拾芥抄同 ○當郡額田郷あれば其より出たる郡名なるべし

○姓氏録ニテ額田部湯坐連天津彦根命子明立天御影命之後也允恭天皇御世被遣薩摩國平車人復奏之日獻御馬一疋額有町形廻毛天皇喜之賜姓額田部也。

○此郡今も額田郡と称て高四万三千九百四十四石余あり三川雀には四万二千八百十石余とあり。○村數春雨咄ニ百五十四村ニ葉松百五十村三川堤百六十八村刪補松百五十七村を挙げたり。

幡豆

○民部式ニテ ○拾芥抄同 ○神名式幡豆郡

○三代実録ニテ貞觀元年四月十日是日神祇官ト以参河国幡豆郡爲悠紀同十七日悠紀国奏国俗歌舞。

○同廿三元慶二年六月二日勅以参河国幡豆郡荒廢田一百町賜孟子内親王爲一



身田。

○常郡幡豆郡 又徳頭トモ書リ と称て高四万六千六百十八石余あり、村員は春雨咄二百三十六村、二葉松二百二十九村、剛補松に百三十二村、三川堤二百三十七村を挙げたり。

○庸業云幡豆地勢今郡より東西郡邊迄をも云ひしか。  
宝飲、西郡国坂なと云ふ所境なるべし。

寶飯

○民部式 〇神名式 九 〇拾茶抄 四同

○古事記 〇開化天皇の茶に朝廷別王者三川之穂別之祖

○国造本記 〇穂国造泊瀬朝倉朝以生江臣祖葛城襲津彦命四世孫免上足尼定賜国造とあり。宝飲郡免足神社は免上足尼を祀ると社説に云り、或は官社私考上卷にいとへり。これ其本にて旧

くは穂の郡なりけむを大人等の云ルたる如く、民部式 〇凡諸国の部内郡里等名並用ニ字必取嘉名とある御制に依て、其一首の名は二字に書くに足ざりし故其韻音字を加て、木国を紀伊衣郡を頼娃、龍国を嚙吹など書る例に依て、寶飲と二字になせしなり、此例によれば、ホオと唱へて可からむ。

○扶桑畧記 〇宝飯郡、卜部兼敦の語社根元記に宝飲郡に作れり、日本鹿子、宝飲郡とあり、然るを後に飲を飯に誤り唱へし、ホイと誤りしなり、此抄の比はホの郡と唱へたりと見え

宝飯と記しながら、唱注には穂と記せり、伴主云日本紀ニ飲を飯ニ作る多し、五音海篇に飯與飲同とありと云へり、飲を飯と誤りし例は、當抄大和国十市郡飯富あり、神名式に多に作り、遠江国磐田郡飯寶は、殘風土記ニ飲宝と作り、万葉ハに大乃浦あり、上總国望陀郡飯富は、神名式、古本、飲富と作り。

○當郡砥鹿神社のます山を本宮山と称て、當国第一の高山にて、山の高五十町あり、社は山の頂上に在り、若くは穂宮山の意にて、此郡の名は此山によりて号けたるなるかざるは、此山より流氷出る川を宝川と云ひ、其つゞきには本野源ありて、本野村と云ふもあり、又其近き辺に豊川村あり、此村に宝御前といへる小社あり、これら皆ホ、川、ホ、野、ホ、村の意ならむか可考。

○續日本後紀 〇宝飯郡とあるも、飲を誤りしなるべし。  
當郡今宝飯郡と書て、ホイと唱ふ、高五万二千二百六十六石余とあり、〇村数は春雨咄、百三十六村、二葉松、百四十村、三川堤、百十四村、剛補松、百四十三村を挙げたり。

設楽

志太良

○民部式 〇拾茶抄 四同

○民部式 〇首書云延喜三年八月十三日割置設楽郡とあり、されと式は延長二年奏上の書なるに、神名式、石座神社を宝飲郡に收られたるは、未だ訂しあへずは、さりしなるべ



し。

○国大曆云曆應二年伊勢國不通達之間先被行御上用參河國設楽山畢とありこは大神宮御遷宮御材木を採れるなり。

○シタラはヒツの音をシタに用たる例なり達良忍美と同例なりと鈴屋翁いはれたり。

○當郡今も設楽郡と称て高二万五千三百四十石余あり。

○村數ハ春雨咄二百六十五村二葉松百八十四村剛補松百八十七村三川堤二百十六村を挙げたり。

### ハヤ名 世名

○民部式セニ ○拾茶抄四同

○當郡八名郷あり此郡の本土なるべし

○世系志云平姓高力依直鎮云々賜三州梁郡

○類聚符宣鈔任諸國郡司事条云

太政官符參河國司印

ハヤ郡主帳外從八位上若卒部首統忠外少初位下參河吉種考解音

石公年二月十三日補任如件國宜承知依例任用符到奉行

辨

永延二年七月廿三日

史

○當郡今も八名郡と称て高一万八千三百六十五石余三川堤あり

○村負は春雨咄五十三村二葉松七十村三川堤八十九村を挙げたり

### 渥美 阿豆美

○民部式セニ ○拾茶抄四同

○當郡渥美郡あり是より出たる郡名なるへし

○三代實錄貞觀二年八月十四日參河國渥美郡村松山中云々

○大神宮雜事記參河國渥美郡一宿御坐國菴進渥美神戶

○東鑑御神領三河國鮑海本神戶新神戶

○當郡今も渥美郡と称て高四万六千六百七十四石余あり

○村負は春雨咄八十一村二葉松九十村剛補松九十三村三川堤八十六村を挙げたり

○民部式參河國上管碧海賀茂額田帷豆寶飯設楽八名渥美云々右為近國

○拾茶抄參河近八郡碧海賀茂額田帷豆寶飯八名渥美設楽田七十五十四町

○人國記云參河當國の風俗は氣勝之人の長七七八のびず其言語賤しけれども實儀多し事を約して遂げざることなし、親子の間も互に耻らひ虚談することなし然れども偏屈にして我を立て人の謂を聞入らず依之命を棄る者ま、有之武士の風義善多して女もけなけに耻を知る所なり。

○二葉松云按東限東海路高師山西限今岡邑塚川十四里半而為西東焉積六町一里則八十七



里南限海辺、伊良湖崎北限山中、津貝村、堺三十一里而爲南北、馬積六町一里、則百八十六里。

碧海郡

智立

チリフ

○今池鯉鮒駅

○原本傍訓チタチとあるは誤なるべし

○神名式知立神社 ○文徳実録知立神 ○三代実録同 ○同智立神 ○国内神名帳知立大明神 ○貞應海道記知立鯉鮒 ○元和四年吾妻路道之記知立鯉鮒

菜女

○伴主云、字鏡、菜は志波とあり、神名式に當郡糟目神社あり、若くは旧來粟女とあり、しをか誤れるにや、糟の古字曹如此、作り、菜にも作りつらめ

○又或説、菜女は芋母の寫誤ならむか ○又知立の南築地と云ふ村あり、女は地の誤にてはなきか

○又笹目村あり、條女の誤か可考

刑部

○姓氏録、刑部首、大明命十七世孫屋主、宿禰之後世 ○八名郡長、彦村産土、神菜宮、大明神、明德三年、鰯口銘、刑部御厨、因清瀉、赤、非、率とあり

依網

○姓氏録、依網、宿禰、日下部、宿禰、同祖、彦坐命之後世 ○同依羅連、饒速日命、十二世孫、懷大連之後世

○万葉集、七青角、髮依網、原人相、鴨石走、淡海縣物語爲

○岩瀬尚則云、万葉ニアラミツラとあるは、青海面の意にて、碧海郡の海辺をさせりと聞ゆ、是は古の街道は、生田より小豆坂にかゝりて、明大寺六名に出渡村にて、矢作川を渉りて、菜子へ出、安城の北上、茶を通りて、野原に出、笹目、重原を経て、知立へ出たるなり、かゝれば、笹目はヨサミの訛れるなるべしと云り

鷲取

和之止利 ○神名式、和志取神社あり ○度會延経、神名式首書云、景行天皇、皇子氣入彦命、捕逆臣於此地、故号鷲取乎

○姓氏録、上御使、朝臣、出自、諡、景行天皇、天子、氣入彦命、後世、登田天皇、御世、御室、經使、大王、生等、通、逃、不、仕、天皇、遣使、尋求、並不復命、於是、氣入彦奉詔、拾遺、於、參河、國、捕獲、參来、天皇、嘉令、使者、賜、姓、御使、連也



續日本紀ニ合とあり、安くは官社私考上卷ニ云リ。

谷部

官隆云郡郷の名は必す二字にて書くへき制なれば、長の字の脱けたるにはありて省

かりたるなるべし。

○姓氏録ハテ、長谷部の造は神饒速日命十二世孫、千速見命之後也。○續紀廿九、參河国碧海郡人長谷部文選

○旧事記セテ、景行天皇太子五十狹城入彦命、三河長谷部直祖とあり、當抄は長の脱たるにてハッセベ歎されと上総国に谷部を波世倍とあり。○本郷村を古くは長谷部といひ、其産土神本郷大明神の社地をハセベの森といへり。

大市

於保以知 ○姓氏録下、大市首出自任那国、都怒賀阿羅斯止也。

碧海

阿乎美 ○此郷今未詳といへとも、那名、此郷より出たるなるべし。

○今播豆郡に巨海と云ふ村あり、當郡の境なり、万葉七、淡海縣とあると、當抄加賀国ニ大海於保美とあるなどを按じ巨海はオホミにて、坂字は違へれど田あるか可考。

横札

○伴主云若くは模札歟、ハシムレと云ふ地の名あり。○柵尾高山寺の古文書に

積一本

櫃字を多く積に作れり、日本靈異記にも、○大神官雜事記にも、御鑑櫃とあり、今設楽郡宇連村あり、可考。○字鏡、櫃を牟久と訓り。

○正寛三辨谷望之、日本靈異記攷證中卷セテ云

○櫃即匱字俗、从木作、櫃以別匱之字、又省作、横漢書司馬遷傳云、細石室金鎖之書、注、鎖與匱同、與櫃字同、義、日本後紀三代実録、大神宮儀式帳、西大寺資財帳、東大寺所藏仁壽二年尼證、撰寄附狀、本朝文粹、大江匡衡願文、古板、本性靈集等並用此字、和名鈔、郷名有横禮、字鏡集亦横、訓ヒツ、按、説文、櫃、楛也、非此用。

皆見

○万集集三、河有ニ見、自道云々、一本、水河乃ニ見之、自道とあり、皆見はフ

○ツネナリ云ニ見の道、渥美郡濱辺の道なるべし、考あり。

○大神宮儀式帳、穴往皆鹿国、○當抄備中国皆部多一はアサミ、攷可考。

河内

○今加茂郡下河内村、播豆郡河内村、設楽郡川内村あり。○神皇抄河内、御園

○大神宮建久年中行事、夏初十日、正梅、栞宜、各着一殿、在櫻膳云々。件所、三河国所在河内、御園也。



櫻井

○今櫻井村あり  
○国内神名帳從五位下櫻井天神坐宝飯郡。  
○姓氏録櫻井朝臣石川朝臣同祖藤我石川宿禰四世孫緒目宿禰大臣之後也。

大岡

○今大岡村あり。  
○姓氏録下大岡忌寸出自魏文帝之後安貴公也。大泊瀨幼武天皇御時率四衆皈化男龍辰貴善繪工小泊瀨稚鷦鷯天皇美其能賜姓首一五世孫勒大壹惠守亦工繪才天命開別天皇御世賜姓倭畫師一高野天皇神護景雲三年依居地改賜大崗忌寸姓也。

蘇野

○アサフノ 駒 ○伴主云字鏡二筋阿佐弥蘇止也呂とあり今加茂郡蘇生村あり當郡  
○アザミノ 駒 隣北リ越前敦賀郡蘇生野アザノ俗アゾノ村ありと云へり。  
○牟仁天皇紀前瓊入姫とあるを古事記には阿邪美。

驛家

○ウマヤ 駒 ○兵部式サハ傳馬碧海宝飯郡各五匹とあり宝飯郡にも驛家あり。  
○エマヤ 駒 ○驛家を天武紀サハムマヤ伊呂波字類抄マヤ又ママヤ名目抄には工カと訓めり。  
○扶桑略記神功皇后五十年庚午二月始造路驛北傳日本紀

○厩牧令凡諸国須置驛者每三十里置一驛若地勢阻險及无水草处隨便安置不限里數云々。  
○又云凡驛各置長一人取取戸内家口富幹事者爲之云々。○又云凡諸国置驛馬大路謂山陰道二十疋中路謂東海東山道其自外皆爲小路十匹小路五匹云々。○又云凡驛傳馬每年国司檢簡其有大老病不堪兼用者隨便貨賣得直若少驛馬添驛縮傳馬以官物市替。  
○兵部式サハ凡諸国驛家令国郡司專當其名每年附帳申上其公私行人停宿致損者公私録名申上自余量筆科決若專當官司及取長等女有許容亦処重科。  
○兵部式サハ諸国驛傳馬条云參河国驛馬鳥補山綱渡津各十疋傳馬碧海宝飯郡各五疋とあり。○當抄碧海額田宝飯三郡各驛家あり。○鳥補は未詳補一本補は作北はトリトラへと訓て鷲取乎。當郡鷲取郷あり。国史記といふものには易補の誤なりといへり。山綱は額田郡にて藤川宿の東南にあり渡津は宝飯郡宿村なり尚宿驛のことは古蹟雜考にいふべし。

小川

○今小川村あり。  
○諸本ニハス 治本ニアリ ○国内神名帳小川天神あり。  
○姓氏録下酒人小川真人男太跡天皇皇子菟王之後也とあり。今小川村と酒戸村と隣れり可考。  
○續日本紀十八丁孝謙天皇天平勝宝二年七月甲辰參河国海真玉依賣一産三兒給正統三百



東乳母一人とあり。此事類聚国史五十四多入部十にも載て。海直とあり。又  
○日本後紀四桓武天皇延暦廿年六月甲辰。参河国碧海郡人漢人部千倉賣。一産三子。賜稻  
三百束と見えたり。ニルも類聚国史同卷に挙て。千倉賣とあり。令表解に東稻春得米  
五升とあれば。十五石の米を賜ひしなり。逸史十ノ八にむ

額田郡

新城

○當郡仁木村あり新田の如く音便にニツキと唱ふるには非ざるか日本紀十九ノ新  
城をニヒキと訓り大和国添下郡新木村のことなり。又設楽郡に新城と云ふ処  
あれとも甚く隔れる上旧くは大野田と号けるを天文元年菅沼氏新に城を築きたるとき  
改むと云り。

鴨田

○今鴨田村あり国図に大樹寺とある村なり。

位賀

○今伊賀村又伊賀谷村あり。

額田

○此郷今未詳といへども當郡の本土なるべし。

麻津

○今馬頭村あり

六石

○ムツナ ○今六名村あり。○寛知集六名多村あり。  
○ムツナタ ○石は名の誤なるべし。

大野

○今八名郡又加茂郡大野村あれとも甚く隔れり。  
○又當郡大井野村あり可考。

○姓氏録大野朝臣豊成入彦命四世孫大荒田別命之後世。

驛家

○兵部式参河国馭馬山綱各十疋とあり。今當郡山綱村あり。

賀茂郡

賀茂

○此郷未詳といへども當郡本土なるべし。  
○當郡鷺鴨村あり可考

仙陔

○今千田村あり  
○新拾遺集中納言時光 時を得て千田の村人いくちたびと北とつきせぬ早苗な



るらん とあり。松葉集秋の寐覚等、水勘とあり可考。

伊保

○今伊保上下二村あり、○神名式なる射穂神社は上伊保にあり、国内神名帳伊保天神あり。

○兵部式廿八ノ参河国取馬茶に鳥補とあれば、鳥補の誤なりと国史記云り。

○古昔の官道は尾張、二村、取より鳥補、取衣、郷御館、郷を経て藤川の南東なる山綱、取に通すと内山氏の説なり。

○旧事記七ノ景行天皇皇子五十功彦命三川、三保君祖とあり、二は五の誤にて五保かと新家千足主云り。

挙母

○今挙母あり、内藤守主城地なり。

○古事記廿ノ垂仁天皇皇子落別王者三川之衣君之祖也旧くは衣と一字に書しを、国郡郷の名必ず二字に書くへき御制によりて、二字に改めしなり。○本居大人云。タヂマを但口馬、ミマサカを美口作、コロモを挙口母、みな中の字を略て書る例なりといはれり。○夫木抄三ノほとちかく衣の里はなりぬらむ二むら山をこえて來つれば、藤原経衡。左注、此哥は二村山をこゆとて、ころもの里を見やりてよめると云々とあり、尚古哥多し古哥名蹟考に云り。○ある説に知立駅の東なる里村にこれへの衣の里なりともいへり。

高橋

多加波之。○今挙母辺を高橋の庄といふ。○御領目録高橋庄。○水戸本太平記、楠正成赤坂を忍落て三州高橋庄に塾居すとあり、今挙母、郷に其跡在て、今も字を楠と云、と三川堤に云り。○姓氏録上ノ高橋朝臣阿倍朝臣、同祖大給興命之後世。○又云高橋臣阿部朝臣、同祖大彦命之後世。

山田

○伴主云或人説に今の上山下山なり。○今渥美郡に山田村、播磨郡に小山田村ありと甚く隔れり。

賀彌

カミ。○一本に賀弥とあるはカミ、次の信茂もシモと訓乎。今碧海郡に上村下村あり、矢矧川、辺にて當郡に近し、これなるか可考。

信茂

シモ。○上の賀弥にむかひてシモ、寂康正二年、葦内裏段、録国役引付、三河国下郷河路村とあり、今河路村は設楽郡にあり。

幡豆郡

能束

○能は熊の川の缺たるにて、束は来を誤れるにて、熊來なるべし。



○神名式當郡久麻久神社国内神名帳熊來明神とあり今熊子村に在り。○神名式出雲国熊刀利神社ありそを風土記には詔門社とあり。此熊は能の誤なり。又同式に束持神社とあるを風土記に束待社とあり。是ら互に誤れる証例なり。

八田

○今矢田上下二村あり。寛知集八田上下二村あり。○今碧海郡に八田村あり當郡と甚く隔れり。

○矢田にエニハと云ふ処ありて三代実録貞觀元年大嘗會幡豆郡に倭紀とすとある地なること坂部政幹の考あり。

意太

○今小山田村あり又加茂郡又設楽郡に小田村あり可考。○国内神名帳宝鏡郡小田天神あり又小田洲村あり。

磯伯

○孝徳天皇紀十五河辺臣磯泊と云人あり、の伯は泊の誤なるべし。○国内神名帳當郡磯泊天神あり今角平村の産土神志葉都大明神あり。○万葉集高市連黒人の哥四極山打越見者笠縫之島榜隱棚無小舟。とあり契沖古今餘材抄に此四極山參河国磯泊郷に有べしと云り。此事委くは古哥名績考にべし。

大川

於保加八 ○今當郡乙川村あり此水、又額田郡に大河村あり可考。

大濱

○今碧海郡に大濱村あり古、は其近播豆郡に属りと云り。○又宝飯郡に荒木村あり印国に脱せり播豆郡の境なり。濱宮をアラキノミヤと訓るを思へば由ある可考。古今集大あらしきの森の下くさ老ぬれは駒もすさめずかる人もなし。

新嶋

崎一本

修家

○スカと訓むへきか。按當郡横須賀村あり。○新家正幸云大濱修家とあるは鷲塚なり。此村碧海郡なれと古くは播豆郡に属りと云り。

寶飯郡

○飯は飲の誤なること既に郡名の下に云り。

形原

加多乃波良 ○今形原村あり。○神名式形原神社



○国内神名帳形原明神 ○總国風土記形原郷形原神社あり。  
○續日本後記<sup>卷八</sup> 承和六年十一月云々。五色雲見<sup>見</sup>宝飯<sup>宝飯</sup>郡形原郷  
○唐業云今の形原は幡豆郡なるへく寛中<sup>寛中</sup>原といふへき処にあらず縣の原にて八幡村邊なるべし。

○正實云。八幡村辺なるべしといふ説<sup>ハ</sup>うけがたしそは當抄<sup>當抄</sup>宝飯郡第一の郷名形原にてその次<sup>次</sup>赤孫<sup>赤孫</sup>美養<sup>美養</sup>御津<sup>御津</sup>などある次第にもたかひ文字も古のまゝに出てカタノハラと唱へ來れるを非じとはいか<sup>ハ</sup>。○形原は縣原にはあらでしひていはゞ浮の原の意とも云べし。西郡を旧く蒲形と稱へ來れる 形も形原の形とともて濁の意なるべし

赤孫

安加比古 ○神名式<sup>神名式</sup>赤日子<sup>赤日子</sup>神社。○文徳実録<sup>文徳実録</sup>三代<sup>三代</sup>実録<sup>実録</sup>赤孫神。

○国内神名帳<sup>赤孫大明神</sup>赤孫大明神。○總国風土記<sup>赤孫郡同社</sup>赤孫郡同社あり。○此社今<sup>今</sup>上之郷村<sup>上之郷村</sup>に在り  
○此村今も形原と三谷との間に在て當抄の次第<sup>次第</sup>にかなへり。委くは官社私考<sup>官社私考</sup>上卷并總国風土記考<sup>上卷并總国風土記考</sup>に云り。

美養

ミヤ ○今三谷村あり。赤孫と御津との間にありて當抄の並にかなへり。  
○貝原氏の吾妻路<sup>吾妻路</sup>記及東海道<sup>東海道</sup>取路<sup>取路</sup>鈴等<sup>鈴等</sup>にミカヒ郷と云るは誤なり。群書類<sup>群書類</sup>從文安年中<sup>從文安年中</sup>門番帳<sup>門番帳</sup>四番宮<sup>四番宮</sup>三河入道<sup>三河入道</sup>とあり

御津

美都 ○神名式<sup>神名式</sup>御津神社。○文徳実録<sup>文徳実録</sup>御津神。○国内神名帳<sup>御津大明神</sup>御津大明神。○總国風土記<sup>御津庄御津神社</sup>御津庄御津神社あり。○今此社<sup>今此社</sup>御津庄<sup>御津庄</sup>廣石村<sup>廣石村</sup>に在り。今御津と云小稱<sup>小稱</sup>は其近村<sup>其近村</sup>十二村の庄の号となれり。されど今遠き所よりは廣石村をさして御津と稱へり。委くは總国風土記考<sup>總国風土記考</sup>に云り。

○日本紀私記<sup>日本紀私記</sup>に水門美止とあり。ミトは港の意なるべし。

宮道

美世知 ○国内神名帳<sup>宮道天神</sup>宮道天神あり。○東鑑<sup>東鑑</sup>建久元年十二月源賴朝上洛

茶に十九日入夜令宿<sup>宿</sup>官路山中<sup>官路山中</sup>。これは今の山中の元宿なりと云り。

○催馬樂<sup>催馬樂</sup>貫河<sup>貫河</sup>にやはぎの市に<sup>市に</sup>くつかひ<sup>くつかひ</sup>にかむ<sup>にかむ</sup>くつかひ<sup>くつかひ</sup>のほそしきを<sup>ほそしきを</sup>かへ。さしはきてうはもとりきて<sup>もとりきて</sup>みやち<sup>みやち</sup>かよはむ。

○後撰集<sup>後撰集</sup>卷五<sup>卷五</sup>「君かあたり雲<sup>雲</sup>みに見つ、宮路<sup>宮路</sup>山うち越え<sup>越え</sup>ゆかむ道<sup>道</sup>もしらなく」とあるを始<sup>始</sup>め古哥<sup>古哥</sup>あまたあり。委くは古哥名蹟考<sup>古哥名蹟考</sup>にいへり

望理

モリ

○總国風土記<sup>望理郷</sup>望理郷有て其貢同<sup>貢同</sup>御津庄<sup>御津庄</sup>とあり。今御津より七丁許<sup>七丁許</sup>北東<sup>北東</sup>に森村<sup>森村</sup>あり。其隣村<sup>隣村</sup>国府<sup>国府</sup>に守公神社<sup>守公神社</sup>あり。決<sup>決</sup>く此村<sup>此村</sup>なるべし。斯<sup>斯</sup>北<sup>北</sup>はマカリの傍<sup>傍</sup>訓<sup>訓</sup>は誤<sup>誤</sup>乎<sup>乎</sup>。されど當



妙播唐国望理郷あり。是もマカリと訓リ。委く総国風土記考に云リ。マカリヲ約むルはモリとなると云リ。

○森村天王社鐘銘 寛正五甲十一月十五日佐竹清安入道とあり。

賀茂 ○今八名郡賀茂村あり。當郡と吉田川を隔てたるのみなり。恐くは此村なりむ

度津 ○兵部式廿八参河国取馬鳥補山綱渡津各十疋とあり。○東鑑五十一

建長四年三月宗谷親王關東御下向ノ条に。廿三日晝は鳴海夜は矢作。廿四日晝は渡津夜は橋本とあり。按ニ渡は渡より誤るにて渡津なるべし。度津は古の駅にて。今の宿村。其趾にて小坂井迎まてに係れる駅なるへし。さるは苑足神社の應安三年の古鐘銘に、宝飯郡渡津郷免足大明神とあり。實にも古は所謂然菅渡の渡口なりければ度津と約るも亦なりけり。委くは古哥名蹟考に云リ。

○扶桑略記廿九参河国宝飲郡渡津郷とあり。

篠束 之乃都加 ○今篠束村あり。○総国風土記ニ篠塚郷あり。○国内神名帳に篠束

東明神あり。此郷のと委くは総国風土記考に云リ。

宮嶋 美世之末 ○今牛久保長山近を宮島の庄と称へり。

豊川 止與加波 ○今豊川村あり。○東鑑五十二嘉禎四年二月將軍賴經卿上洛の条に

七日著御橋本駅八日云々著御豊河宿 ○同廿二同十月同郷歸洛ノ条ニ。十八日云々入御矢作宿云々。十九日云々著御豊河駅。廿日出御於本野原云々西越橋本御宿云々とあり。斯れば豊川は當時の宿駅にて今の古宿村。其跡にて今豊川村係て其駅なりけむ。○夫木集雜六「かり人のやはぎにこよひやどりなばあすや渡らむ豊川の浪。

○貞應二年海道記に。豊川の宿にとまりぬ云々。○仁治三年 道之記に。豊川といふ宿の前を打過るに。あるもの、いふを聞けば。此道はむかしよりよくるかたなきりし程にちかき頃概にわたらふづの今道といふ方に。旅人多くかゝる間。今は其宿は人の家居をさへ外にのみ移すなどといふなる云々とあり委くは古哥名蹟考に云リ。

雀部 散々倍 ○今一宮辺をサ、べの郷といへり。

○當柳上野、国雀部とあり 佐々伊部。元サ、キベなるを音便にサ、べと唱へ又サ、イベと呼なれたるなるべし。○古事記中神武天皇皇子神八井耳命者雀部臣雀部造祖也。(姓氏録左京皇別又和泉国皇別にもあり。○同 建内宿称之子許勢小柄宿称者雀部臣之祖也。



○旧事記 ヲ 王勝間山代根古命雀部連祖

驛家

○兵部式 サシ 傳馬。碧海郡宇飯郡各五疋。

宣隆云此寶飮郡の訓さまのこと當抄を検するに

山城国の郡名紀伊 薩摩の郡名穎娃 江和泉国日根郡の郷名呼喚 備中国下道郡の郷名 弟翳 筑前国早良郡の郷名毘伊 備中国の郡名都守 津などの例に依らばホと一言に

唱ふへく。

又大隅国の郡名嚙吟 曾於遠江国引佐郡の郷名滑伊 肥前国基肄郡の郷名基肄 本甲な

との例に依らば和と唱ふへきか。されども當抄に正しく穂と注せしを見れば。一言に唱 ぬる方宜しからむ。

八名ノ郡

宣隆云神亀の詔に嘉名とあるも好字と同じ意はへにて嘉字と といふことなるべし。さて其時字を改めたるはあれども名を 改めたる例なければ。此御考いかあらむ。

多

木キ  
米一本  
タ  
メ

今多米村あり。一本に木を米と作れば。此村なるべし。されど総 国風土記に多茂郷あり一本に多義に作れるを思へば。今此村に滝あり

れは。其を名に負て。多木と麻しを。取し嘉名又着好字とある詔に依て。多米と改めたるか。 又木は米の点の脱たる可考。○姓氏録 中 多米、連神魂命五世孫天日和志命之後云々

美

和

○総国風土記ニ美和郷・美和神社あり。今神郷村あり。今ジンゴウと音にて唱

ふれど。旧くはミワノサトと唱へしなるべし。今神郷金田 旧くは神田と作り 神ヶ谷浪之上牛川 の五村を神庄といへり。委くは官社私考上巻石巻社系又総国風土記考に云り。

ハ

名

世 奈

○今八名井村あり。○総国風土記に八名の庄八名神社あり。委くは其 記の考に云り。

養

父

世 布

○今養父村あり。国内神名帳なる大坂天神も此村に在り。

和

太

○今和田村あり。

○国内神名帳に和田天神あり。○姓氏録 百 和太連大甲臣之 同相天見屋命之後也。

服

部

波止利

○今大野辺を服部庄と云り。○総国風土記ニ服部庄服部川あり。 ○国内神名帳宝飮郡服織天神アリ



○姓氏錄神代服部連天御中主命十一世孫。天御杵命之後也。  
○當国より赤引神調糸并絹等を奉りしことは官社私考上巻諸書を引て云へり。又大嘗會オホモヘの時、神服を當国の神戸の人に仰せて織らしめ玉へること并糸絹等を奉りつることは、總国風土記考服部庄条に云可考合。

美夫

○扶桑略記廿九後冷泉天皇治曆三年八月十六日、参河国解狀倫。管室餘郡渡津郷住人。土生眞世カ所領牝牛。以去七月廿七日辰、一點所生犢牛。其体長三尺許、毛色赤斑、額腰少白。有四牙、有二尻、二尾、七足、其四足如例、自余三足相添前後之足裡、後二足有腹際、前一足有腹下、自膝下相分、已生二蹄、凡有七足八蹄、又一尻有膈下股裡、具圖其跡相副進上、但彼牛領主眞世、恐其奇怪、不申、子細打斃了。老若、令神祇官陰陽寮等占申之、神祇官占申云、可有天下病事、口舌所致歎者、陰陽寮占申云、自怪所及良坤方、非羹口古關諱事、有天下疾疫、憂致、析慎、无其咎、一干者、正三位行権中納言兼治部卿皇后宮権大夫源朝臣隆俊宣、奉勅、仰五畿内七道諸国、符到之後、擇定吉日奉幣神社、轉經佛寺、拂兵革於未萌、消疾疫於方來、仍須長官以下共致潔齋、自語諸社奉幣禱祠、又於国分二寺及諸定額寺、嘱請淨行僧侶、三箇日間轉讀仁王般若經、兼修禁斷殺生、殊致精誠、必顯冥感者、諸国承知依宣行之、符到奉行者。  
○百練鈔四十四にも此事を載て、治曆三年七月廿七日、参河国進国解犢牛繪様相副、三頭八足云。

云。晋大興元年有此例とのみあり。

渥美郡

幡太

○今予が住む里を羽田村といふ。国図には吉田方とあり。吉田方とは、今羽田野田一本。田馬見塚、三相、吉川、五村の郷名となれり。中古より此五村を総て吉田方村と称ひけるを、寛文十一年より又五村に分れり。○神鳳抄に泰御厨あり。又奥郡に畠村あれど、風土記のさまに叶はさること、總国風土記考に云り。

和太

○今和地村あり。一本太を地に作るに拠れは此村なるべし。  
地一本

渥美

安久美 ○今飽海村あり。此辺村々飽海庄と称る村々多けれは、此當郡の本土なるべし。  
○大神宮雜事記初、垂仁天皇、御代、大御神の御タマシロを、倭姫、命奉載て御意に叶はせ玉ふ処を求き玉ふとして、国々行幸玉へることを載て、次に尾張国中島郡、一宿御坐、国造進、中島神戸。次、三河国渥美郡、一宿御坐、国造進、渥美郡神戸。次、遠江国濱名郡、一宿御坐、国造進、濱名、神戸とあり。  
さて夫より還り坐て。伊勢に



鎮坐せしことを載せたり。此事日本紀儀式帳を始。其餘の書に見えされば詳ならぬと。

○大神宮雜例集上ノ本神戶廿戸号渥美神戶新神戶廿戸号飽海神戶 ○吾妻鏡四ノ御神領。三河国飽海、本神戶新神戶とあるを考ふるに、本神戶とは、○大神宮式に封戸三河国廿戸とあるに則り、○雜例集に御鎮坐之昔、国造貢進とあるなるべく、又新神戶とあるは、○扶桑略記に、○雜重記、天慶三年に奉りあるとあるなるべく思ゆれば、此飽海なるを本神戶と思ひつるに、吉田城内神明社、則飽海に属り、永正六年棟札に、新神戶の郷とありは、此新神戶にて、與郡なる今、神戶七郷と稱する方、本神戶なるか、よく可考。尚神戶考に云べし。  
○伴主云、郡の名にアツミと唱へ、郷の名にアクミと唱ふは、いかゞ。こは字音を誤りて唱へならひたるなるべし。玉篇に渥は厚なりとあり。當抄美濃国厚見郡をアツミと唱るを、総国風土記には渥美と作り。

高蘆

多加之 今高足村あり。○神鳳抄高足御厨  
○大神宮建久年中行事、六月廿一日。滝原宮祭、祭、祭云。進發出立、自幣使給之、幣使米、同郷役米三斗運送、以代百文、彼沙汰不足之間、公文安元年、三河国高師御厨神税之内五十疋被相副、彼口入所より沙汰之云々。○源平盛衰記、高師。同、高志などあり。尚古哥名蹟考に云り。  
○姓氏録、高志、垂天神日、命十一世孫。大伴、室屋、天連公之後也。

磯部

以曾倍 ○今當郡伊期部村あり可考。又額田郡磯部村あり。○国内神名帳、當郡磯部天神あり。○姓氏録、磯部臣仲哀天皇皇子、屋別命之後也  
大壁 於保加倍 ○大神部をつゝめたるにて、今神戶郷なるか。

設楽郡

賀茂

加一本 ○今鴨谷村あり可考。

設楽

○今設楽村あり。これ當郡の本土なるべし。  
○保元物語、保元元年八月十一日、奈は、三河国には設楽の中奈とあり。○康正二年、造内裏段、設楽、引付、設楽、越中守殿、三河国下郷河路村とあり。

黒瀬

○今黒瀬村あり。○上に引る国役引付に、三川国設楽郡内黒瀬郷

多原

○今多原村あり。



○神風抄に田原とあるは、渥美郡の田原なるべし。

三河國古蹟考  
第四卷

參河國總國風土記考  
附大神宮神領考

全



大御宮御所  
三河國古蹟考  
參河國總國風土記考  
全

### 三川國古蹟考四之卷 參河國總國風土記考

#### 大旨

大皇國は、何事にも狡意なく強言なく、上つ御代より在來し古事を結ばず。在の終に語継き書傳ふる。大御手ぶりにし有れば、各々に詔して、其國々に傳へ來し。古老の語つきかき傳へたる古傳等を書記して奉らしめ給へるなん。風土記の書なる、そは我氣吹、舍翁の古史徵開題記に云く。諸國々の事を記せる事の見えたる始は、履中天皇、紀に四年、秋八月、始之於諸國置國史、記言事達四方、而あり。此は風土記と言ふれども、諸國の言と事とを記すと有るも、其記せる誌の風土記の躰なりけむこと知るべし。

また推古天皇、紀二十八年の下に、錄天皇記及國記とある國記も、決く風土記の類なるべく所思たり。

其後元明天皇、紀に和銅六年五月甲子、制、畿内七道諸國郡郷名、著好字。其郡内所生、銀銅、彩、色草、木禽、獸、魚、虫、等、物、具、録、色、目、及、土、地、沃、瘠、山、川、原、野、名、号、所、由。又古老相傳、旧聞、異事、載、于



史籍言上とあるを奉りて進れる史籍即風土記なるべく所思たり。

○敬雄云。扶桑略記館本には、著好字下其郡内云々の上に、又令作風土記といふ六字あり。

是にて風土記なる事いよ、疑なし。後按大日本史十四元明天皇本紀小注に云、要記皇記並曰、五月作風土記とあり。水鏡にも国々の郡の名をしるし書たる物ともの数を目録と

させしめ給ひき云々とあり。

そは仙覚が万葉集抄に大和国中智郡の事を説て和銅六年令註進風土記之時任太政官下之旨定二字用好字也と云へるを思ひ合せて并べし。さてそれより後醍醐天皇の延長三年に風土記を召されし事は朝野群載に載せる。延長三年十二月十四日の大政官符に五畿七道諸国司應早速勘進風土記事。右如聞諸国可有風土記文。今被左大臣宣依宜仰国宰令勘進之。若无底探求郡内尋問古老早速言上者諸国承知依宣不得遲迴符到奉行とあり。此符の旨は諸国に前に進れりし風土記の案あるべきを。今度そを覆勘て進るべし。若そ其无底は郡内を探求め古老に尋問て更に撰記して上るべしとなり。此官符に應て前に進れりし風土記の案を更に勘へ進れる国々の多かるべく。また新に古老の旧聞を探求めて上れるも有るべし。本朝書籍目録に風土記記諸土地本縁と載たり。政古き風土記の趣を取総て考るに。各各国にして旧より聞傳へたる古老の説を專と記さしめ給へる物にて。古事を証す便となる事多く。いと珍重たく貴き籍なるが。古への頁のは多く失せて出雲常陸肥前豊後の四国の風土記のみ残れり。其中和銅の度に注進れる風土記の今世に逸れるは常陸なるを其

中の一一篇なるべき。そは其発端に常陸国司解申古老相傳旧聞事問国郡旧事古老答曰云々と書き出たるは全く和銅の詔命の文を奉たる文なる事著く。また郡に誤て里と書きたるも慥き証とを思はる。また出雲のは天平五年二月廿日勘進とありはかの和銅六年より廿年ばかり後に進れる物なり。此は和銅の詔命に依て進れりし後故ありて再勘へて進れる記なるべし。又肥前豊後のは大旨出雲のと同じ体裁なれば同じ比に進れる物なるべし。文のさま出雲のよりも後れて見ゆれど。延長のあなたより在来し記なる由證あり其餘は悉失たるにや。いまた世に顯はれず。仙覚が万葉抄と。和銅日本紀とに引用たるを始め其餘の古書等にも彼此に引たるを概聚めて見るより外なし云々。惜又物国風土記といふが有り。悉く欠残りたる篇なるが。中にたゞ駿河国のみ大かた全たれど。其も虫くひなどして欠たる處あり。さて此記とも既く世に廢たりになりて。少づ遺たるも虫喰などに損はれて全からぬよし。古くは文和の年間に中原師行の奥書せられたる本を始め。其後嘉慶文龜弘治天正などの年間別人の奥書したるも。また昔の奥書はなくて寛文万治の比に寫したる本もあり。さて其本とも誤字脱字などの多有ことは云も更なり。甚く文の錯乱たる處もあるは。後に写誤れるなるべし。さて其総国風土記は。いつの比出來たるにか知るべからず。上に論へる古風土記とは遙に後れて見ゆ。強て考るに。後三條院天皇の御代に召れたる物なりと思はる。事あり。さるは百練抄愚管抄續古事談などに。天皇諸国新立の庄園を停止して始て記録所。庄園券契所を置給ひて。国々の衰へを直し給へるなど見えたるを。考へ合



せて察上るに。深き大御心在して。早速に諸国に詔ありて。風土記を召北たりけむが。いまだ作例も整はず。草案の如くなるを彼是より記録所へ上り。いまだ各国悉くは上り終ぬほどに。崩り給ひて。御政のさまも。万變りたりけ北は。彼記の筆も廢北たるまゝにて。官庫に埋北たるが。發れるなるべし。さてこの風土記は今井似閑が万葉緯に十四帖。取集めて收たりき。そ北と共に今己が彼国此郡と取集たるが。廿七国ばかりの記である。然はいへ此。風土記の体裁。古へのとは甚く別にして。文も拙く劣りて後なるが上は。いかにそや思はる。幸も見ゆ北は。偽書ならむと云ふ人もあると然すが。昔の物な北は。よく採り撰むには。珍重たき籍なり。かしといは北たり。

○こは伴信友主の説をも採て。いと長き考説なるを此には要とある事を摘出て記せり。委くは本書につきて見るべし。

○さて此三川なるも。八名宝飲の兩郡のみ在れど。これも殘缺て二郡ともに全き物には非ず。異本三四部を得て比較せつれど。いなく異なるはなし。されど拳母記といふ書に。此書拳母杉本。福藏といふ人の所藏なり。往古拳母と云る文字の始は。風土記に云。昔年三河国衣川水上より。美しき鴨子一羽添下る。又水下より母鳥一羽旅行て。近づく見えし程に。子鴨を愛し頓て。翅の内に抱きて。汀の森に入ると見えしが。忽然として神と顯は北。有がたき託宣有て。後に母鳥遙に天へ上ると見えし。此故に拳母と云ふ。其後此処に社を造營し。鳥居を建て。兎守明神と崇奉る。祭礼九月十九日なり。是は鴨は九月十九日始て。豊年の方へわたる物な北は。な

り。此迎を加茂郡と名くる初とかや。按。是是風土記の文なるべし。されど拳母の字義を解る後世の俗意な北は。決く總国風土記の文なるべし。川下に鴛鴨村。川上に鴛沢村あるもこのいは北なりむかとあり。また元祿の年間。度會直方の。大木大明神の事を考へ記せる文書に。大木村。富田。易信。解藏。大木食命。御母は出雲色多利姫。三河風土記にあり。など見えたり。か、北は其頃か、る異本も有しにこそ。いかで。得まほしと。其本ッ書ありやと。かの兩氏がたりたづねつれど。ふつに知れざ北は。今は其本ともの出なむをも待あへずて。かく愚なる考へをものしつるになん。そは其本とも得たりむ時つきく。に書改むべけれは。見む人其心してよむべし。さて国名風土記といへる物のこと。またそを眞字にて書るものなどの事は。既に和名鈔三河郡郷考の巻首にいへ北は。今またさらにはものせずになん

天保十年三月月立之日

羽田 埜 敬 雄



日本總國風土記第四十  
三河國八名郡

海浦	六箇所	湊	三箇所
泉	二磯	寺院	六宇
墳墓	三基	岡	五箇所
名山	七ヶ所	淵	三ヶ所
宮祠	八ヶ所		

○按ニ當郡式内社一座神明名帳社廿六座アリ  
八名郡東限美和川。西限鳥取山。南限波多湊。北限有玉岡。  
○按ニ和名鈔渥美郡幡太郷アリ。今予加任ム里ヲ羽田村ト稱ヒテ。吉田城西総門ノ西八町  
程ニ在テ。一段高キ村ナリ。村老ノ口碑ニ。古ハ小坂井ヨリ吉田駅ノ間屋ト云。処迄舟  
渡ノ入海ニテ。ソヲ志加須賀ノ渡ト云テ。此羽田村モ舟着ナリシヲ。中比次々ニ新田トナリ  
テ。今ハ地續キトナレリト云リ。此書ニ八名郡ニ海浦湊等アルハ。旧クハ八名郡ノ西南



ノ境ハ。此海辺ナリケム。斯レハ南浪波多湊トアルニ合ヘレバ。此村ノコトナルベシ。○榊  
鳳抄ニ養ノ御厨トアリ。コレモ此村ナルヘシ。渥美郡真郡ニ畠村アレド。コノ趣ニカナ  
ハス。

貢樟柏（和）杉檜茗苜狐革（ツル鶴）鶴（鶴）鷗鷺諸海河之鱗類桑麻等

○賦役令（世）曰凡諸国貢献物者皆尽當土所出云々

### 多 茂 郷

兼一本

公穀六百九十七束三毛田

假粟五百八十三丸四畝田

貢諸材。尤有大材之美。

○按ニ和名鈔當郡多木郷アリ。一本多米ニ作レリ。寛知集ニ多米村トアリ。今當郡多米村  
アリテ。一ツノ滝アリ。滝アルニ依テ旧ク多木ト号ヒタルヲ。後嘉名ヲ採リテ多米ニ改メ  
タルニテ。和名鈔ナル多木ノホハ米字ニ点ノ缺タルナルカ考フベシ。

○公穀トハ主税式和名鈔等ニ。正税何束トアルト同クテ。公田ノ穀ヲ云歟

○假粟トハ。○天武天皇紀（廿九）又曰。丁（イ）貸稅。○桓武天皇紀ニ。貧民弥々。貧富家愈富。云々。割折有餘  
之貯。假貸不足之徒。收納之時。先得報之。○元正天皇紀（八）。養老四年三月。日。太政官奏ス。  
望請。比年之間。諸国。每年春。初。出稅。貸與百姓。繼其産業。至秋。熟。後。依。數。徵。納。其。稅。既。不。息。利。

トアルコレナラムカ。

○三毛田。或人云。毛ハ穀ニテ。イハユル取毛ノコトナリト云リ。

○伊勢貞大隨筆云

鎌倉辺田（田）地ニ一畝ト申ハ十三石ノ由。之ヲ九持ト云。半分持タルヲ半持ト云。植木村ハ  
六名アルナリ。七十八石ノ村ナリ。或云一名ト云フハ村ニヨリ違アリ。戒且村ナド  
ハ。二十石一名ナリトゾ。名主ハ此ヨリ出タル名ナルヘシトアリ

○仁井田氏ノ説

又田地ノ字ニ。垣内又院ト申ス丁モアリ。院ハ田ニテ丸ト同意ナルカ。

### 萬 像 寺

寄田二十九束三毛田

天平神護二年丙午二月鑑真（直イ）掛錫（列イ）之地。而納血部（經イ）一部

○掛錫ハ僧ノト居スルヲ云フ。血經ハ血盆經力血盆經ハ僧經也。

○按ニ天平神護ハ孝謙天皇ノ御世ニシテ。今ヨリ一千七十四年ノ昔ナリ

○鑑真僧ハ。續日本紀（廿四）天平宝字七年。大和上鑑真物化。和上者。揚州竜興寺之大德也。博涉經  
論。尤精戒律。ト有テ。勝宝四年。飯化シテ。東大寺ニ來ル。有勅。校正一切經論。往々誤字。和上諸  
誦。多下雌黃。又藥物。真偽。以鼻別之。聖武皇帝師之。受戒。授位大僧正。辻化時年七十七トア



リ。委クハ本書ヲ見ルベシ。天平神護二年ハ辻化ノ年ヨリ四年ヲ経タリイカバ。  
○神皇正統紀云。律宗ハ大小ニ通スルナリ。整頁來朝シテ弘メラレタリ云々。  
○元享統書ニモ。本朝ノ成法此時方ニ熾ナリトアリ。

美和ノ郷

伴伏云或箕輪又三輪ニ作レリト云リ予未タ其本ヲ見ズ

公穀四百八十二束三字田  
假粟三百八十六丸三畝田

貢<sub>一</sub>松<sub>一</sub>柏<sub>一</sub>香<sub>一</sub>鹿<sub>一</sub>猪<sub>一</sub>之<sub>一</sub>革<sub>一</sub>

○按ニ和名鈔當郡美和郷アリ。今神郷<sub>ジシゴウ</sub>金田<sub>カナダ</sub>旧クハ神田ト書リ。神<sub>カミ</sub>ヶ<sub>ケ</sub>谷<sub>ヤ</sub>浪之上牛川ノ五ヶ村ノ庄号ヲミワノ庄ト称テ。神庄ト書レバ。神郷ハ古クハミワノサトト唱ヘケン<sub>ワ</sub>決<sub>シ</sub>。神ノ字ヲミワト訓ル古書ニ例多シ。

○延喜民部式<sub>延喜</sub>ニ交易雜物ノ中ニ。参河国鹿革六十張トアリ。

○同典葉式<sub>延喜</sub>ニ年料雜葉三河国廿一種ノ中栢子仁アリ

美和神社

圭田五十束

所祭大<sub>オホ</sub>己<sub>ミ</sub>貴<sub>ミ</sub>命。齊明天皇元年乙卯始奉圭田加<sub>カ</sub>神礼。有神家巫戸。

○翻農圃本録<sub>延喜</sub>ハ云。祭祀ノ入用ノ爲ニ圭田トテ郷官ヨリノ下者ニハ足リタル緑田ノ外ニ

一人ニ五十畝ツ、年貢ナシニ與ヘタリトナリ。

○按ニ神名式ニ當郡石巻神社アリ。即チ此神社ナルベシ。委クハ官社私考ノ上巻ニアリ。

○齊明天皇元年ヨリ年歴一千百八十七年

○圭田ハ<sub>カラフミ</sub>戎<sub>ミ</sub>籍ノ孟子ノ滕文公ノ上ニ。圭田五十畝トアル。朱熹<sub>シ</sub>加注ニ。圭ハ繁ナリ。所以奉<sub>ニ</sub>祭祀<sub>ニ</sub>也トアリトゾ。後按ニ周礼ノ地官ニ士田ノ注ニ。士讀テ爲<sub>レ</sub>仕<sub>ル</sub>者亦受<sub>レ</sub>田<sub>ヲ</sub>。所謂圭田也。孟子曰自<sub>レ</sub>卿以下必有<sub>レ</sub>圭田云々。注云此禄賞制之外又有<sub>レ</sub>圭田所以厚<sub>レ</sub>君子也。

○鳩<sub>ト</sub>巢云。圭田ハ仕田ノ<sub>一</sub>ニテ當<sub>レ</sub>今ノ役料ノ類也。

○成形図說ニハ。武藏絶国風土記ニ。圭田ヲマツリノタト訓リト云リ。予カ持ル本ニハ傍<sub>カ</sub>訓ナシ。

○類聚国史<sub>延喜</sub>四年。實<sub>ニ</sub>平<sub>ニ</sub>マ<sub>ニ</sub>シ<sub>ニ</sub>。二月十五日伊豆国三島神祠<sub>ニ</sub>故叙<sub>レ</sub>正一位以<sub>ニ</sub>三島一郷<sub>ニ</sub>寄<sub>レ</sub>圭田トアリ。按ニ此条後人ノ附説カ

美和河

出<sub>ニ</sub>怪石<sub>ニ</sub>微砂<sub>ニ</sub>及<sub>ニ</sub>鮮魚<sub>ニ</sub>等<sub>一</sub>

○政香云。石巻山辺出<sub>レ</sub>磬石<sub>ノ</sub>擊<sub>テ</sub>之<sub>レ</sub>音<sub>ハ</sub>鏘々然是所謂出<sub>レ</sub>怪石<sub>ノ</sub>類歟。

○按ニ今水上ハ石巻山ノ東ヨリ流出テ。神ヶ谷<sub>カミヤ</sub>金田ノ間ヲ流レテ下<sub>レ</sub>条ノ郷<sub>ニ</sub>昔<sub>ニ</sub>昔<sub>ニ</sub>川<sub>ニ</sub>テ<sub>レ</sub>吉田川ヘ入ル川ヲ。神ヶ谷川トモ金田川トモ称<sub>レ</sub>フ。此川ナラムカ可考。



○山本氏綜録ニハ水上ハ河合山ヨリ出テハ名設樂ノ二郡ヲ分テ大野ノ西ヲ流レテ長篠ニテ滝川ト會スルモヲ美和川ト云トイヘリ。此説ニ依テ考ルニ其水上ナル河合ヨリハ三河白ト称フ絶レタル砵石ヲ出シ又大野川ヨリハ金銀垂トモ鳳鳴石トモ号ル砵石ヲ出セレバ怪石トアルニ由アルカ可考。

### 德壽寺

寄田三十五束三字田

行基法師安置才本之守佛納此寺

○按ニ金田村ニ今寺ハ廢レテ字ヲ德藏寺ト唱フル地アリ可考。

○行基僧ハ續日本紀ニ傳アリ。曰ク天平勝皇元年二月丁酉大僧正行基和尚遷化。

和尚ハ藥師寺ノ僧ニシテ俗姓ハ高志氏。和泉国人也云々。豐櫻彦天皇甚敬重焉。詔授大僧正之位并施四百人出家。和尚靈異神驗觸類而多。時人号曰行基菩薩。留止之處皆建道場。

其畿内凡四十九处諸道亦往々而在。弟子相繼皆守遺法至今任持焉。萬年八十トアリ。本朝文粹ニモ參河州碧海郡有二道場曰藥王寺行基菩薩昔所建立也云々トアレバ此国ニモ行基僧ノ建ツル寺院アリケル也。此餘ニモ此法師力建テト云フ寺数多アリ。

○因ニ云。元亨紀書ニハ天平廿一年正月。皇帝菩薩戒ヲ受玉ヒ乃行基ニ大菩薩ノ号ヲ賜フト云レド。續紀ニ既ニ時ノ人号曰トアレバ皇朝ヨリ賜ヘルニハ非ズ。大日本史ニ

東大寺分勝院所藏勅書。編年記皇代記等ヲ引テ後伏見天皇正安二年閏七月三日丙午賜西大寺僧叡号與正菩薩。賜菩薩号始于此。按ニ紀書行基傳曰賜号大菩薩。然則續紀時人所稱。非出於朝。今此篇始トアリ。又和漢三才圖會七十三卷ニモ大覺寺妙實。雨ヲ栴リシ賞ニ曰蓮僧ニ菩薩号ヲ賜ハリシトイフハ不審トイヘリ。

○都名所圖會ニハ京都仰木山妙蓮寺日像ノ栴雨賞ニ賜フトモ云リ。サレド拾芥抄ヲ贈菩薩僧ト云条ニモ叡号與正菩薩。正安ニ閏七三被下勅書トノミ有テ餘僧ハ見エズ。

### 八名庄

上イ

公穀五百七十二束

假粟四百九十三丸

貢稻樟楠柚熊革狼草入菴司

○按ニ和名抄當郡ハ名也奈郷アリ。今八名井村アリ。

### 八名神社

圭田三十二束丸三毛田

所祭胸漢命也。孝德天皇三年丁未九月奉初加圭田行神礼。

○政香云。胸漢ハ宗像ノ誤カ又倭名抄備中賀夜郡有漢守万トアリ漢ヲ万ノ倭名ニ用然レバ



ハナマカ可考。

○按ニ孝徳天皇三年ヨリ。年歴一千百九十四年ニナルナリ。

○八名井郡産土神天神社。例祭九月十一日。社人加藤吉左工門。社ノ棟札ニ慶長ノ比ヨリ旧キハ不知トアリ。

同村吉祥天女社。吉祥山ニアリ。石ヲ御カタトス。社人宮城彦太夫。

同村六社明神社。コレモ山ニアリ。例祭三月十八日。社人杉下兵左工門。

同村村神社。村コウ神ト称ス。社人松山六左工門。

同村今水熊野三社権現社。例祭九月八日。社人富安五左工門。

○今水社ノ辺ニ。井戸ハツ有テ。弘法井比丘尼井ヤナギ井等ノ名アリト云リ。マナギ井ハヤナギノ轉語ナルカ可考。コハ予天保四年九月廿八日ニ。八名井ニ行テ。其社ヲ尋ネ。且杉下

伏ヲ訪ヒテ聞キタルマ、ヲ記セリ。右五社ノ内イツレカ八名社ナルカ可考。

後按ニ天神。社人加藤弥三太夫云當村往古ハ八名村ト号ヒケルヲ弘法大師大井戸。小井戸柳井戸。櫻井戸。杉井戸。岩井戸。弘法井戸。兎井戸。ハツラ堀リ玉ヒシヨリ八名井ト称ス。天神

社ヲ古クハ八名神社トイヘルト云傳ヘタリト云リ。

因ニ云。国内神明名帳ニ。正四位下井祭明神坐宝飯郡。マタ正五位下走井天神坐宝飯郡ト

アリ。今八名郡八名井。南ニ井之島村アリ。吉田川。江ニテ宝飯郡ノ境ナリ。又此辺縮木村ニ吉水。大木村ニ鎗水ト云清水アリ。八名井ナル今水トヲ合称テ。三川。三名水

ト称テ。世俗ニ弘法僧ノ靈異ノ一ニ云ヘリ可考。

○空海法師ハ。讃岐国多度郡屏風浦。佐伯直田公ガ子ナリ。光仁天皇宝龜五年。年十九年ニテ

出家シ。三千一ノトキ得度渡唐シテ。三年ヲ経テ皈朝シ。廿七ニテ東寺ノ別當ニ補シ。弘仁十一年傳灯大法師位ヲ授ケラレ。天長二年柞雨ノ賞ニ僧都ニナサル。自有終焉之志。隱居紀

伊国金剛山寺化去之。時年六十三トアリテ。此時承和二年三月廿一日ナリト。續日本後紀。彼僧ノ傳ニ見エテ。外ニ靈異ノ一ヲバ載ラレズ。

元亨釈書同サニテヨリ。彼僧ノ傳アリ可考。

### ハナ名瀬川

産鮮魚菜柳。

○按ニ古今六帖ニ。やな瀬川。淵せ定めぬ世ときけば我身もふかくたのま北ぞするトアリ秋寢覚等ニ未即トアリ可考。

○因ニ當郡八名井村ヨリ東北ノ方ニ黄楊村ト云アリ。其地ノ山ニ黄楊木多ク生

リトイヘリ。内匠寮式云。凡年料納黄楊木者。参河国六枚トアリ。又云凡内記局所請

位記。料云々。黄楊。軸廿枚云々。毎年十二月充行。之トアリ。カレバ其黄楊木ハ此村ヨリ奉リケム。

○又民部式年料別貢雜物ノ中ニ参河国黄楊六斤トアリ。



○右黄楊ノ隣村、山吉田村ニテ、今紙ヲ多ク作出セリ。和漢三才図會。二葉松等ノ名産ノ条ニ載タリ。コレモ民部式ニテ年料別貢雜物ノ中ニ紙麻十斤トアリ。

篠 篠谷八幡

圭田五十七束三毛田

所祭與止姫也。天武天皇四年乙亥九月。始奉圭田始神事。

○按=天武天皇四年ヨリ年歴一千百六十七年

○設樂郡滝川猿橋ノ南ニ篠谷ト云ルアリ。淨瑠璃姫ノ隠レ住シ。処ナリト屬來寺、縁起ニ

イヘリ可尋

○神名式肥前国佐嘉郡ニ與止日女神社アリ。三代実録又ニ豫等比咩大神トアリ。

ト部、兼俱、御、神名帳頭注ニ風土記ヲ引テ、與止姫ノ神。一名ハ豊姫。一名、淀姫。乾元二年ノ記

ニ云。淀姫大明神者、八幡宗廟之叔母、神功皇后之妹也。云々河上大明神是也トイヘリ。諸社。根元記ニモ引ケリ。

服部ノ庄

公穀六百九十二束三字田

假粟五百三十五九六毛田

貢赤麻白綿等

○按=和名抄當郡服部波止利郷アリ。今大野辺ヲ服部ノ庄ト稱ス。○国内神明名帳云。

正五位下服織天神坐室飯部トアリ。

○木生父山本茂義ノ説ニ今當郡波上里ハ波止里ナルヘク止一畫欠ケテ上トナレルナルベシト云リ。

○當国ヨリ伊勢ノ大御神宮ニ赤引ノ神調ノ糸ヲ奉リシトハ既ニ官社私考ノ上卷赤日子神社ノ条ニ神袂令義解同集解内宮儀式帳外宮儀式帳大神宮式雜例集神鳳抄等ヲ引テ委ク云リ。又大頭糸ヲ朝廷ニ奉リシトハ同下卷大頭明神ノ条ニ主計寮式内藏寮式今昔物語等ヲ引テイヘリ。

○延喜大嘗祭式ニ云。凡織神服者九月上旬神袂官差神服社神主一人給。馭鈴一口。遣參河国。召集神戸ト定織神服長二人織女六人。工手二人。訖。長以下十人將當国神服部所輪調。十紬。飯向京。斎場先祭織屋。然後始織云々トアリ。此文長ケレバ略テ引リ委クハ本書ヲ見ルベシ。又此ヨリ先キ○貞觀儀式ニテ大嘗祭儀上ニモ此事ヲ載。○同ノ祭儀ノ下ニ大政官符參河国司。應進上服部女三人。服長一人。神調絲五紬。使某位神服某甲。右爲供奉。大嘗祭其。所差供件人充使所。如件國司承知如使。資調。絲依例進上トイヘリ。○神袂官年中行事ニ云。三河国和妙神服使。神服氏一人。神部二人。又云以神服社神主神服。氏人差進之。○百練鈔云。壽永元年十一月十一日。諸卿定申。大嘗會參河神服使空飯洛。



事トアレド、今ハ此事絶タルハ惜ムベシ。

○天明大嘗會記ニ云、三河国ヨリ奉ル神服ヲバ、ニギタヘト云ヒスバシナリ。阿波国ヨリ奉ルヲアラタヘト云ヌナリ。昔ハ如此ナレド、今ハ国々ヨリ奉ラズ。諸司調ヘテ奉ルナリ。トアリ。カ、レバ昔時大嘗會ノ時ハ、當国神戸ヨリ、服部長織女、エキヲ召上セテ京ナル斎場ニテ織ラシメ玉ヒシセ。

○延喜内藏寮式廿四諸国年料供進ノ中ニ調純二百疋ノ内、白一百疋ハ参河国所進、又調純ツチアジキ三百八十約、中白絲二十約、参河国所進ト見エ。

○民部式廿三交易雜物ノ中ニ、参河国白絹百二十疋。

○主計寮式廿四凡貢貢ノ調純者、参河国二千約、大調純大調純。

○同式同卷諸国調純錄ノ条ニ、参河国調純ワタキ藻羅各一疋、一窠綾十五疋、二窠ノ綾五疋、大頭ノ絲二十兩、夏、調純。

○主稅式廿六禄物價法ノ条ニ、尾張参河而国ノ絲八束、ナド見エタリ。

○江家次第四十五ノ円宗寺寂勝會ノ条ニ、永宣旨国々精好絹、十一匹、参河ナドトモ見エタリ。等此記ト云モニ委ク云リ、ノ、モ子カ三河国養蚕田來

### 極樂寺

寄田三十五東三宇田

持統天皇七年癸己五月、弘光法師安置大佛行秘咒之地也。

○政香云三川堤財賀寺峯ニ、靈光山極樂寺ノ旧跡アリト云恐クハ此寺歟

○新家千足云財賀寺ノ僧ニ問ヘルニ峯ノ旧跡ハ當寺ノ跡ニテ極樂寺ノ旧ハ山下ニテ今ハ千両村ノ山ナリト云リサレド、彼寺ハ空歟郡ニテ郡違ヘリ可考。

### 服部川

出鮎鯢怪石等

此後田食一本

右風土記之殘冊、参河国八名郡分以關院大臣家之藏本與官本、遂校合畢

嘉慶二年七月下旬 左羽林郎 藤原元隆

○按嘉慶二年ヨリ年歷四百五十五年ニナルベシ。  
右八名一郡之風土記普校合世之三河風土記皆關焉、今度借出師家之本而校合畢一本ナシ  
右一冊以京師與田氏之本而寫之畢。  
于時享保十六辛亥年十一月十三日

日本書紀 風土記 磯山下 志 貴昌 澄 按 駿河国 郡社 神主也



日本總國風土記第六十九

參河國寶飯郡

名海	三箇所	井浦	二箇所
湊	三箇所	名山	七箇所
岡	四ヶ所	河	三箇所
川	三流	泉	二流
宮	七所	寺院	六宇
墳墓	三基		

寶飯郡東限<sup>狭</sup>陝川。西限<sup>關</sup>有岡山。南限<sup>飲</sup>寶飯湊。北限<sup>本</sup>市師浦。  
 貢<sup>松</sup>○栢樟杉櫻橘橙柴胡黃芩麥門冬茯苓松脂葡萄薔薇鹿狼狐猪草膽鷓鴣鷓鴣雉  
 海河之鮮魚粒貝等。又出綿濟之名<sup>石</sup>官家取之爲<sup>誤</sup>石帶之飾。  
 ○政香云。綿濟之名ハ瑠璃之石之誤力。  
 ○按<sup>イ</sup>寶飯ハ旧<sup>イ</sup>繩ナルヲ延喜民部式<sup>イ</sup>ナリノ御制<sup>イ</sup>ニ并用<sup>イ</sup>ニ字<sup>イ</sup>必<sup>イ</sup>取<sup>イ</sup>嘉<sup>イ</sup>名<sup>イ</sup>アルニ依<sup>イ</sup>テ本<sup>イ</sup>國<sup>イ</sup>ヲ紀<sup>イ</sup>

伊國ト書ル例ノ如ク。字音ノ誤ラトリテ寶飯トニ字ニ改メタルヲ後ニ飲ヲ飯ニ誤テ遂ニ  
 ホイト唱ルヤウニナレルナルヲ既ニ和名抄郡郷考ニ諸書ヲ引テ安ク云ルカ如シ。  
 ○市師浦。国内神明名帳ニ。宝飯郡ニ市階天神アリ。今ハ<sup>イ</sup>幡村ハ幡宮ノ榎社ニ。一品社ト云ア  
 リコレナルベシ。又今<sup>イ</sup>宮ノ辺ヲイナシノ庄ト云トイヘリ。  
 ○延喜民部式<sup>イ</sup>ナリ三河国交易雜物ノ中ニ鹿革六十張○同典藥式<sup>イ</sup>ナリ松脂茯苓麥門冬等ア  
 リ。○同内膳式<sup>イ</sup>ナリ節料ノ中ニ三河国進雉トアリ。○同主計式<sup>イ</sup>ナリ諸国調輸錢ノ条ニ三河  
 国雉<sup>イ</sup>暗アリ。

赤孫郷 或赤日子

公穀七百六十二束三字田  
 假粟六百七十三丸三字田  
 貢葡萄蘿蔔等。又出桑糸。  
 ○按和名抄當郡赤孫<sup>イ</sup>加比百郷アリ。今上之郷村ニ赤孫大明神アリ。按フニ神ノ郷ノ意  
 ナルベシ。凡テ古キ神社ノ在ス地ヲハ。神トモ森林トモ称ル例多シ。當郡ニテ云ハ。石卷  
 社坐ス神郷村其隣村ニ神ヶ谷又神田アリ石座社大宮村具連ニ宮脇村ト云フ村アリ。羽豆社宮崎村。御  
 津社<sup>イ</sup>森林下村 近<sup>イ</sup>近ニ森林アリナドナリ尙有ベシ。  
 ○桑糸。旧クハ西之郡郷土ニ好<sup>イ</sup>氏上ノ郷村ノ字ハ麻<sup>イ</sup>自<sup>イ</sup>ト云自<sup>イ</sup>ニ麻ヲ殖<sup>イ</sup>テ其麻糸ヲ伊勢ノ大



御神ノ宮ニ奉リシテ、既ニ官社私考上、卷赤日子ノ社ノ条ニ委ク云リ。

赤日子神社

圭田三十九束三毛田

所祭海神綿積豊王彦神也。安曇氏祝祭也。天智天皇甲戌九月。始奉圭田加神礼有<sub>二</sub>神家<sub>一</sub>平戸等

○校国内神明名帳ニ、正二位赤孫大明神坐<sub>二</sub>宝飯郡<sub>一</sub>トアリテ、式内ノ社ナリ。今赤孫大明神ト号テ、上郷清田<sub>二</sub>両村<sub>一</sub>産土神ト、既ニ官社私考上、卷。此社ノ条ニ委ク云リ。天智天皇元年ヨリ二百七十九年ニシテ

形原郷

公穀六百八十二束三毛田

假粟五百六十三丸

貢松柏樟杉柴胡黄芩茯苓<sub>等</sub>當飯鹿猪狐狼鶴<sub>等</sub>。

○校和名抄當郡形原加多乃波良郷アリ。今形原村アリ。

○續日本後紀<sub>ハハ</sub>。承和六年十一月。五色雲見<sub>ハル</sub>宝飯郡形原郷。

形原神社

圭田二十五束

所祭埴安神也。皇極天皇元年壬寅十二月。奉圭田加神礼

○校神名式當郡形原神社。国内神明名帳從四位下形原、明神坐<sub>二</sub>宝飯郡<sub>一</sub>トアリ。今形原村春日大明神社コレナルベシ。委クハ官社私考上、卷此社ノ条ニ云リ。皇極天皇元年ヨリ年歴一千二百年

○庸業云。形原ハ縣原ナルベシ。八幡村ハ幡ノ神主寺部氏ヨリ大社巡リ者へ近來マデ形原神社ノ印ヲ押タリシヲ今ハ見エザルハ口惜シ。

○正ヒロ云。形原神社ハ八幡村八幡宮ナリトハウケガタシ。

御津庄

公穀四百七十二束

假粟三百九十二丸

虫喰

○校和名抄當郡御津美郡郷アリ。今廣石村ヲ御津ト称ス。其外御津七郷ト称フハ。西方、平野森下、茂松、灰野、金割、丹野、赤根、大草ノ十村凡テ御津ノ庄ト号ス。

御津神社



至田五十六束

所祭下照比咩也。天武天皇四年乙亥二月始奉至田加神礼。宣隆云天武天皇四年乙亥ナリイ本設レリ

○按神名式當郡御津神社。国内神明名帳正三位御津大明神坐室飯郡トアリ。今御津庄廣石村ニ坐テ御津庄七郷産土神ナリ。委ク八官社私考上卷此ノ社ノ条ニ云リ。○天武天皇四年ヨリ年歴一千百六十七年ニナルヘシ

### 淨光院

寄田二十八束三毛田

敏達天皇二年癸巳百濟惠灌開基之地也。

○按敏達天皇二年ヨリ年歴一千二百六十九年ニナル

○按惠灌僧ハ日本紀廿七推古天皇三十三年正月戊寅。高麗王貢僧惠灌仍任僧正トアリ。扶桑略記同天皇同年ノ条ニモ此僧ヲ任僧正住元興寺流布三論法門建井上寺トアリ。元亨釈書ニモ傳アリ。敏達天皇二年ハ推古天皇三十三年ヨリハ五十四年前ナリ如何。

○梅花無盡藏。万里居。茅石鷄声。十二日雨宿三戶里。大昌寺待古白之消息也。路人例日踏三河。留滞晴雖一日。多茅居蕭蕭成雨鷄声。夢破短於簾。

○塩尻云。予カ父在世ナリシ時。三川国御油取南水白山ニテ村民堀出セシトテ銅鐸ヲ名府ニ來云々高三尺四寸九分。径一尺四寸圓アリ。

### 御津海并湊

貢諸鮮魚尤宜。怪石有号。奴名茶。其色綠而味甚美而服之延人齡。官家取之納膳部。

○按二葉松ニ云。始孝元帝行幸當国之日。奉寄寄鶴首於此津。因此号御津湊トアリ。サレド此天皇行幸ノ物ニ見エズ。按今御津海ニ隔ルコト廿町程ナレド。御津神社末社ニ。船津大明神ト云フアリ。此社地ノ前往古ノ湊ナリト云傳ヘタリ。又国内神明名帳ニ載タル。磯之宮神明モ當社ニ在リ。

○二葉松名産部ニ。御津蕪菜一名奴名茶ト出セルハ此書ニヨレルナルベシ。○二葉松ニ。孝元帝行幸トアレト如何アラン。景行天皇ハ五十二年八月兼興幸伊勢轉入東海道ト見エタレバ景行天皇カ又ハ持統天皇ニハナキカ村毛口碑モ詳ナラズトイヘリ可考。

望理郷  
跡王一本

公穀七百六十二束三字田



假粟六百九十三丸

其貢同御津庄。

○按和名抄ニ當郡望理郷アリ。マカリト傍訓アリ。今御津ヨリ七町程東北ニ森村アリ。其貢同御津庄トアレバ。況ク此村ナルベシ。斯レバ和名抄ニマカリト訓シモ後人ノ誤カ。可敬云マカリマカハ反セバマト約リマモト通テ同音ナリマカリヲ約レバモリトナルナリ。

○森村ノ西北國府村ニ守公神ト云フ社アリ。シクウジント唱フ。古鐘アリ。其銘ニ敬白。三河國宝飯郡府中守公神鐘。十方檀那勸進所願成就如件。應永廿三年申十一月十五日トアリ。其鐘今ハ高善寺トイフ禪寺ニアリ。

○姓氏録上ノ云。守公。景行天皇皇子大碓命之後也。

○日本紀上ノ景行天皇四十年ノ条ニ。大碓皇子云々。茲封美濃國。仍如封地。此身毛津君。守君ニ族之始祖也。トアリ。狹狹社ハ大碓命ヲ祀リテ。山上ニ其陵ト云ヒ傳フル趾アリ。同國ナレバ由アルカ可考。

○兵家紀聞ヲ應永十八年七月廿九日守公神ノ祭ノ下アリ。○武德編年集成ハ天正元年五月廿八日ノ条ニ。此時三州森郷ニテ逍遙軒德川勢ト合戦アリトアルハ非ナリ。秋九月ノナリ。

### 行徳寺

寄田三十九束三畝田。又以假粟爲寄田二十六丸。道眼和尚開基之地也。

### 篠塚郷

東本

公穀六百九十二束三毛田

假粟五百六十三丸三字田

貢松竹杉梅楊梅等又出桑麻傭絹等

○按當郡今篠東村アリ。和名抄當郡篠東之乃加郡。國內神明名帳ニ云。從四位下篠東ノ明神坐坐坐坐坐。

○増基法師が遠江道之記ニ。その夜こふにとまる。このをりしの左かには人々とまりて云々トアル。しのをかハモシしのづかノ誤ニハアラジカ。○延喜民部式廿三年料別貢雜物ノ中ニ。三河國麻十斤。○同主計式上。諸國調輸録ノ条ニ。參河國麻一百斤。○同興業式。地理參河國廿一種ノ中ニ。麻子三合トアリ。○大和物語にしのつかのうまやノ哥アリ。古哥名蹟考ニ云ベシ。

○本多光臣篠東天主神主云シノツカト云フ塚ハ伊藤茂平次ト云塚後ニアリ。高八九尺西三間東三間北二間南三尺程アリテ今ヤジノ山ト稱フモトハ笹オヒ茂リタルヲ今ハビハエノキタマ



ノ類生ヒタリ。七十年以來此山ヲカキトリケルニ其人イタク病ケリ今モ不淨ノモノハ其上ヘ登ラズトイヘリ。

### 石座神社

圭田四十六束五字田

所祭天稚彦也。大宝二年癸寅九月。始奉圭田行神事。宣隆按大宝二年ハ壬寅ニ当レリ

○按大宝二年ヨリ一千百廿八年。

○神名式室飲郡石座神社アリ。国内神明名帳ニ正三位磐倉ノ大明神坐設樂郡下アノ會設樂郡大宮村ニ坐テ近郷十四ケ村ノ産土神ナリ。安ハ官社私考上卷此社ノ条ニ云リ。

### 石座河

出鯉鯉鮎鮎等

○按大宮村石座社南ニ小川アリ。宮川トモ石座川トモ云リ。水源ハ実国常信ノ山ヨリ出テ大坪岩廣ノ間ヲ流レテ吉田川ニ入ル。

### 砥鹿神社

圭田五十三束

所祭大物主神也。文武天皇元年。始奉圭田加神礼。

○按文武天皇元年ヨリ一千百四十五年ニナル也。神名式當郡砥鹿神社。国内神明名帳ニ正一位砥鹿大明神坐室飯郡下アリ。此社今當郡一宮村ニ坐セリ。安クハ官社私考上卷此社ノ条ニ云リ。

### 友尾里

友了本

無公穀假粟等。以海塩煮而充日糧。

右一卷之参河国寶飯郡之風土記以閑院大臣家之藏本與官本遂校合畢

嘉慶二年乙丑四月下旬

左中將藤原元隆

一本ニ至徳二年乙丑四月下旬改トアリ。

文政七年四月九日以夏目齋貞滿主之藏本写之

同十二年五月以同学草鹿砥宣輝神主之藏本比较之

同年八月十三日以從兄鈴木茂之所藏之本校之

同十三年九月五日以鈴木重埜翁之本校合之



天保二年二月僅加愚考同十年三月加再考了  
同十五年七月以伴信友主所藏之本比校之

榮樹園主人羽田埜敬雄判書

### 神戸御厨御園考

羽田埜敬雄 謹願考

伊勢ノ西大御神宮ノ御神領ノ一ハ天照坐皇大御神伊勢国度會郡御鎮坐シ、時、度會  
多氣飯野三郡ヲ神三郡ト定メマシテ、御領田トナシ五口。又同国六咫ノ神戸ヲ始メ、大和伊賀  
志摩尾張三河遠江、封戸合セテ三百五十三戸ハ、倭姫命其ノ叔代トシテ、大御神ノ大御意ニ  
カナハセ玉ヘル所ヲ、求玉フトシテ、国々ニ行幸シ玉ヘル時、其国々、国造等ノ奉リシ神御田  
ナリ。

○此国々、国造神御田奉リシ一ハ、大神宮儀式帳倭姫命世記、神宮雜事記等ニ委ク見エタリ。  
延喜大神宮式四ノ云、封戸當国伊勢国也、度會郡多氣郡飯野郡飯高郡廿六戸、壹志郡  
廿八戸安濃郡廿五戸鈴鹿郡十戸河曲郡廿八戸桑名郡五戸。諸国大和国十五戸伊賀国  
二十戸志摩国六十六戸尾張国四十戸参河国二十戸遠江国四十戸。右諸国、調庸雜物、皆神  
宮ノ司檢領、依例供用、其當国地租、收納所在官舍、隨テ事支料、若遭年不登、損田七分以  
上免徵租稻、並ニ注帳申送所司。  
又云、神田四十六町一段大和国守陀郡二  
町伊賀国伊賀郡二町伊勢国四十二町一段、右神田如件。割度會郡五町四段、令當郡司管



種收獲苗子供用大神宮三時并度會宮朝夕之饌自余依當土估賃租充供祭料トアリ。石神三郡及神田ノ外ナル七ヶ国封戸ヲ數フレバ合テ三百五十三戸アリ。コレ

○雜例集上ニテ神戶三百五十三戸本神戶 御鎮坐之昔國造貢進トアルコレナリ

○マタ 朱雀天皇天慶三年三員辨郡一郡ト封三十戸トヲ加ヘ進リ玉ヘリ。

コレ平將門追討ノ御祈リノ報賽トシテ奉リ玉ヘルナリ、サルハ

○扶桑略記云。天慶三年八月廿七日。尾張參河遠江三ヶ国封戸各十戸。有刺奉寄伊勢大神宮。又被寄員辨郡。是亂逆間自遂賽也。

○雜事記云。天慶四年三月廿八日。以員辨郡被奉寄大神宮已了。又依官省符尾張參河遠江等ノ郡神封戸各拾烟。被奉寄於大神宮已了。今新神戶是也。二所大神宮祿宜ニ各賜一階。乃是則依將門追討之御祈禱也。又七道諸國神社被奉增位階了。

○雜例集上云。員辨郡天慶三年八月廿七日。符二百烟。大政官符民部省應奉加寄伊勢大神宮。二郡并封戸事。同國員辨郡。封戸廿戸尾張國十戸參河國十戸遠江國十戸。石從三位守大納言。兼右近衛大將。行陸奥出羽。按察使。藤原朝臣實賴宣。奉勅件一郡并封戸宜奉加寄彼大神宮。若省宜承知依宣行之。仍須件員辨郡官物官舍之類。准弘仁八年十二月廿五日格。行之符到奉行也。  
右少弁正五位下兼行內藏頭源朝臣。 右大史正五位上大宿禰宿禰。

天慶三年八月廿七日。ト見エタリ。此三川尾張遠江三ヶ国封戸ヲ

○村上天皇。応和二年二月廿三日。ニ三重ノ郡ヲ奉加リ玉ヒ。

○円融院天皇。天祿四年九月十一日。ニ安濃ノ郡ヲ加奉リ玉ヒ。

○後一茶院天皇。寛仁三年九月十一日。ニ朝明ノ郡ヲ加奉リ玉ヒ。

○後鳥羽院天皇。文治元年九月九日。飯高郡ト封戸三十戸トヲ加奉リ玉ヒ。

○以上三度ノ。雜例集ニ委ク見エタリ。サテ此ノ文治ノ度ノ。

○雜例集ニハ。飯高郡文治元年九月九日。符トノミアリテ。別ニ封戸三十戸ヲ奉ラレシトハ見エネド。

○同上ノ神封事付御領ト云フ奈ニ。

神戶四百十三戸ニテ國馬ヶ所ニアリ

三百五十三戸本神戶 御鎮坐之昔國造貢進

三十戸新神戶 天慶三年八月廿七日ノ符

三十戸新神戶 文治元年九月九日ノ符 按下文ノ例ニヨルニ新ノ下加ノ符ヲ脱セルニテ新加神戶アルベシ

伊勢國百五十二戸大所 大和國守陀神戶十五戸 伊賀國伊賀神戶十五戸 志摩國六十六戸云々

尾張國六十戸本神戶四十戸 新神戶十戸 新加神戶十戸

遠江國六十戸本神戶四十戸 新神戶十戸 新加神戶十戸

上 參河國四十戸本神戶二十戸 新神戶十戸 新加神戶十戸



トアリ。此ニケ国、神戸内、本神戸トアルハ、御鎮坐之昔云々トアルニテ、新神戸トアルモ、天  
 慶三年云々トアルナルトハ前文ニテシルシ。新加ノ神戸トアルハ、文治元年九月九日  
 ノ符、神鳳鈔ニ新封戸トアルナルベシ。コハ平氏追討ノ賽トシテ進ラレシモノトハ  
 見ユレド、何故ニ進ラレシト云フ。未見當ラズヨク可考。

○上、件ニ挙クル神三郡ニ五郡ヲ合セテ、此ヲ神八郡ト称ヘリ。此外御世々々ニ進ラレタル。  
 神戸御園御厨神田等。伊勢国、一志桑名鈴鹿河曲菴藝等五郡ヲ始メ、諸国ニ数多アリシ事。  
 雜例集神鳳鈔外宮神領目錄等ニ見エタリ。

○サテ當國、神戸御園御厨等ノコト。神鳳鈔ヲ本文トシテ條々ニ小注ス。次ノ如シ  
 神鳳鈔 此書、眞書ニ云。本ニ云。延文五年三月日。本宮注進本。并ニ外宮一、祢宜清宗神主  
 之等。勅之書ニ写之。注文之内朱点者。建久四年ニ宮進宮注文。自ニ本所令合点。黒点ハ者  
 自具以來、書入云々。以恭昌神主本書ニ写之。但今度皆以黒書ス。依經ト有テ其卷首ニ

二所大神宮御領。諸国神戸。御厨。御園。神田。名田等ト有テ。伊勢志摩近江美濃尾張ト記  
 シテ其次ニ當國ノヲ挙タリ

○サテ上ニ挙ベキコトヲ忘レタル故。コ、ニ挙ツ。  
 ○ソハ彼ノ雜例集ニマタ廿戸本封。寛弘二年以前ノ符。百戸上野各廿五戸。長曆二年七月符  
 トアリ。此ノ寛弘二年云々トアル。廿戸ハ、本神戸新神戸トアルナルベク。長曆二年云々ト  
 アルハ

○雜事記ヲ長曆二年七月日。勅使参宮宣命狀ニ云。公家可有御領之由頼ト申。仍御封百  
 戸所奉寄也。又ニ宮、祢宜等賜一階了。御封近江廿五戸。美濃国参河国上野等国各廿五  
 戸。官省符到未了トアルコレ也。

参河国

本神戸内

御神酒	三	年	用紙	三百帖
瓶子	十二	口	祭料造酒米	二石
懸力稻	卅	束	荷前御調絹	四足
曳宣	廿	枚		

○内宮儀式帳ハ、年中行事、九月、祭ニ、供奉大神宮、処々、神戸荷前物。絹二足、白一、絲三絢、綿  
 五十三屯。神衣料、白布一端、麻六斤、木綿二斤。已上伊賀尾張三河遠江四ヶ国、神戸、供  
 進。

神酒二十三正云々。尾張三河遠江。懸力稻云々。尾張神戸廿束、三河神戸十束、遠江ノ神戸  
 七束。

○外宮儀式帳ハ、年中行事、九月、祭ニ、懸力稻六百七十束。伊勢、神戶、伊賀、尾張、三河、遠江、  
 四国、神戸、六十束。



大神宮司奉進。伊賀尾張參河遠江志摩等國等神戶八夫所進。御調荷前。絹二疋。糸二絢。綿五十二屯。荒太倍一端。木綿二斤。麻五斤。雜脂廿斤。塩四斛。熬海胤十斤。乾羅

鮑廿斤。堅魚十五斤。海藻根廿五斤。六月。月次祭。進月神酒廿疋。正別三斗。伊賀國三疋。尾張參河遠江等國各一疋。並以神稅一釀造。

○延喜大神宮式。云。六月。月次祭。進月神酒廿疋。正別三斗。伊賀國三疋。尾張參河遠江等國各一疋。並以神稅一釀造。

○同式。九月神嘗祭。神酒廿三疋。尾張參河遠江等國各一疋。並以神稅一釀造。

○同齋宮寮式。調庸雜物。凡諸國送納調庸。并請受京庫雜物積貯寮庫支配雜用。絹施七百疋。尾張長編二十疋。參河白編二十疋。遠江絹一百五疋。香米一千三百三十四石八斗。黑米三百九十二石。尾張。芥子一石。參河。又云。鯛楚割九十斤。貽貝鮓一石八斗。鯛枝乾一百斤。以上。

○雜例集。上。云。參河國本封。調庸十九疋三丈七尺五寸。庸米二十三石一斗。倍功米七十五石。中男。作物胡麻油七升。封丁一人。

○同書。五十年中行事。六月。祭。今月。廳宣成事。參河遠江神戶所當。麥作。進。彼濱名。神戶。田所當。麥。事。

○大神宮建久年中行事。初丁。十月一日。御綿奉納。神事。祭。云。進。納。荷前。御綿等事。絹三疋之中一疋當國。上一疋三疋。神戶。一疋。遠江神戶。

新神戸内

御神酒 三疋 用紙 九十帖  
瓶子 二十口 祭料 造酒米 二石  
懸刀 縮 三十束 荷前御調糸 二斤  
絹 一疋 短 莖 七枚

新加内

御酒 一疋 用紙 三十帖  
瓶子 四口 造酒米 一石  
懸刀 縮 十三束 荷前御調糸 二斤  
絹 四丈 短 莖 七枚

○雜例集。上。云。新封。調庸。參拾漆。足壹丈壹尺貳寸伍分。庸米。四十三石八斗七升五合。租穀百石。中男。作物胡麻油一斗七升五合。倍功米六十二石五斗。封丁一人。又云。准米三百十二石五斗九升九合。庸米六十五石九斗七升五合。雜用二百四十六石六斗二升四合。使供給雜事。

○内宮儀式帳。新宮造奉時。行事。祭。云。常限。廿七年一度新宮。進。奉。中男。即。發。役。夫。伊。勢。美。濃。尾。張。參。河。遠。江。等。五。國。國。別。國。司。一。人。郡。司。一。人。率。役。夫。參。向。造。奉。







○氏経記。廳宣可早任先例云々三河国龍海神戸車。  
右件神戸者爲嚴重御神領每年口入上分米并四ヶ神役之外者自往古不致沙汰之所云々以  
宣。寛正五年六月廿一日

二宮  
新封戸 見作十七丁七反

○雜例集。新加神戸。文治元年九月九日符。トアルコレナルベシ。コハ大津神戸ナルコト大  
宮司家ノ古記ニ見エタリ。

二宮  
大津神戸 前祭主卿知行。七條院御祈禱所

○今渥美郡大津村アリ。○七條院トハ。後鳥羽院天皇御母。藤原殖子七條院ト号奉ルコレ  
カ。此大津神戸ハ新加神戸ニテ文治元年。トルコト大宮司家古記ニ見エタリ。○大津  
古クハ毛津ト云リト云リ古哥名蹟考老津島系ニイフベシ。国内神名帳ニ大津天神アリ。  
○吾妻鏡。建久十年三月廿三日。中將家依有殊御宿願。大神宮御領六ヶ所。被止地頭職ヲ。其  
所々内。謀叛狼藉之輩。出來者自神宮可被擲出略中之旨。被仰遣ハ祭主中御奉免狀書。其  
御神領  
遠江国蒲御厨 尾張国一楊御厨 參河国龍海。本神戸 新神戸 大津神戸 伊良胡御厨  
惣追捕使

右件所々地頭等。依別御祈願所被停止彼職也。鎌倉中將殿御消息如此。仍執達如件

建久十年三月廿三日  
祭主殿

兵庫頭 按大江廣元ナリ

○同十六。同十月廿四日。參河国内御寄附大神宮之庄園有六ヶ所。而守護人藤九郎入道蓮西。  
代官善耀。被神妨之由。自神宮依訴申之云々。奉免之後。看争カ可成其妨之由被載之云々。  
按六処トハ本神戸。新神戸。大津。伊良胡。葦橋。良カ。此六処吾妻鏡ニノセタリ。  
○又同。平相国禪門盛驕奢之餘。蔑如朝政。忍緒神威。破滅佛法。惱乱人衆。近則放入使者  
於神三郡。御鎮坐充テ課兵糧米。追捕民烟ヲ。天照大神鎮坐以來。千百余歳。未ラ有如此例。  
○同十六。下。伊勢国御領内。地頭等。早可停止无道狼藉。從内外宮神主等下知。致沙汰事ト  
アル中ニ。自今以後。從神宮之下知。可令致神忠。雖地頭何煩神人。急神役。宜停止件狼藉。  
トモ見エタリ。

内宮  
橋良御厨 六石

○今渥美郡橋良村アリ。  
○吾妻鏡。建久十年五月十六日丁未。今日以參河国葦御厨并橋良御厨地頭職。令公進大神  
官給。兵庫頭廣元奉行之云々。



生栗御藪

各栗二石油二斗

○今額田郡<sup>ニ</sup>羽栗村<sup>ハ</sup>。瞻豆<sup>ヲ</sup>郡<sup>ニ</sup>六栗村<sup>ニ</sup>。又額田郡<sup>ニ</sup>投栗村<sup>アリ</sup>可考。

○外宮神領目録。三河<sup>ノ</sup>国生栗御藪。油一斗。栗二石。給人引付同之。

○按全額田郡ナル投栗村ナルベクオボエ。ソハ生栗ハナリグリナルヲナクリトツメタルナラント覺ユレバナリ。

神谷御厨

内宮十石。別進十石。外宮十石。菓<sup>子</sup>雜用廿石。

○今八名郡<sup>ノ</sup>神谷村<sup>アリ</sup>。○按引付帳<sup>ニ</sup>菓<sup>子</sup>ノ下<sup>ニ</sup>等<sup>ノ</sup>字<sup>アリ</sup>。

高足御厨

十石

○今渥美郡<sup>ノ</sup>高足村<sup>アリ</sup>。○和名鈔。同郡<sup>ノ</sup>高盧郷<sup>アリ</sup>。

○大神宮建久年中行事。六月廿一日。滝原宮<sup>ノ</sup>祭礼<sup>ノ</sup>。祭<sup>ニ</sup>進發<sup>出立</sup>ハ自<sup>リ</sup>幣使<sup>給</sup>之。幣使米同郷役米三斗運送。彼<sup>ノ</sup>沙汰不足之間。去<sup>ル</sup>文安元年。三河<sup>ノ</sup>国高師御厨<sup>ノ</sup>神稅<sup>ノ</sup>之内。五十足被<sup>レ</sup>相副。彼<sup>ノ</sup>口入所ヨリ沙汰之。此<sup>ノ</sup>村<sup>ノ</sup>尚古<sup>ノ</sup>蹟考<sup>高師山</sup>。

外宮 郷庭御厨

見作三分一<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>當<sup>内</sup>七石五斗上分<sup>ノ</sup>口入

○今播豆郡<sup>ノ</sup>郷庭村<sup>アリ</sup>。

○外宮神領目録。三河<sup>ノ</sup>国郷庭御厨九石。加後進祈禱<sup>石五斗</sup>内於上分<sup>二石五斗</sup>者。六月二石五斗九月二石五斗。十二月二石五斗。

○中右記云。長承元年十一月四日。梅宮祭云々。今朝彼御厨事。申<sup>子</sup>細<sup>了</sup>。参<sup>河</sup>ノ国郷庭御厨内。字<sup>ハ</sup>角平寺島<sup>郷</sup>事。件<sup>所</sup>代々<sup>ノ</sup>国司奉免<sup>永久三年</sup>被<sup>レ</sup>奉免<sup>宣旨</sup>了。於<sup>今</sup>者<sup>可</sup>爲<sup>御厨人</sup>坎。後日宣<sup>勺</sup>ノ国司。信濃<sup>ノ</sup>国中畧<sup>同</sup>国中畧<sup>右三ヶ所</sup>大略所見注進如件。

外宮 薑御藪

六石

○今渥美郡<sup>ニ</sup>連木村<sup>ニ</sup>ハジカミト云字<sup>ノ</sup>処<sup>アリ</sup>。伊勢<sup>ヘ</sup>奉<sup>ル</sup>薑<sup>ヲ</sup>收<sup>タル</sup>藏<sup>趾</sup>也トテ生<sup>姜</sup>藏<sup>ト</sup>云<sup>傳</sup>フ処<sup>アリ</sup>。

○正口云。二葉松<sup>イ</sup>本渥美郡<sup>ノ</sup>名<sup>仁</sup>連木<sup>ト</sup>アル下<sup>ニ</sup>古作<sup>薑</sup>トアリ。

○外宮神領目録。三河<sup>ノ</sup>国薑御藪。御園六石六斗。料田<sup>六十六丁</sup>。相本斗<sup>定</sup>大器也。

○按建久年中行事。四月十四日。茶<sup>ニ</sup>。菴江<sup>ノ</sup>神戶ヨリ。種<sup>薑</sup>ヲ奉<sup>ル</sup>コト見<sup>工</sup>種<sup>薑</sup>ハ子<sup>良</sup>宿<sup>館</sup>。南垣内<sup>ニ</sup>所<sup>奉</sup>殖<sup>也</sup>。九月御祭之時御饌所<sup>進</sup>也トアリ。



○雜例 集下、三月、茶ニ、種薑、御贄之事。遠江、國、濱名、神戸、可、課也。マタ當抄。遠江、下ニ、種姜二斗八升トアリ。カク遠江ヨリ奉ル、ハ見エタレド。當国ヨリ奉リシコトハ見當ラヌ可考。

外宮 伊良胡御厨 上分三石 雜用廿石

○今渥美郡 伊良胡村アリ。

○神領給人引付帳ニ、又云三河国伊良胡御厨。御贄納事。干鯛長一尺。毎年五十隻。此内廿隻上分。三十隻口入所行彦神主。貞治三年六月十七日富房寄進。

○外宮神領目錄ニ、三河国伊良胡御厨。三石。干鯛三十候。引付帳ニハ候ハ隻ナリ。

○吾妻鏡 十六、伊良胡御厨。全文大津神戸下ニ引リ。

○尚此処、コト官社私考下卷 伊良久大明神、条 古哥名蹟考 伊良虞崎、条ニ云リ。

外宮 蘆美御厨 上分六石 雜用廿石

○今播豆郡 嵩美村アリ。津、平村北隣ナリ。ストソト通ヘハコレナルベシ。

○外宮神領目錄ニ、三河国蘆美御厨六石。○国内神名帳 蘆美天神アリ。給人引付同之。

外宮 吉田御園 上分三石 菓子雜用 十一石

○今吉田ト称ル処、渥美ハ名播豆、三郡ニ三所アリ。サレト播豆郡ナルハ郷場ト並ビテ、俗ニ郷場吉田ト称フレバコレカ。又菓子トアレバ、ハ名郡、俗ニ山、吉田ト云ル村ナルカ可考。渥美、郡ナル、此、吉田、駄ハ、旧ト、今、橋ト称ヒケルヲ、天文ノ比、吉田ト改メタリト云レバ、此、所ニハ非ジ。

○外宮神領目錄ニ、三河国吉田御園三石。菓子粟六籠。給人引付同之。

外宮 角平御厨 五十二町五反 蘆美同所

○今播豆郡 津平村アリ。嵩美村ト隣レリ。又寺島トモ並ベリ。

○中右記ニ、参河国 郷庭ノ御厨内。字、角平寺島ノ郷事。全文 郷庭ノ下ニ引リ

○国内神名帳 津枚明神アリ官社私考下卷可考合

吉胡御厨

○今渥美郡 吉胡村アリ。

富津御園

美 養御園



○今渥美郡ナルヲカ任<sup>ニ</sup>邑<sup>ヲ</sup>羽<sup>田</sup>ト云。和名鈔=同郡<sup>嶺</sup>太<sup>郷</sup>アリコレナルベシ。  
○又奥郡=畠村アレド。殘風土記=南<sup>限</sup>波<sup>多</sup>湊<sup>ト</sup>アルニ合ハザルコト。既=総国風土記考ニ  
云ルカ如シ。或説=保美龜山伊良胡堀切小塩津中山畠村ヲ御厨七郷ト唱フト云リ。此  
説=概レバ畠村=由アルカ可考。

### 河内御園

○今播豆郡河内村。設楽郡=川内村。加茂郡=下河内村。宝飯郡=柑子村アリ。大場伏云今  
杉山出郷<sup>カミゲヤ</sup>ウチイツミト地名アリ。  
○建久年中行幸<sup>初</sup>十月一日更衣神事郷食膳<sup>茶</sup>件所<sup>ハ</sup>三河国所在河内御園也。○和名鈔=

### 大墓御園

○今宝飯郡ニモ。播豆郡ニモ大塚村アリ。墓ヲツカト訓ル例<sup>ハ</sup>雜例集ニ有<sup>ウ</sup>介<sup>ト</sup>鳥<sup>ツ</sup>墓<sup>カ</sup>村。尾張  
国内神名帳從三位津賀田天神一作<sup>墓田</sup>。

### 院内御園

○今渥美郡印内村アリ

### 根田

○今渥美郡=今田村アリ。

### 原田

○今渥美郡田原。○和名鈔=多原トアルハ。設楽郡ノナルベシ。

### 新家

○今渥美郡新見村アリ。

### 野依御厨

○今渥美郡野依村アリ。  
○外宮神領目録=三河国野依御厨三石。○引付帳=兼春被<sup>仰</sup>付<sup>ト</sup>アリ。

### 岩前御園



○今渥美郡<sup>ニ</sup>岩崎村<sup>アリ</sup>。国内神名帳ナル石前天神モ當村ニ坐セリ。官社私考下卷可考合。

上 土谷御厨

○今渥美郡植田村<sup>アリ</sup>。ウエタ ウヘタニ訓似タリ。此迎神領多ケレバ可考。渥美郡長仙寺村長仙寺貞治五年康暦元年天文廿四年永録八年等寄附狀ニ三河国渥美郡弥熊郷上谷長仙寺領之事云々トアリカ、レバ上谷トアル方ヨロシカルベシ。  
○又八名郡神ヶ谷村<sup>アリ</sup>。既ニ神ヶ谷ノ茶ニ云リ。

内 加治御園

○今渥美郡加治村<sup>アリ</sup>。大塲信茂云加治村ニ大見堂<sup>オホミドウ</sup>ト云社<sup>アリ</sup>。コレ麻績<sup>マキ</sup>ノ意ナルベシト云リ。

○国内神名帳ニ加治天神<sup>アリ</sup>コハ宝飲郡ニ坐テコトハ別ナリ。

濱 濱田御園

○今渥美郡濱田村<sup>アリ</sup>。

○外宮神領目錄ニ保袖<sup>保袖引付</sup>濱田御園。一石五斗。又同濱田御園勤月次御幣紙十二帖。○引付帳十二帖ノ下。勤也ノ二字アリ。

泉 泉御園

○今碧海郡泉村<sup>アリ</sup>。八名郡御園村ヲ泉御園ト云リ。  
○建久年中行事ニ四月十四日。風日祈宮祭礼茶ニ。其後風日祈直會<sup>テホミ</sup>郷餐膳ニ預ル。郷餐料所三河国泉御園也。

保田御園

○今渥美郡漆田<sup>カクシタ</sup>志田<sup>シタ</sup>等ノ村並神戸七郷内ニ可考。  
○外宮神領目錄ニ保袖濱田御園。一石五斗トアリ。引付帳ニ袖ヲ袖ト書リ可考。

内 香洲御園

十一月一日郷餐料所

○今宝飲郡柑子村<sup>カウジ</sup>アリ可考。建久年中行事初テ十一月一日更衣神事茶ニ云々在郷餐膳云々件所三河国所在河内御園也トアレバ。香洲河内トナヘ同シカレバ恐クハ同所ナルベシ。  
○光尋云柑子村内宇鳥帽子田ト云所ニ田畑一反五六畝アリテソノ神田ト云傳ヘタリト云リ可考合。







○今碧海郡ニ富永村アリ。又設楽郡新城辺ヲスベテ富永庄ト云リ考フベシ。  
○按此ニ河国次ニ遠江国ノヲ載テ次々諸国御厨御園等ヲ載テ其卷末ニ諸神田注連文。建  
久四年四月在京同トアリ。

○此經記ニ三河国細谷御厨者爲嚴重神領云々。神領給人引付ニ三河国渥美郡赤羽根七郎次  
良寄進御贄干鯛百隻長一尺三寸云々。此ニ所神鳳抄ニ見エズ可考。

○一戸。續日本紀四十七天平十九年五月太政官奏ニ每一戸凡封白以正丁六人中男一人爲率云  
々。其田租者每一戸以四十束爲限ト云々トアリ。民部式廿五丁ナルモ此御制ト同シ。民部  
式廿五丁凡封白以正丁四人中男一人爲一戸率租每戸以四十束爲限。戸トイフハ家ト同丁  
ナリ。或曰井田割ニテイハ一戸八九町ナルカ。

○御厨御園件主云。公ニテ其御厨ト云フハ定リテ魚鳥等ヲ進ル所ナリ。御園ハ雜菜。茶大  
根青茄子干葱芋薑菘蒜大豆小豆角豆等ヲ進ル所ト聞エタリ。内膳式ナドニヨリテ見  
ルベシ。神領ナルモ然ゾ有ケムヲ。神鳳抄ナドニ御厨御園共ニ田町反租石數ナド記セル  
ハ今世ニイハユル米上納代上納類ニテ貢物ニ換タルウヘラ記セルモノナルベシ。又吾妻鏡  
神鳳抄年中行事ナドニ御厨御園ヲ互ニ混ラシ記セルハ御厨ヨリモ貢物ヲハ  
共ニ公ノ御厨ニ進ル故ニ私ニハ通ハシユルカラ混レタル後唱ナルベシト云リ。  
○内膳式ニ凡諸国貢進御厨御贄結番ハ云々又云云々等園供御雜菜云々  
或說國依天子御園又大社ノモ有ルベシ。又花園トハ天子御花畑ト云説アリ。

○延壽式ニ凡神戶神稅ハ充祭料并神供之調度也御厨トハアル説ニ御厨神田ノ知行米ヲ以年  
内諸祭入料ニ充又ハ神役大小内人ノ奉祿職田ニモ宛タルヲ御厨神戶トモイヘリ。

○神戶神田ノ古ク物ニ見エタルハ

○日本紀五ノ崇神天皇七年冬十一月。便テ別祭八十萬羣神。仍定天社国社及神地神戶。  
於是疫病始息。国内漸謐。五穀既成。百姓饒之。

○同書六ノ垂仁天皇廿七年秋八月云々。弓矢及橫刀納諸神之社。仍更定神地神戶。以時祠之。

○同書九ノ神功皇后元年夏四月云々。皇后識神教。有驗更祭祀神祇。願欲西征。爰定  
神田佃之云々。

○同書十五ノ顯宗天皇三年春三月云々。便奏神戶佃田十四町云々。

○同書廿九ノ天武天皇六年夏五月。勅天社地社神稅者三分之。一爲擬供神二分給神主。

○同書三十一ノ持統天皇五年春正月。班幣於畿内天神地祇。及增神戶田地。  
○神祇令五ノ凡神戶調庸及田租。並充造神宮及供神調度。其稅者一准美倉。一准美倉者皆  
國司檢校申送所司。

○職員令四ノ神祇官伯一人。掌神祇祭祀。祝部神戶名籍。謂祝部名帳云々。惣判官ノ事ヲ。

○臨時祭式十一ノ凡諸國神稅調庸帳。及神戶計帳。祝部等名帳。ハ毎年即若此。此官計會。更  
即付返抄。

○主稅式廿七ノ其國司解申ス。收納セル。某年。正稅帳重云々。當年。田租穀額若干束。雜



散若干束。神封戸若干束。其神封戸若干束云々。以前某年組帳依例勘造如件。仍附頁調使官位姓名申上謹解。

○民部式並神統帳造一通。送神祇官。一通送省。

○同式并凡神戶調庸充祭料并造神社及供神調度。但田租貯爲神稅。

○同式并凡諸國神社。隨破修理云々。其料便用神稅。如無神稅即充正稅。

○同式并凡神戶百姓不得輒令得度。

○田令并凡田六年一班神田寺田。不在此限。謂此即不稅田也。

○民部式并凡位田功田賜田及神寺等。各按本地。不須輒改。

○純日本紀并文武天皇大皇二年七月詔伊勢大神宮封物。看是神御之物。宜准供神事。勿令監穢。○雜例集上同之。

○雜例集上并延曆廿年四月十四日格云。大神宮封戸非改減之限。此事日本後紀ハ見エス。雜事記上ニ奉タリ。

○類聚三代格一弘仁十二年秋八月太政官符。應令伊勢大神宮檢納神郡田租。事右得神祇官解休承前之例。大神宮司檢納伊勢國多氣度會而郡。神田租及七處神戶田等租。支用祭祀從來尚矣。中間國司預以檢納。而年中祭用組合四万一千一百九十束一把。今在他國神戶合百三十一把。所輸租五十二百五十束。除例用外。所遺亦一千五百八十五束。亦當國所出。租三万五千束。後當國他國神稅合三万六千五百八十五束。即共充用。猶所欠租四千六百五十束。其代借用正稅。雖謂所輸租。即便填進。而每年有殘封納爲

煩。望請停預。預。司。令。神。宮。司。依。旧。檢。納。預。以。支。用。其。祭。事。但。借。請。正。稅。充。欠。料。者。永。從。停。止。謹。請。官。裁。看。が。大。臣。宣。奉。敕。依。請。○日本後紀十五卷載タリ。コ。ニ。ハ。要。ト。アル。コ。ト。ラ。ツ。ミ。テ。記。セ。リ。リ。載。リ。○雜例集上十三卷ニモアラク

○續日本紀並丁宝龜十一年五月伊勢大神宮封一千廿三戸。隨旧復之。

○大神宮式并凡三箇神郡并六處神戶及諸國神戶。調庸田租。若依國司所移之調。文租帳等。官司勘納。其勘納之狀。附國司移送。主計主稅。二察。

○又曰凡三神郡并六處及諸國神戶。若不出奉正稅。

○外宮神領目錄寫本一卷アリ其卷首ニ

注進官廳御所知諸神領目錄トアリテ其奥書ニ

右以一祢宜守浮御所藏本謄寫了

安永四年十二月三日

祢宜荒木田神主 主經 雅

○外宮神領給人引付帳寫本一卷アリ其奥書ニ

延元四年十月日但政所大夫注進定也トアリ

書中ラ按。貞治六年正月廿五日注シタルモノナリ。神領目錄ヲ本トシテ後ニ革リタル事ヲ書キ加ヘタルモノト見ユ。神鳳抄ト合ヒ不合互ニ交レリ。



和田下枝安万侶

安全

君かこの御書あらずはよの  
人の三川の國內何にしらまし

草鹿砥

君にこそこれの三河の  
くにたまの神し御靈を  
幸ひますらめ

宣隆



三河国古蹟考  
第五卷

參河國歷代事蹟考

春之卷

三河國古蹟考  
第五卷  
參河國歷代事蹟考  
春之卷



第五卷  
三河国古蹟考

三河国古蹟考

卷五

この歴代事蹟の四巻はあの北年ころ古書と見讀みわたすちなみに此三川の国の事蹟  
ともの見えたるをばよむかまはくつま印して抄出し置つ北は前後になりたるも重  
復せるもあるへけれと重とけし後浄書して古蹟考の五六七八の巻歴代事蹟の部に收  
れんとすされと才短く暇なく老の浪さへたちそみつ北はいつ事はつへくもあらずな  
ん

栄木老人 羽田野 友か雄



三川國歷代事蹟考卷之一目錄

古事記	三卷	旧事記	十卷	日本書紀	三十卷
續日本紀	四十卷	日本後紀	二十、	續日本後紀	十、
文德実録	十卷	三代實録	五十、	類聚国史	六十一、
帝王編年記	廿七、	日本紀畧		扶桑略記	十五、
百鍊抄	十七、	新撰姓氏録	三、	類聚三代格	十五、
令義解	十、	貞觀儀式	十、	延喜式	五十、
江家次第	十九、	北山抄	十、	類聚符宣抄	十、
大同類聚方	十、	本朝文粹		和名抄	五、

○古事記

●中卷口四葉 關化天皇 御子日子坐王、御子丹波比古多々須美知能宇斯王、弟四、御子  
關化天皇系  
神名式和泉国大鳥郡日部神社ハ日子坐命ヲ祀ルト記傳セニ七十丁ニイハレタリ  
姓氏録ニ日下部ノ姓ハ彦坐命後ナリト云ヘリ  
三河神明名帳ニ從四位下草部明神座室飲郡トアリ今モ草部村アリテ旧クハ日下部ト  
書リトイヘリ日子坐王ハ朝廷別王ニハ祖父ニマセバ禰別ノ氏人ノ此命ヲ祀レル  
ニテハナキ可考

●中卷四四葉 垂仁天皇 三川之禰別之祖  
皇行天皇系 第工皇子 落別王春 三川之衣 禰之祖也  
朝廷別王者 三川之禰別之祖

○日本紀 祖別命 祖ハ大父ノ意ナリ  
旧事記 同 国造本紀イガノ系ニ意知別命トアリ  
祖父別命

○国造本紀ニ伊賀国造ノ系ニ意知別命



○姓氏録 於知別命

○日本書紀

廿五卷十六丁 二年二月云々三河大伴直スハキ盧ル關カ四人並ナリ秀徳天皇ノ系ノ系

此六人奉順天皇朕深讚美厥心宜罷官司處々屯田ト

○八名郡加茂村大伴神社アリ

○類聚方ノ六五丁 三河之大伴直盧之傳之方アリ可考 按四人並關名此六人云々トアレバ大伴ト盧ハ兩人ナルベシ

廿五丁 同年云々復有百姓臨向京曰恐所乘馬疲瘦不行以布二尋麻二束送參河尾張兩國之人ニ崔クハ養カ飼ハ乃入于京於還鄉日送銀一口而參河人等不能養飼カ翻カ令疲死云々

廿二丁 六年云々天皇不從諫遂幸伊勢云々甲午詔免ス近江美濃尾張參河遠江等國供奉ル持統天皇ノ系ノ系 騎士戸云々今年調役上

○類聚國史一七三 災異部 蝗 系 大正元年八月辛酉參河遠江云々十七國蝗火風壞百姓店舍損秋緣 類聚國史同疾病系 慶雲三年閏正月庚戌京畿及紀伊因噲參河駿河等疫給医薬療之

○續日本紀

○類聚國史一 帝王部十一 天皇行幸十五丁同

二卷十五丁 文武天皇系 ○大正二年九月癸未遣使於伊賀伊勢美濃尾張三河五國管造テモカリシヤ行宮

同 上 ○冬十月丁酉鎮祭諸神為將幸參河國

同 上 ○甲辰太上天皇幸參河國令諸國無出今年田租三持統天皇ノ系ノ系

同 上 ○十一月戊子車駕至自參河云々三持統天皇ノ系ノ系

三ノ廿二丁 慶雲三年九月甲辰以從五位下坂谷部宿禰三田麻呂為三河守

○太政官式ト云云凡行幸云々其行幸路傍百姓窮困者賑恤長老者賜物側近社寺奉幣誦經臨賀將迎即有宣命賜當國郡司等祿有差或有叙位

行宮側近高年八十以上及陪從人等賜物有數華見ニ

万葉集一三年壬寅太上天皇幸于參河國時哥長冠寸與廣呂引馬野カ云々トアル哥ハ此時哥之委クハ

古哥名踏考ニ云ヘシ

五ノ十三丁 和銅五年七月壬午云々令云々參河云々等二十一國始織綾錦

○和名抄八名下服部波止利アリ

○奥郡仁崎村古ハ錦崎トイヘリ錦崎山奥國寺ト云フアリ

○扶桑略記次ニモセテ七月壬子日トアリ

六ノ四丁 和銅六年五月癸酉令大倭參河獻雲母ヲ

○或書ニ吉良庄トハ雲母ヲ産スル地ナル故ニ号シメトイヘリ一八面村山ヨリ堀



出セリ ○大同類聚方々支良以乙

●六ノ六丁

同年八月丁巳從五位下榎井朝臣廣國爲參河守

●六ノ廿丁

○靈龜元年五月丙午參河國地震壞正倉四十七又百姓廬舍往々陷没シテ

和銅八 ○類史百七十一災異部五地異五

●七ノ五丁

五月乙巳遠江國地震山崩壅廢玉河云々ツツキ

●十一ノ十三丁

同二年四月壬申以從五位下坂本朝臣阿曾麻呂爲參河守

●十四ノ九丁

天平四年九月乙巳外從五位下佐伯宿祢伊益爲三河守

●十六ノ七丁

同十三年十二月丙戌外從五位下秦前大魚爲參河守

●十八ノ四丁

同十七年九月丙辰外從五位下田辺史高願爲參河守

●十九ノ二丁

○天平勝室二年七月甲辰參河國海真玉依賣一產三兒給正稅三百束乳母一人

●二十ノ十丁

○類聚國史五十四人部十十三丁同

●廿二ノ六丁

同五年四月癸巳以正五位下大伴宿祢小東人爲參河守

●廿三ノ八丁

天平室宇元年六月壬辰從五位下大伴宿祢御依爲參河守

●廿三ノ三丁

同三年五月壬午從五位上石上朝臣完嗣爲參河守

●廿三ノ三丁

同五年正月壬寅從五位下淡海真人御船爲參河守

●廿三ノ三丁

癸卯以從五位下參河王爲和泉守

●廿三ノ三丁

同六年正月戊子從五位下高元度爲參河守

●廿三ノ十七丁

已卯以今良三百六十六人編附左右京大和山背伊勢參河下總等職目

●廿四ノ廿一丁

同七年七月乙卯以從五位下大伴宿祢田麻呂爲參河守

●廿五ノ廿八丁

同八年十月己卯從四位下中臣伊勢朝臣老人爲參河守從五位下山田御井宿祢廣人爲介

●廿六ノ十三丁

天平神護元年四月丁亥參河國碧海郡從八位上石村村主押繩等九人姓坂上忌寸

●廿七ノ五丁

○三川神名國帳云正五位下石村天神式外座碧海郡

●廿八ノ十四丁

同二年三月辛巳外從五位下民忌寸繼麻呂爲兼參河掾

●廿八ノ十四丁

○神護景雲元年八月乙酉參河國言慶雲見屈槽六百口於西宮寢殿設齋以慶雲見也

●廿八ノ十八丁

○元亨叙書云參州奏慶雲見

●廿九ノ十四丁

○同二年八月己酉參河國獻白鳥同○九月辛巳勅今年七月八日得參河國碧海郡人長谷部文選所獻白鳥下畧云々

●廿九ノ十四丁

○類史百六十五祥瑞部鳥条

●廿九ノ十四丁

仍勅瑞式白鳥是爲中瑞云々長谷部文選授少初位上賜正稅五百束委ハ本



書ヲ見ベシ

○旧事記<sup>廿二丁</sup> 考合スヘシ

碧海郡本郷村<sup>ハセバ</sup>神谷部社アリ 別ニ安ク云ヘシ

● 廿一十九丁

宝龜二年潤三月戊子<sup>ハ</sup>左工門督正四位下藤原朝臣田麻呂<sup>ハ</sup>為兼参河守

● 廿一十八丁

同十一月癸卯<sup>ハ</sup>御太政官院<sup>ハ</sup>行大嘗之事<sup>ハ</sup>参河國<sup>ハ</sup>為由<sup>ハ</sup>於<sup>ハ</sup>因<sup>ハ</sup>瞻<sup>ハ</sup>國<sup>ハ</sup>為<sup>ハ</sup>須<sup>ハ</sup>岐<sup>ハ</sup>

● 廿一十九丁

○皇年代畧記<sup>廿二丁</sup> 寶龜二年十一月<sup>ハ</sup>卯<sup>ハ</sup>大嘗會<sup>ハ</sup>田<sup>ハ</sup>瞻<sup>ハ</sup>

● 廿一十九丁

同三年四月庚午<sup>ハ</sup>正五位下多治比<sup>ハ</sup>真人長野<sup>ハ</sup>為<sup>ハ</sup>参河守

● 廿一十三丁

○同五月癸丑<sup>ハ</sup>参河國<sup>ハ</sup>獻<sup>ハ</sup>白鳥<sup>ハ</sup>

● 廿一十三丁

○類史百六十五<sup>ハ</sup>祥瑞上鳥<sup>ハ</sup>茶<sup>ハ</sup>

● 廿一十三丁

同四年三月壬辰<sup>ハ</sup>参河國<sup>ハ</sup>大風<sup>ハ</sup>民飢<sup>ハ</sup>賑<sup>ハ</sup>給<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>

● 廿一十三丁

同五年三月戊申<sup>ハ</sup>参河國<sup>ハ</sup>飢<sup>ハ</sup>賑<sup>ハ</sup>給<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>

● 廿一十三丁

同九月辛酉<sup>ハ</sup>大監物<sup>ハ</sup>從五位下<sup>ハ</sup>碓<sup>ハ</sup>王<sup>ハ</sup>為<sup>ハ</sup>兼<sup>ハ</sup>参河守

● 廿一十三丁

同三月乙未<sup>ハ</sup>始置<sup>ハ</sup>参河<sup>ハ</sup>大小<sup>ハ</sup>目<sup>ハ</sup>負<sup>ハ</sup>

● 廿一十三丁

同六年七月丙申<sup>ハ</sup>参河信濃<sup>ハ</sup>丹後<sup>ハ</sup>三國<sup>ハ</sup>飢<sup>ハ</sup>並<sup>ハ</sup>賑<sup>ハ</sup>賜<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>

● 廿一十三丁

同九年七月戊子<sup>ハ</sup>從五位上<sup>ハ</sup>磯部<sup>ハ</sup>王<sup>ハ</sup>為<sup>ハ</sup>内<sup>ハ</sup>匠<sup>ハ</sup>頭<sup>ハ</sup>参河守<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>

● 廿一十三丁

同十年二月甲午<sup>ハ</sup>從五位下<sup>ハ</sup>藤原朝臣<sup>ハ</sup>長山<sup>ハ</sup>為<sup>ハ</sup>参河守

● 廿一十三丁

同十一年二月乙酉<sup>ハ</sup>外從五位下<sup>ハ</sup>葛井<sup>ハ</sup>連<sup>ハ</sup>阿守<sup>ハ</sup>為<sup>ハ</sup>参河守

● 廿六丁

天應元年四月丙申<sup>ハ</sup>從五位下<sup>ハ</sup>佐伯<sup>ハ</sup>宿祢<sup>ハ</sup>川<sup>ハ</sup>作<sup>ハ</sup>為<sup>ハ</sup>参河守

● 廿七丁

延暦元年五月己亥<sup>ハ</sup>從五位下<sup>ハ</sup>多治比<sup>ハ</sup>真人<sup>ハ</sup>豐瀨<sup>ハ</sup>為<sup>ハ</sup>参河守

● 廿八丁

同四年七月壬戌<sup>ハ</sup>從五位下<sup>ハ</sup>三島<sup>ハ</sup>真人<sup>ハ</sup>大陽<sup>ハ</sup>坐<sup>ハ</sup>為<sup>ハ</sup>参河守

● 廿九丁

同五年八月甲子<sup>ハ</sup>從五位下<sup>ハ</sup>中臣朝臣<sup>ハ</sup>必登<sup>ハ</sup>為<sup>ハ</sup>参河守

● 廿九丁

同六年二月庚午<sup>ハ</sup>外從五位下<sup>ハ</sup>御使朝臣<sup>ハ</sup>淨足<sup>ハ</sup>為<sup>ハ</sup>参河守

● 三十丁

同八年二月丁丑<sup>ハ</sup>正五位下<sup>ハ</sup>高賀<sup>ハ</sup>茂朝<sup>ハ</sup>臣<sup>ハ</sup>諸雄<sup>ハ</sup>為<sup>ハ</sup>参河守

● 四十丁

同九年四月辛酉<sup>ハ</sup>美濃尾張<sup>ハ</sup>参河<sup>ハ</sup>等<sup>ハ</sup>國<sup>ハ</sup>去年<sup>ハ</sup>五穀<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>稔<sup>ハ</sup>饑<sup>ハ</sup>饉<sup>ハ</sup>者<sup>ハ</sup>衆<sup>ハ</sup>

● 四十丁

○類史八十<sup>ハ</sup>糶糶<sup>ハ</sup>部<sup>ハ</sup>ニ<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>八年<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>アリ

● 四十丁

同三月丙午<sup>ハ</sup>雅祭頭<sup>ハ</sup>正五位下<sup>ハ</sup>文室<sup>ハ</sup>真人<sup>ハ</sup>波多麻呂<sup>ハ</sup>為<sup>ハ</sup>兼<sup>ハ</sup>参河守

● 四十丁

同三月辛亥<sup>ハ</sup>参河云々<sup>ハ</sup>等<sup>ハ</sup>六國<sup>ハ</sup>飢<sup>ハ</sup>賑<sup>ハ</sup>給<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup> 丙寅<sup>ハ</sup>参河美濃<sup>ハ</sup>二國<sup>ハ</sup>飢<sup>ハ</sup>賑<sup>ハ</sup>給<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup> <sup>四月又賑給之</sup>

● 四十丁

靈龜三年秋七月庚子<sup>ハ</sup>始置<sup>ハ</sup>按察使<sup>ハ</sup>中<sup>ハ</sup>美濃國<sup>ハ</sup>守<sup>ハ</sup>從<sup>ハ</sup>四位上<sup>ハ</sup>笠<sup>ハ</sup>朝臣<sup>ハ</sup>麻呂<sup>ハ</sup>管<sup>ハ</sup>尾張<sup>ハ</sup>参河<sup>ハ</sup>信濃<sup>ハ</sup>三國<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>畧

● 四十丁

○類史八十三<sup>ハ</sup>免<sup>ハ</sup>租<sup>ハ</sup>稅<sup>ハ</sup>部<sup>ハ</sup>延<sup>ハ</sup>曆<sup>ハ</sup>廿一年<sup>ハ</sup>九月<sup>ハ</sup>丁巳<sup>ハ</sup>伊賀<sup>ハ</sup>伊勢<sup>ハ</sup>尾張<sup>ハ</sup>三河<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup>等<sup>ハ</sup>三十國<sup>ハ</sup>預<sup>ハ</sup>田<sup>ハ</sup>百姓<sup>ハ</sup>免<sup>ハ</sup>租<sup>ハ</sup>稅<sup>ハ</sup>徵<sup>ハ</sup>調<sup>ハ</sup>

● 四十丁

○類聚国史百九十九<sup>ハ</sup>殊俗部<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>延<sup>ハ</sup>曆<sup>ハ</sup>十八年<sup>ハ</sup>七月<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>一人<sup>ハ</sup>乘<sup>ハ</sup>小舟<sup>ハ</sup>漂<sup>ハ</sup>着<sup>ハ</sup>参河<sup>ハ</sup>国<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 崑崙人<sup>ハ</sup>ナリ<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 其<sup>ハ</sup>資物<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>謂<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>綿種<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> <sup>逸史</sup>

● 四十丁

○類聚国史百九十九<sup>ハ</sup>殊俗部<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>延<sup>ハ</sup>曆<sup>ハ</sup>十八年<sup>ハ</sup>七月<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>一人<sup>ハ</sup>乘<sup>ハ</sup>小舟<sup>ハ</sup>漂<sup>ハ</sup>着<sup>ハ</sup>参河<sup>ハ</sup>国<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 崑崙人<sup>ハ</sup>ナリ<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 其<sup>ハ</sup>資物<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>謂<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>綿種<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> <sup>逸史</sup>

● 四十丁

○類聚国史百九十九<sup>ハ</sup>殊俗部<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>延<sup>ハ</sup>曆<sup>ハ</sup>十八年<sup>ハ</sup>七月<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>一人<sup>ハ</sup>乘<sup>ハ</sup>小舟<sup>ハ</sup>漂<sup>ハ</sup>着<sup>ハ</sup>参河<sup>ハ</sup>国<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 崑崙人<sup>ハ</sup>ナリ<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 其<sup>ハ</sup>資物<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>謂<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>綿種<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> <sup>逸史</sup>

● 四十丁

○類聚国史百九十九<sup>ハ</sup>殊俗部<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>延<sup>ハ</sup>曆<sup>ハ</sup>十八年<sup>ハ</sup>七月<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>一人<sup>ハ</sup>乘<sup>ハ</sup>小舟<sup>ハ</sup>漂<sup>ハ</sup>着<sup>ハ</sup>参河<sup>ハ</sup>国<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 崑崙人<sup>ハ</sup>ナリ<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 其<sup>ハ</sup>資物<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>謂<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>綿種<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> <sup>逸史</sup>

● 四十丁

○類聚国史百九十九<sup>ハ</sup>殊俗部<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>延<sup>ハ</sup>曆<sup>ハ</sup>十八年<sup>ハ</sup>七月<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>一人<sup>ハ</sup>乘<sup>ハ</sup>小舟<sup>ハ</sup>漂<sup>ハ</sup>着<sup>ハ</sup>参河<sup>ハ</sup>国<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 崑崙人<sup>ハ</sup>ナリ<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 其<sup>ハ</sup>資物<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>謂<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>綿種<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> <sup>逸史</sup>

● 四十丁

○類聚国史百九十九<sup>ハ</sup>殊俗部<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>延<sup>ハ</sup>曆<sup>ハ</sup>十八年<sup>ハ</sup>七月<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>一人<sup>ハ</sup>乘<sup>ハ</sup>小舟<sup>ハ</sup>漂<sup>ハ</sup>着<sup>ハ</sup>参河<sup>ハ</sup>国<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 崑崙人<sup>ハ</sup>ナリ<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 其<sup>ハ</sup>資物<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>謂<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>綿種<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> <sup>逸史</sup>

● 四十丁

○類聚国史百九十九<sup>ハ</sup>殊俗部<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>延<sup>ハ</sup>曆<sup>ハ</sup>十八年<sup>ハ</sup>七月<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>一人<sup>ハ</sup>乘<sup>ハ</sup>小舟<sup>ハ</sup>漂<sup>ハ</sup>着<sup>ハ</sup>参河<sup>ハ</sup>国<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 崑崙人<sup>ハ</sup>ナリ<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 其<sup>ハ</sup>資物<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>謂<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>綿種<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> <sup>逸史</sup>

● 四十丁

○類聚国史百九十九<sup>ハ</sup>殊俗部<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>延<sup>ハ</sup>曆<sup>ハ</sup>十八年<sup>ハ</sup>七月<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>一人<sup>ハ</sup>乘<sup>ハ</sup>小舟<sup>ハ</sup>漂<sup>ハ</sup>着<sup>ハ</sup>参河<sup>ハ</sup>国<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 崑崙人<sup>ハ</sup>ナリ<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 其<sup>ハ</sup>資物<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>謂<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>綿種<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> <sup>逸史</sup>

● 四十丁

○類聚国史百九十九<sup>ハ</sup>殊俗部<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>延<sup>ハ</sup>曆<sup>ハ</sup>十八年<sup>ハ</sup>七月<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>一人<sup>ハ</sup>乘<sup>ハ</sup>小舟<sup>ハ</sup>漂<sup>ハ</sup>着<sup>ハ</sup>参河<sup>ハ</sup>国<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 崑崙人<sup>ハ</sup>ナリ<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 其<sup>ハ</sup>資物<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>謂<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>綿種<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> <sup>逸史</sup>

● 四十丁

○類聚国史百九十九<sup>ハ</sup>殊俗部<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>延<sup>ハ</sup>曆<sup>ハ</sup>十八年<sup>ハ</sup>七月<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>一人<sup>ハ</sup>乘<sup>ハ</sup>小舟<sup>ハ</sup>漂<sup>ハ</sup>着<sup>ハ</sup>参河<sup>ハ</sup>国<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 崑崙人<sup>ハ</sup>ナリ<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 其<sup>ハ</sup>資物<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>謂<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>綿種<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> <sup>逸史</sup>

● 四十丁

○類聚国史百九十九<sup>ハ</sup>殊俗部<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>延<sup>ハ</sup>曆<sup>ハ</sup>十八年<sup>ハ</sup>七月<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>一人<sup>ハ</sup>乘<sup>ハ</sup>小舟<sup>ハ</sup>漂<sup>ハ</sup>着<sup>ハ</sup>参河<sup>ハ</sup>国<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 崑崙人<sup>ハ</sup>ナリ<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 其<sup>ハ</sup>資物<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>謂<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>綿種<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> <sup>逸史</sup>

● 四十丁

○類聚国史百九十九<sup>ハ</sup>殊俗部<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>延<sup>ハ</sup>曆<sup>ハ</sup>十八年<sup>ハ</sup>七月<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>一人<sup>ハ</sup>乘<sup>ハ</sup>小舟<sup>ハ</sup>漂<sup>ハ</sup>着<sup>ハ</sup>参河<sup>ハ</sup>国<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 崑崙人<sup>ハ</sup>ナリ<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 其<sup>ハ</sup>資物<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>謂<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>綿種<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> <sup>逸史</sup>

● 四十丁

○類聚国史百九十九<sup>ハ</sup>殊俗部<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>延<sup>ハ</sup>曆<sup>ハ</sup>十八年<sup>ハ</sup>七月<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>一人<sup>ハ</sup>乘<sup>ハ</sup>小舟<sup>ハ</sup>漂<sup>ハ</sup>着<sup>ハ</sup>参河<sup>ハ</sup>国<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 崑崙人<sup>ハ</sup>ナリ<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 其<sup>ハ</sup>資物<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>謂<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>綿種<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> <sup>逸史</sup>

● 四十丁

○類聚国史百九十九<sup>ハ</sup>殊俗部<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>延<sup>ハ</sup>曆<sup>ハ</sup>十八年<sup>ハ</sup>七月<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>一人<sup>ハ</sup>乘<sup>ハ</sup>小舟<sup>ハ</sup>漂<sup>ハ</sup>着<sup>ハ</sup>参河<sup>ハ</sup>国<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 崑崙人<sup>ハ</sup>ナリ<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 其<sup>ハ</sup>資物<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>謂<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>綿種<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> <sup>逸史</sup>

● 四十丁

○類聚国史百九十九<sup>ハ</sup>殊俗部<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>延<sup>ハ</sup>曆<sup>ハ</sup>十八年<sup>ハ</sup>七月<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>一人<sup>ハ</sup>乘<sup>ハ</sup>小舟<sup>ハ</sup>漂<sup>ハ</sup>着<sup>ハ</sup>参河<sup>ハ</sup>国<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 崑崙人<sup>ハ</sup>ナリ<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 其<sup>ハ</sup>資物<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>謂<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>綿種<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> <sup>逸史</sup>

● 四十丁

○類聚国史百九十九<sup>ハ</sup>殊俗部<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>延<sup>ハ</sup>曆<sup>ハ</sup>十八年<sup>ハ</sup>七月<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>一人<sup>ハ</sup>乘<sup>ハ</sup>小舟<sup>ハ</sup>漂<sup>ハ</sup>着<sup>ハ</sup>参河<sup>ハ</sup>国<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 崑崙人<sup>ハ</sup>ナリ<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> 其<sup>ハ</sup>資物<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>謂<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>綿種<sup>ハ</sup>云々<sup>ハ</sup> <sup>逸史</sup>



○同類史百九十九同十九年四月庚辰朔シテ綿種ヲ諸国ニ殖シムルヲ見ユ種破  
 ○綿種ヲ始テ植シ地ハ播豆郡天竹村ナリト三川堤ニアリ  
 新セン六帖ニ敷島のやまとにはあらぬから人の  
 うゑてしわたの種はたえにき  
 文祿年中又朝鮮ヨリ渡來リトイヘリ

○日本後紀

- 四 ○延曆廿年六月甲辰参河碧海郡人漢人部千英史イ十倉賣一一座三子三賜稻三百束一
- 四 ○類聚国史五十四八人部十多産十四丁 日本逸史十八丁同
- 四 ○同七月丙戌参河国三河国言英史 ○類史百六十五祥瑞上雲ノ奈奈 日本紀畧 同
- 三九 大同四年四月丁丑参河国言英史悠紀ト美作国言英史爲主基ト国史十八逸史十七
- 九 ●皇年代畧記廿四弘仁元年十一月十八日卯卯大嘗會美作 同
- 九 同五年三月戊申参河国飢遣使賑給紀畧 同
- 九 同十一月甲子免参河美作兩國田租以供奉大嘗也 同国史十八逸史廿四
- 十六 ○弘仁十四年七月壬申参河遠江兩國頻年旱夜並免當年庸同 同国史百七十三逸史廿七

- 十七 ○類史百七十三災異部疾疫奈奈
- 安倍朝臣 延曆十七年叙從五位下云々任左馬頭兼参河守同
- 男英史傳英史 同国史六十六逸史廿四

○續日本後紀

- 二ノ二丁 天長十年六月己巳罪人百濟王煥岑元安房国今移参河国二
- 三ノ三丁 承和元年正月癸亥從五位下百濟公繩繼爲参河介一
- 八ノ廿九丁 同六年十二月丙辰奏伏見参河國守從五位下橘朝臣本繼等奏稱去年十一月三日五色雲見宝飯郡形原郷下畧 ○類史百六十五祥瑞上雲奈奈
- 和名杪形原式形原神社アリ
- 九ノ二丁 承和九年正月丁未從五位下豐前王爲参河守
- 十三ノ八丁 同十年六月壬午伊賀尾張参河武藏云々等十八国飢初加賑恤
- 十四ノ四丁 同十一年二月己卯参河国言永停任讀師以其布施物充用造寺料其法會之時以国分僧讀次施行之若刺依請許之
- 十六ノ十六丁 藤原吉野傳中弘仁十年正月叙從五位下除駿河守任参河守強濟諸事所部肅清此傳必見ヘシ忠考コアリ



●十九ノ三丁

嘉祥二年正月戊辰外從五位下菅原朝臣繼門為參河守

支英史

●十九ノ廿三丁

○同八月壬辰參河國守從五位下安倍朝臣氏主獻白馬四十疋牛四十頭及子四十

○是奉賀天皇室算滿于四十世

○類聚國史廿八帝王部ハ大十同

續紀文武天皇奈令諸國定牧地放牛馬ト見ユ

和名抄子ナシ

●七ノ廿三丁

承和五年九月甲申從七月至今月河内參河遠江云々等十六国一相續言有物如灰從天而雨累日不止但雖似椎異无有損害今茲議内道俱是豐稔五穀價賤老農名此物米華云

○文德實錄

●五ノ三丁

仁壽三年正月丁未安倍朝臣氏主為參河守

●六ノ五丁

齋衡元年三月戊戌外從五位下神直虎主為參河椽

●七ノ三丁

同二年正月丙申從五位下菅原朝臣河道為參河介

●八ノ十九丁

天安元年正月癸丑從五位下齋部宿禰木上為參河守

●五ノ三丁

同三月己亥安倍朝臣氏主為參河守

●九ノ廿一丁

同六月甲申參河國上言今月六日廳院東庫振動

○今昔物語云國府カタハラノ城院トイフ藏ニラサメタル物ハ皆出シテ何モナカリキ云々

●十ノ三丁

同二年正月壬子參河國上言不連理

●十ノ五丁

同二年甲子從五位上物部朝臣廣泉為參河權介内葉正侍医如故

●十ノ十九丁

同六月甲辰參河國言守從五位下安倍朝臣氏主卒仁壽三年正月為參河守秩滿後天安元年更復參河守卒時年六十五

●十ノ十九丁

同月己酉從五位下安倍朝臣良行為參河守

●二ノ初丁

嘉祥三年七月丙子朝授參河國祇並神從五位下

●三ノ十四丁

仁壽元年十月乙巳進參河國知立祇鹿而神階並加從五位上糟目日長狹投野見謁

●美史十四三丁

磐橋豆赤孫御津石鞍石纏阿志等十一神並授從五位下

○三代實錄

●三ノ一丁

貞觀元年正月十三日外從五位下壹志宿禰吉野為參河介

●三ノ十九丁

同四月十日是日神祇官ト以參河國播豆郡為悠紀美作國英多郡為主基

●皇年代畧記同十一月十七日大嘗會美作



同十一月十七日悠紀、國美、國俗、歌舞

タカラ云母波トアリ

政香云同郡、丁田村アリ秋、寢覚、長田村、三川、國トアリ

夫木、しつかなる長田、村にすむ人のかりつむいねのはかりなきかな

トアリ丁、旧長ニテ悠紀ノ旧跡ニハアラザルカ可考トイヘリ

同十一月七日、大藏少輔從五位下、御長真人、近人、爲參河守

同十九日、内藤正兼侍医、參河權介物部朝臣廣泉、正五位下、參河守從五位下、御長真人

人、近人、從五位上、外從五位下、參河、介、壹志、宿祢、吉野、從五位下、參河、權、椽、大原、宿

祢、麻呂、外從五位下

コハ大嘗ヨリテ加級セシナリ本書ヲ見ルヘシ

同二年八月十四日、辛卯、參河國獻、銅鐸一、高三尺四寸、徑一尺四寸、於渥美郡村松山

中獲之、或曰是阿育王之宝鐸也

○今村松村、女体、白大明神トイヘル古キ社アリ村老ノ傳ヘニ昔此村ノ山アヒヨリカ子

ト鰐口トヲ堀リ出セシヲ鐘、禁裏ヘ献リ鰐口ハ此社ニ納メテ今モ宝物トシテア

リ其堀出セシ処ヲカネホリト云ヒ其山ニフル寺トイヘル処モアリト其村人委

ク余ニ語レリ按スルニ銅鐸ヲ鐘ト傳ヘ誤レルナラム

●天保六年四月、余彼地ニ往テ女体社、神主トイヘルヲ訪テ聞ルニ彼社ハ村松庄村松

八王子、馬伏、醉馬、中頭、江、醉馬、伊川、津、石、神、高木、九ヶ村、總社ニテ祭礼ハ九月十三日

ナリ今モ鰐口ハ宝物トシテアリトイヘリ

楮カネホリト云フ処ハ村松ヨリ西南ニ當リテ馬伏村ノ地ニテ宇ハナクサト云

フ処ノ小川ノ柳ノ七八本アル処ニテアフム石ノアル処ヨリ西、方三丁斗ニアリ

又其辺ニゴキ田トイフ処アリテ御器ニツラホリ出セリ今モタゞ人其処ノ田ヲ

ツクレバ崇ラナス故社人ノミツクルトイヘリ

同二月十四日、參河權介物部朝臣廣泉、爲參河權守、内藤正侍医如故

同八月廿六日、彈正少弼從五位下、藤原朝臣安棟、爲參河守

同五年二月十日、從五位下、紀朝臣正守、爲參河守

同七年正月廿七日、遠江守從五位下、長岡朝臣秀雄、爲參河守

同八年正月十三日、正五位下、行右工門權佐、藤原朝臣廣基、爲參河權守、從五位下、行

參河權介、安倍朝臣三寅、爲權大椽

同二月十三日、外從五位下、行神祇權大祐、卜部宿祢真雄、爲參河權介

○類史百十四職官部十九、夢卒、大ニ卜部宿祢平麻呂、傳ニ貞觀八年、遷參河權介トアリ

同九年正月十二日、從五位下、太朝臣貞長、爲參河守

同十一年正月十三日、從五位下、行式部大丞、藤原朝臣善友、爲參河守

同十一年正月十三日、從五位下、行式部大丞、藤原朝臣善友、爲參河守

同十一年正月十三日、從五位下、行式部大丞、藤原朝臣善友、爲參河守

同十一年正月十三日、從五位下、行式部大丞、藤原朝臣善友、爲參河守

同十一年正月十三日、從五位下、行式部大丞、藤原朝臣善友、爲參河守

同十一年正月十三日、從五位下、行式部大丞、藤原朝臣善友、爲參河守

同十一年正月十三日、從五位下、行式部大丞、藤原朝臣善友、爲參河守

同十一年正月十三日、從五位下、行式部大丞、藤原朝臣善友、爲參河守

同十一年正月十三日、從五位下、行式部大丞、藤原朝臣善友、爲參河守

同十一年正月十三日、從五位下、行式部大丞、藤原朝臣善友、爲參河守

同十一年正月十三日、從五位下、行式部大丞、藤原朝臣善友、爲參河守

同十一年正月十三日、從五位下、行式部大丞、藤原朝臣善友、爲參河守

同十一年正月十三日、從五位下、行式部大丞、藤原朝臣善友、爲參河守



- 十六ノ十丁
- 四三ノ三丁
- 四十七ノ二丁
- 四十九ノ七丁
- 世三ノ廿丁

同三月廿三日外從五位下太朝臣貞長爲參河介以母喪去職勅起之  
元慶二年正月十一日散位外從五位下佐伯直是嗣爲參河權介

仁和元年正月十六日散位從五位上源朝臣進爲參河守  
仁和二年二月廿一日散位從五位下坂上大宿禰春岑爲參河權介

元慶二年六月二日勅以參河國權磨郡荒廢田一百町賜孟子内親王爲一身田  
清和天皇皇女延喜元年六月廿七日高亮紀男

○皇胤紹運祿云清和天皇第十一皇女母中納言藤諸葛女○六國史皇統記第十四皇女トス

○三川神名國帳云從四位下廳宮明神式外座幡豆郡トアリ今當郡ニ斎藤村其ツ  
キニ野宮村アリ此内親王斎宮ニ立ヒ玉ヒシト國史ニ見エサレトヨリアリゲ  
ナリ考ヘシ内外兩宮ヲ祀レリ

同年同月廿一日勅令東海東山兩道諸國簡擇勇敢輕銳者須待出羽國奏請應機弁  
赴伊勢二十人參河二十人遠江十人云々

- 八ノ廿二丁
- 十一ノ十九丁

貞觀六年二月十九日授參河國從五位上知立神砥鹿神並正五位下從五位下狹投  
神從五位上正六位上菟足神從五位下  
同七年十二月廿六日云々參河國從五位下赤孫神並授從五位上

- 十八ノ九丁
- 廿九ノ初丁
- 三十ノ十九丁
- 四十四ノ十五丁

○同十二年八月廿八日云々授云々參河國正五位下智立神砥鹿神並正五位上從五  
位上狹投神正五位下云々

○類聚國史十六神祇部十六神位四九丁ニモ同  
同十八年六月八日授參河國從四位下智立神砥鹿神並從四位上從五位上狹投神赤  
孫神並正五位下云々

○類聚國史十六神祇部十六神位四十六丁同  
元慶元年閏二月廿六日授參河國正五位上狹投神從四位下云々

同七年十二月廿八日授云々參河國從五位下石鞍神云々並從五位上云々

○類聚國史

- 十四ノ三丁
- 十六ノ九丁
- 十六ノ十六丁

仁壽元年十月乙巳見ルベシ

貞觀十二年八月廿八日授參河國正五位下智立神砥鹿神並正五位上從五位上  
狹投神正五位下

同十八年六月八日授參河國從四位下智立神砥鹿神並從四位上從五位上狹投  
赤孫神並正五位下



● 百七十七丁

● 百七十三丁

● 百七十三丁

● 百七十三丁

● 百七十三丁

● 百七十三丁

● 百七十三丁

● 百七十三丁

● 百七十三丁

● 百七十三丁

● 百七十三丁

● 百七十三丁

● 百七十三丁

● 百七十三丁

● 百七十三丁

嘉祥二年八月壬辰参仙三河国守從五位下安部朝臣氏主獻白馬四十疋牛四十頭支子

四十斛是奉賀天皇空筭滿于四十二也

大皇二年九月癸未遣使於伊賀伊勢美濃尾張三河五國營造行宮

冬十月丁酉鎮祭諸神爲將幸三河国甲辰不上天皇幸三河国令諸国无出今年田租

十一月戊子車駕至自三河参仙真流紀

天平勝室二年七月甲辰三河国海直玉依賣一產三兒給正稅三百束乳母一人

延曆廿年六月甲辰参河国碧海郡人漢人部手倉賣一產三子賜三百束

同八年四月辛酉美濃尾張三河等国公年五穀不稔饑餓者衆云々

仙石本八十三延曆六年正月癸尾張参河云々等因役夫一万九千八百人修理朝堂

院

同廿一年九月丁巳伊賀伊勢尾張三河云々等三十國損田百姓免租稅徵調

天平神護三年八月乙酉三河国言慶雲見屈僧六百口於西宮殿設齋以慶雲見也

是日論侶進退无復法門之趣拍手歡喜一同俗人

神護景雲二年八月己酉三河国獻白鳥九月辛巳初今年七月八月得三河国碧海郡

人長谷部文選所獻白鳥云々

宝龜三年六月癸丑三河国獻白鳥

延曆廿年七月丙戌三河国言慶雲見

和銅八年五月丙午参仙三河国地震壞正倉卅七又百姓所舍在々陥没

大皇元年八月辛酉参河遠江云々十七国蝗大風壞百姓所舍損秋稼

慶雲三年閏正月庚戌京兆及紀伊因崎参河駿河等疫給醫藥療之

弘仁十四年七月壬申参河国遠江而国頻年旱疫並免當年庸

延曆十八年七月是月有一人乘小船漂着参河国云々崑崙人云々其資物有如實謂

之綿種云々此文イト長シ本書ニツキテ見ベシ。此船着シ処ハ幡豆郡天竺村ナリト云ヘリ

写類聚国史九十二欽明天皇九年西春令千田直菟参河国宝飯郡砥鹿山得双鹿列卒有屠之者

忽患疫死自此其疫轉而餘卒不患疫万許一也知爲神領而自官寄附監時祭田也

○此漢獵部ハ仙石印本ニセズイカマアランヨク考ベシ

○帝王編年記

写本全部廿七卷アリ神代ヨリ九十三代後伏見院天皇マテ

光仁天皇宝龜二年十一月大嘗會参川因幡供奉其事

○續紀也ノ同之見合スベシ



○日本紀畧

印本合本五卷アリ醍醐天皇寛平九年七月ヨリ後一条天皇  
長元九年五月マデ

三ノ  
丁 天徳三年十一月十日詔贈故太政大臣藤原朝臣正一位封参河国鳥三河公諡曰謙  
徳公

○扶桑略記

印本合十五卷アリ

廿五ノ十四丁  
朱雀天皇 天慶三年八月廿七日尾張参河遠江三箇国封戸各十烟有勅奉寄伊勢大神宮又被  
寄負糸郡是乱逆間為遂實也

○大神宮雜事記云天慶四年三月廿八日以負糸郡被奉寄大神宮又依官省尾張三河  
遠江等郡神戶各拾烟被奉寄大神宮今之神トアリ

○大神宮雜例集云参河国本神戶廿戸神戶新神戶十戸神戶

○東鑑十六御神領三河国飽海本神戶新神戶トアリ

按本神戶トハ式ニ封戸参河二十戸トアルヲイヒ新神戶トハ天慶ニ奉ラレシヲ  
イヘルナラン

廿九ノ廿四丁  
後冷日本天皇 治曆三年八月十六日参河国解狀ニ係管寶飯郡渡津郷任人土生貞世所領北

牛以去七月廿二日辰一點所生犢牛其軀長三尺許毛色赤斑額腰白有回牙有二三尾  
二尾七尾下略本書ヲ見ルヘシ

●百練抄四ノ丁 治曆三年七月廿七日参河国進国解犢牛繪様相副三頭八足云々 晋大興元年  
有此例

○百練鈔

印本四ヨリ十七マテ十三卷アリ冷泉院天皇ヨリ本院後嵯峨院正  
元年中マデアリ 享和三年十月稿檢校刊行

●四ノ五十八丁 治曆三年七月廿七日参河国進国解犢牛繪様相副三頭八足云々 晋大興元年有此  
例

●九ノ八丁 壽永元年十一月十一日詔卿定申ス大嘗會参河神服使空ハトリ飯洛ハトリ事

○伯家三代記

●業資王記社御門 承元五年九月六日参河神服阿波荒妙御衣三ヶ国由册 物戸座重波差文等  
上



○新撰姓氏錄

上京皇別上

御使朝臣 出自謙景行皇子。氣入彦命之後也。菅田天皇御世御皇雜使大玉生等通述不仕。天皇遣使尋求並不復命。於是氣入彦奉詔。指一本於參河國捕獲參來。天皇嘉令使者賜姓御使連也。續日本紀合。式社考。碧海郡和志取神社。余云氣入彦命捕連臣於此地故曰鷲取乎。

○旧事記世。景行天皇皇子五十狹城入彦命。河長谷部。自祖トアリ同命力可考。

右京皇別下

氣入彦トイフ皇子古事記書紀旧事記細運錄等見エス。御立史。御史同氏氣入彦命之後也。持統天皇御代依居參河國青海郡御立地賜御立史姓日本紀漏。

○今賀茂郡御館村アリ

○類聚三代格

承和二年六月廿九日大政官符。應造浮橋布施屋並置渡船上。一加槽渡船十六艘。各參河國飽海。天作河各四艘。元各今事。

各加二艘云々

右河等崖岸廣遠不得造橋。仍增件船云々。但渡船者以正稅買備之。浮橋并布施屋料以救急補充之云々。

右文中駿河富士河相模。鮎河浮橋ヲ作リ

大井河四艘元二艘今加二艘。阿倍河三艘元一艘今加二艘。

○今義解

神祇令

孟夏神衣祭 謂伊勢神宮祭也。此神服部等齋戒潔清。以參河赤引神調糸織作神衣。又麻績連等績麻以織敷和衣。以供神明。故曰神衣。

釋云。伊勢太神祭也。其國有服部等齋戒淨清。以三河赤引神調糸織作神衣。又麻績連等績麻而敷和御衣。織奉臨祭之日。神服部在右。麻績連在左也。敷和者。宇都波多也。常祭也。

○續日本紀。大寶二年八月癸亥。勅伊勢大神宮。服料用神戶調。

○延喜大神宮式。六月月次祭。大神宮赤引糸四十絢。度會宮赤引絲三十絢。



○貞觀儀式

●殿社大嘗祭儀上

九月上旬神祇官差<sup>シテハトリ</sup>袖<sup>シ</sup>服<sup>シ</sup>社<sup>ニ</sup>神<sup>ノ</sup>主<sup>トシテ</sup>一人<sup>ヲ</sup>爲<sup>シ</sup>神<sup>ノ</sup>服<sup>ヲ</sup>使<sup>シ</sup>申<sup>テ</sup>官<sup>ニ</sup>賜<sup>フ</sup>驛<sup>ノ</sup>鈴<sup>一</sup>口<sup>ヲ</sup>遣<sup>テ</sup>參<sup>リ</sup>河<sup>ノ</sup>國<sup>ニ</sup>喚<sup>ヒ</sup>集<sup>メ</sup>神<sup>ト</sup>

●三初丁

戶<sup>ノ</sup>下<sup>ニ</sup>定<sup>メ</sup>織<sup>リ</sup>神<sup>ノ</sup>服<sup>ヲ</sup>長<sup>ク</sup>二人<sup>ヲ</sup>織<sup>リ</sup>女<sup>六</sup>人<sup>工</sup>手<sup>二</sup>人<sup>上</sup>

●同四丁

十月上旬神服使率<sup>シ</sup>服<sup>長</sup>織<sup>女</sup>工<sup>手</sup>等<sup>十</sup>人<sup>持</sup>神<sup>服</sup>部<sup>所</sup>輸<sup>調</sup>絲<sup>十</sup>絢<sup>到</sup>來<sup>修</sup>紀<sup>主</sup>基<sup>各</sup>五<sup>人</sup>

次各神服使并國司齋場預率<sup>シ</sup>服<sup>長</sup>織<sup>女</sup>等<sup>鎮</sup>神<sup>服</sup>院<sup>地</sup>云々使<sup>並</sup>服<sup>長</sup>織<sup>女</sup>等<sup>明</sup>衣<sup>料</sup>

布五端三丈一尺

●同廿二丁

即西國相共造神服院<sup>一院有</sup>四<sup>屋</sup>云々

神服殿一宇<sup>南戶長</sup>三<sup>丈</sup>五<sup>尺</sup>廣<sup>三</sup>丈<sup>三</sup>尺<sup>云々</sup>並<sup>構</sup>以<sup>黒</sup>木<sup>青</sup>以<sup>萱</sup>以<sup>葉</sup>柴<sup>葦</sup>部<sup>之</sup>

●同廿八丁

大政官符 參河國司

應進<sup>上</sup>服<sup>部</sup>女<sup>三</sup>人<sup>服</sup>長<sup>一</sup>人<sup>神</sup>調<sup>絲</sup>伍<sup>絢</sup>使<sup>某</sup>位<sup>神</sup>服<sup>某</sup>申<sup>ス</sup>

右爲<sup>供</sup>奉<sup>大</sup>嘗<sup>會</sup>其<sup>所</sup>差<sup>伊</sup>件<sup>人</sup>充<sup>使</sup>所<sup>喚</sup>如<sup>件</sup>國<sup>宜</sup>承<sup>知</sup>如<sup>使</sup>齊<sup>調</sup>絲<sup>依</sup>例<sup>進</sup>上<sup>上</sup>

口備前云々

○延喜式 全部五十卷

○神祇式

●四大神宮

六月<sup>ソキ</sup>月<sup>ノ</sup>次<sup>ノ</sup>祭<sup>ニ</sup>准<sup>シ</sup>之<sup>月</sup> 神<sup>酒</sup>廿<sup>五</sup> 庄<sup>別</sup>三<sup>斗</sup>當<sup>國</sup>十五<sup>庄</sup>伊<sup>賀</sup>國<sup>二</sup>庄<sup>尾</sup>張<sup>參</sup>河<sup>遠</sup>江<sup>雜</sup>賀<sup>廿</sup>荷<sup>三</sup>

●同四丁

九月<sup>ノ</sup>神<sup>嘗</sup>祭<sup>神</sup>酒<sup>廿</sup>三<sup>五</sup>中<sup>畧</sup>尾<sup>張</sup>參<sup>河</sup>遠<sup>江</sup>等<sup>國</sup>各<sup>五</sup>庄<sup>並</sup>以<sup>神</sup>稅<sup>釀</sup>造<sup>造</sup>

○儀式帳九月<sup>ノ</sup>茶<sup>ニ</sup>モ<sup>神</sup>酒<sup>貳</sup>拾<sup>參</sup>庄<sup>云々</sup>尾<sup>張</sup>三<sup>河</sup>遠<sup>江</sup>三<sup>國</sup>神<sup>戶</sup>各<sup>一</sup>庄<sup>又</sup>懸<sup>稅</sup>稻<sup>一</sup>千<sup>四</sup>百<sup>廿</sup>七<sup>束</sup>之<sup>中</sup>云々三<sup>河</sup>神<sup>戶</sup>十<sup>束</sup>ト<sup>アリ</sup>

度會<sup>宮</sup> 神<sup>酒</sup>廿<sup>五</sup> 當<sup>國</sup>十二<sup>庄</sup>餘<sup>國</sup>同<sup>大</sup>神<sup>宮</sup>

○外宮儀式帳九月<sup>ノ</sup>茶<sup>ニ</sup>モ<sup>懸</sup>稅<sup>稻</sup>六<sup>百</sup>七<sup>十</sup>束<sup>云々</sup>尾<sup>張</sup>三<sup>河</sup>遠<sup>江</sup>四<sup>國</sup>神<sup>戶</sup>六<sup>十</sup>束

○又云大神宮司奉進<sup>伊</sup>賀<sup>尾</sup>張<sup>參</sup>河<sup>遠</sup>江<sup>志</sup>摩<sup>國</sup>等<sup>神</sup>戶<sup>人</sup>夫<sup>所</sup>進<sup>御</sup>調<sup>荷</sup>前<sup>品</sup>ア<sup>リ</sup>本<sup>書</sup>ヲ<sup>見</sup>ル<sup>ヘ</sup>シ

封<sup>戶</sup> 參<sup>河</sup>國<sup>二</sup>十<sup>戶</sup> 右<sup>諸</sup>國<sup>調</sup>庸<sup>雜</sup>物<sup>皆</sup>神<sup>宮</sup>司<sup>檢</sup>領<sup>依</sup>例<sup>供</sup>用<sup>下</sup>畧



五廿五丁  
齋宮寮式

調庸雜物 凡諸国送納調庸并請受京庫雜物精貯寮庫支配雜用絹絶七百疋  
尾張長絹二十疋 參河白絹二十疋 遠江絹百五十疋 春米一千三百三十四石八  
斗中畧 黑米三百九十一石 尾張參河二百石下畧 黍子一石 河 胡麻油三石 江  
鯛焚割九十斤 胎貝鮓一石八斗 鯛放乾一百斤 參河

○北抄五ノ可考

七ノ四丁  
大嘗祭式

凡織神服者九月上旬神祇官差神服社神主人給驛鈴一口遣參河国召集神戸  
卜定織女六人工手二人訖率長以下十人將當国神服部所輸調絲十絢歸向京齋  
場先祭織屋然後始織下畧以下見ルベシ

○神祇官年中行事三河国和妙神服使神服氏一人神部二人又云以神服社神主  
神服氏人差進之ヲ

○百練抄九ノ八丁云 壽永元年十一月十一日諸卿定申大嘗會參河神服使空飯洛事

○天明大嘗會次第記云三河国ヨリ奉ル神服ヲバニモタヘトイヒスバシナリ

阿波国ヨリ奉ルヲアラタヘト云ヌノナリ昔ハカクナレド今ハ国々ヨリハ奉  
ラズ諸司トノヘ奉ルニ

七ノ八丁

雜器 凡應供神御雜器者神語目所司具注所須物數預前申官八月月上旬差官  
内省史生造五国監造河内和泉一人尾張參河一人備前一人到国先族後始造作ル中

七ノ九丁

參河国所造等呂須伎四十口 都婆波三十二口 中十六口  
多志良加八口 同卷ニテ洗瓦ト云フモアリシトハ通ハバヒラカニテ別ニタラソヘタルハ手洗  
山塚 小塚 各六十口 同卷ニテ短女塚ト云フアリ同類カ

豆伎 同卷備前所造豆伎三十口アリ  
同卷ニテ各六十口

七ノ八丁等呂須伎口別ニ酒五升 都婆波三十二口 十六口ハ別ニ酒五升  
匣六十口 匣上各盛  
管置

山塚別盛貯酢鰻酢各一升トアリコレニテ大サ考知ルヘシ

○貞觀儀式ニテ豆伎匣各六十口次ニ酒蓋十二口トアリ

○式部 祭畢都婆波已上亦置山野淨地トアリ

○太政官式

凡新任国司赴任者伊賀伊勢近江丹波播磨紀伊等六国並ニ給食馬志摩尾張參河  
美濃若狹越前丹後但馬美作淡路等十国准位給食并備下畧



○内藏寮式

廿五  
八丁ノ

諸国年料供進ノ条  
絶<sup>キ</sup>八百五十疋

調二百疋 白二百疋、参河国、所進、  
色二百疋、近江国、所進、

交易六百五十疋 遠江中畧七箇国各五十疋云々

絲四千七百七十四絢

調三千百八十絢

白絲二千八百八十絢 二十絢、参河国、所進、  
八百八十絢、伊勢国、所進、

色絲三百三十八絢、伊賀国、所進、

交易一千五百九十四絢下畧

羚羊角 諸国、所進、其數隨所出、

樽 伊賀伊勢尾張参河遠江云々十五箇国各二合

蜜樵 諸国、所進

蕪 諸国貢進、番次并數等、具在民部式、

青木香二百七十斤、尾張、国一百六十斤云々

干薑小一百斤 薑種十石

石遠江、国、交易、所進

石諸国、年料供進雜物并依前件アリ

○大宛遠江国三十口

○斑竹千六百隻遠江国所進

○支子遠江、国、三圓五十四斛

○民部式ノ上

廿二  
丁ノ

参河国上管

寶<sup>ア</sup>海<sup>イ</sup>

設<sup>ア</sup>祭<sup>イ</sup>

額<sup>ア</sup>田<sup>イ</sup>

湍<sup>ア</sup>美<sup>イ</sup>

石爲近国

○首書云延喜三年八月十三日割<sup>リ</sup>宝飯郡置<sup>キ</sup>設樂郡

● 十五丁 凡諸家封戶各爲三分一分充輸絶国二分輸布国但伊賀伊勢参河近江云々等、国ハ  
不得充封

○民部式ノ下

廿三  
丁ノ

凡諸国所進兵庫寮修理甲料馬革者尾張六張云々並以驛傳收等死馬皮熟而送<sup>レ</sup>  
之



十同  
丁

年料春米  
○令丁抹大炊室云々等語  
春米穀物分給諸司食料事  
伊勢國 大炊二十七石 尾張國 大炊二十石 參河國 大炊七百石 云々  
石廿二國各以正稅春運白米送大炊寮果米送省及內藏寮其運送備夫並給路糧  
凡諸國春米運京者伊勢近江丹波播磨紀伊等國二月廿日以前尾張參河美濃若狹  
越前加賀丹後四月廿日以前中納納訖若有未進者准教奪專當郡司職田直若不足  
者亦沒國司公廩

年料粗春米

尾張國 石 參河國 石 遠江國 石 中畧

石十八國各以粗穀內春收隨官符到進之其精代運賃用正稅不聽妄為類關本也

年料別貢雜物

伊賀國 紙麻五 伊勢國 筆百管紙 尾張國 筆百管紙 參河國 筆百管紙  
遠江國 筆百管紙 中畧

石別貢雜物並依前件自餘雜菜見典菜式其運送備夫各給路糧

○內匠式凡年料納黃楊木者參河國六枚

○今八名郡黃楊村多此木ヲ產ス

諸國貢雜物  
伊勢國 十八重 七〇各六二升

十同  
五丁

尾張國 十五重 五〇各六二升  
參河國 十四重 四〇各六二升  
遠江國 十四重 四〇各六二升

其外スルカニニイツカヒ十サガミ十六

右八箇國爲第一番 丑未年 中畧

凡諸國貢雜各依番次當年十一月以前進了云々 輸轉隨次終而復始其取得乳者肥  
牛日大八合瘦牛減半作糶之法乳大一斗煎得糶大一升但飼練者頭日別四把  
年料雜器

尾張國 大碗 五合 徑各 中碗 五口 徑各 茶小碗 六口 徑各 碗 廿口 徑各 蓋 五口

中掣子 十口 徑各 花盤 十口 徑各 五寸五分 花形鹽林 十口 徑各 盥 十口 小大口

長門國 磁器 云々

石兩國所進年料雜器並依前件其用度皆用正稅

交易雜物 茶 中

尾張國 白絹 十二疋 絹百五十疋 油三石 薄二合 苧一百十斤 鹿革廿張 鹿皮十張 鹿角十枚 藤子五石 胡麻  
子四石 桂子四石 鹿角菜三石 蝦菜四十斤 於胡菜三十斤  
參河國 白絹百二十疋 鹿革六十張 薄二合 苧九十斤 桂子廿石 胡麻子三石 鹿角菜二石 海松五十斤  
蝦菜廿斤 海藻根十斤 青苔五十斤 魚坂苔五十斤 於胡菜廿斤 耶乃刺曾五十斤

十同  
九丁



遠江國

絹六丈八尺 苧二百三十斤 鹿皮十張 鹿革廿張 大綿四百七十斤 樽三合 凝菜廿斤 海藻根十斤 胡麻

石以正稅交易進其運功食並用正稅

○古事記朝倉宮殿、ホタリトラスモハ秀樽ニテ今タルト云フモタリニテ其口ヨ

リシタ、リ出ル意ナルヘシタリキヲ今タルキト云フモ此イヒセ

知名砂ニ樽、和訓ヲノセズ

和凝海藻 古留 海藻 余木米

神馬藻 奈乃里曾

○主計寮式上

凡廿四丁ノ

凡貢夏調絲者伊賀三百絢 伊勢八百八十絢 參河二十絢 大頭 越前一百絢 安藝

五百絢 阿波一千五百絢 並七月三十日以前納訖

伊勢參河近江美濃但馬美作備前備中備後安藝紀伊阿波

右十二國並上絲

伊賀尾張遠江下畧

右二十五國中絲

駿河伊豆下畧

右十一國並上絲

伊賀伊勢尾張參河遠江下畧

右二十九國輪絹

駿河伊豆下畧

○今昔物語 大頭糸アリ

○主計式 諸國調輸錢糸大頭白絲二十絢トアリ 古寫本ニ大ヲ犬ニ作レリ 同物ナ

ルベシ 令絲十六兩ヲ曰絢トアリ

右十國輪絶

同 丁

諸國調輸錢糸

尾張國行程

調函八疋

窠綾三疋

絲二十絢

絲鹽

庫韓櫃十五合

中男作物 麻二百斤 黄葉二百斤 紙 紅花 胡麻油 雉脂 雜魚脂 鹽 干魚 雜魚鮓

冠羅 鼠跡羅各一疋 二窠綾二十疋 三窠綾五疋

替薇綾五疋 帛二百疋 緋絲 縹絲 綠絲各四十絢

練絲二百四十二絢 七疋二分 生道鹽一斛六斗 與調塩 自餘輪絹

塗漆着鐵五合 白木十合 自餘輸米鹽

合白木十合 自餘輸米鹽

參河國行程 上十一日 下六日

上十一日 下六日



調禱羅 藻羅各一疋 一窠綾十五疋 二窠綾五疋  
今三丁絲十 六面日絹 雜魚楚割二十五百五十一斤 鯛脯一百斤  
大百字本 大頭白絲二十兩調

鯛楚割九十斤 貽貝鮓三斛六斗 自餘輸白絹  
和名抄以多知波之加美云保曾木

庸韓櫃十合 合白木廣三寸深一尺行八合 自餘輸米鹽  
和名抄以多知波之加美云保曾木

中男作物 麻一百斤 黃藥三百斤 紙紅花 席 胡麻油 櫻椒油  
三才ツエハハツ 曼椒 今云以奴山椒 今三丁 曼椒油 雜魚脂 海藻 和名抄海藻

○和名抄云行程上十一日下六日

○三才ツエ六丁羅呂 上繪也

○今六丁 凡錦綾紗穀綾細紵之類皆潤一尺八寸長四丈為匹

○和名抄綾阿夜

○三才ツエ 四丁 貽貝三州勢州多有之類類蚌灰黑色肉類蚶微赤海人食之云々

○今三丁 細烏絹烏綿

○今七丁 廿ヨリ十六マデラ中男ト云フ

○三才ツエ 廿丁 半紙從三州出之又小菊紙三州阿須介出之

○字彙脂乾肉

遠江国 行程 上十五日  
 調一窠綾十三疋 二窠綾八疋 三窠綾二十疋 七窠綾二十五疋 小鴨鵝綾二十

七疋 舊織綾二十四疋 苧麻綾白十疋赤二十疋 吳服綾白二十疋赤十五疋 御  
 襪料白絹十二疋 緋帛四十疋 縹帛十五疋 椽帛二十五疋 質布十二端  
 自餘輸絹 但山香部 調庸輪布

庸韓櫃二十合 塗漆着鐵十合 自餘輸絲  
 中男作物 木綿胡麻油 與理等脂

○主稅式上

● 諸国出舉正稅公廨雜稻

尾張国 正稅公廨各廿万束 国分寺料二万束 文殊會料二千束 修理池溝料  
 三万束 救急料二万束

参河国 正稅公廨各廿万束 国分寺料二万束 修理志摩国分寺料三千束  
 文殊會料二千束 修理池溝料三万束 救急料二万二千束

遠江国 正稅公廨各廿八万束 国分寺料三万束 大安寺料四万九千束 文  
 殊會料二千束 修理池溝料三万束 救急料六万束 庚俸料二万六千八百束

白羽官牧馬百四十四百六十束 藥分料一万束

凡志摩国 諸讀師安居法服布施供養以尾張国正稅充之其所請用讀師以参河国  
 正稅充之正月轉讀寂勝王経會亦同

凡志摩国公廨料用尾張国縁海郡正稅穀給守三百石 自百五十石 史生七十五石



トアリ件氏云尾張此郡ナシ縁ハ縁ノ誤ニテ縁海郡ナルカトイヘリ○タカヲ按  
雜式五丁凡太宰貢雜官物船到縁海國灣引令知泊処トアレバ縁ノ誤ニハアラサ  
ルヘシ

●同六丁

○主稅式  
廿六丁

凡檢損并不堪佃田賑給疾死等使程限ハ中畧和泉尾張參河安房能登丹後石見日  
向大隅薩摩等國損田八十日不堪佃田六十日畧賑給疾死并准不堪佃田  
凡諸國國分寺各起正月八日迄十四日轉讀寂勝手徑其布施云々用正稅  
又云凡諸國自正月八日至十四日請部内諸寺僧於國廳行吉祥悔過法云々其布施  
供養並用正稅

○和名抄云管八田六千八百二十町七段三百十步正公各二十万束本縮四十七万七  
千束雜縮七万七千束

○按本縮トハ正稅公廩國分寺料志摩國分寺修理料文殊會料池清料救急料等ヲ合  
ビタル惣數ナリ

●廿九丁

雜縮トハ正公ヲ除テ數ナリ。  
祿物價法  
畿内絹一疋直絹廿束絲一絢六束綿一屯三束調布一端十五束庸布一段九束鐵一  
口三束鐵一廷五束伊賀伊勢志摩相模四箇國絹六十束絲十束綿六束調布三十束  
庸布廿束鐵三束鐵七束餘國不領之尾張參河兩國絲八束遠江國絹八十束下畧

●同十三丁

右位祿價直各依前件幣物并布施法服李祿等直亦准之其官交易准當時估云々  
驛馬直法  
尾張出雲二國上馬三百五十束中馬二百五十束下馬二百束  
參河遠江駿河云々等七國上馬三百五十束中馬三百束下馬二百五十束  
驛馬死損

●同十五丁

山城云々尾張參河遠江云々等五十國十分許損二分  
諸國運漕雜物功價

●同十六丁

東海道  
伊賀國駿別縮中尾張國東參河國東海路米一石充價稻十六束二把遠江國  
東五海路米一石充價稻廿三束一

右運漕功價并依前件其路糧者各准程給上入日米二升鹽二勺下人減半  
凡一駄荷率絹七十疋 純五十疋 絲三百絢 綿三百屯 調布三十端 庸布  
三十段 商布五十段 銅一百斤 鐵廿廷 鐵七十口

○兵部省式

●廿五丁

諸國健兒  
尾張國五十人 參河國五十人



遠江国六十人上下畧

○日本紀三四ウ健児ヲナカラヒトト訓命健児相撲トアリ

○民部式三四丁凡諸国健児皆免徭役云々

○日本史十五 養老二五七七定衛士数国有差

同  
八  
丁

諸国器仗

尾張国 甲六領 横刀今カニ十六口 ○統紀靈龜元年詔横刀ハ糸ニテ纏造レトアリ 弓四十張 式世造ル用度ノ丁

参河国 甲三領 横刀七口 弓四十張 征前四十具 胡篳祿四十具

遠江国 甲四領 横刀七口 弓五十張 征前五十具 胡篳祿五十具

右每年所造具依前件其様仗者色別一箇附朝集使進之ヲ

○主稅式世六ノ革甲胄ヲ作ル用度ヲノセタリ可考合 統紀宝龜十一年八月革甲ヲ作ル丁又桓武天皇九年糸ニモ革甲二十領鉄胄二十九百領作ル丁見ユ

同  
一  
丁

諸国驛傳馬

尾張国驛馬 馬津新清南 傳馬 海部俊智部各 村各十疋

参河国驛馬 鳥補山綱 傳馬 碧海宝飯部各 渡津各十疋

遠江国驛馬 御島原 傳馬 海名敷智部各 横尾初倉各十疋 佐野嘉原即各五疋

凡諸国驛馬皆買百姓馬堪騎用者置之不得買用固司私馬ヲ

○和名抄碧海額田宝飯三郡各驛家アリ

○鳥補不詳鳥捕トアルハ鷲取ト同半

○雲州本云貞享本馬補刻本鳥補林京二本鳥捕ニ作ル

○宮内省式

同  
二  
丁

諸国所進御贄

参河若狭紀伊淡路等四国 正月三日節料並内膳司

同  
三  
丁

諸国例貢御贄

尾張雄略 遠江 甘葛煎 甘子 穉海藻

石諸国御贄並依前件省即檢領各付所司例貢御贄直進内裏

○大膳式下

同  
四  
丁

諸国貢進菓子







石諸国所貢並依前件仍敷贖殿擬供御

参河国保夜一斛 土佐国腸清小鯨四年每年交易進上

○和名抄 老海岸俗用保夜二字 ○土佐日記 ぼやのつまのいすし

○ホヤハ長四寸五分横二寸斗ノモノニテ惣身朱ノ如ク目モロモナク甲ニハ生海鼠ノ疔ノ如キモノアマタアリテ上品ノ味アルモノナリ 奥州福島ノイト深キ海底ニアルモノナリトシリウ言ニイヘリ

○卷十七内匠寮式

廿五丁ノ 凡年料納黄楊木者参河国六枚

民部式五丁黄楊六丁トアリ

○八名郡黄楊村アリ其山ニ此木多クアリト云ヘリ

凡内記局所請位記料云々黄楊軸廿枚云々毎年十二月充行之

○江家次第 全部十九卷

五十三丁

圓宗寺宸勝會系永宣旨国々△永保二年六月十六日宣旨  
毎年正月以前進納精好絹十一匹 参河絲十絢 参河

○北山抄 全部十卷アリ

廿五丁ノ

大嘗會系 九月上旬神服使神服社給神主貳鈴遣参河国十月上旬又由加者供神雜贄  
爲由加物

使卜部遣三ヶ国阿波国荒妙衣料布等付此使

○類聚符宣鈔 全部十卷アリ

四十七丁ノ

任諸国郡司軍系

太政官符参河国司内印

八名郡主帳外従八位上若紫部オト首統忠外少初位下  
参河吉極考辭替

右公年二月十三日補任如件固宜承知依例任用符到奉行辨

永延二年七月廿三日



○大同類聚方

五十一代平城天白至大同二年 勅選ニテ全部一百卷アリ 卷首毎  
從五位下與兼大頭安倍朝臣貞貞 等奉勅同撰下アリ 文政十一年戊  
子冬豐州武藏藤吉得刊行ス

●初八丁卷

加比也乃比奈

大村藥 三河国 郡大村乃家 尔傳而 朝家 尔所上養乃方也  
小兒乃年之加武利也民波腹大 尔滿脹利時之少久痛 故尔好天啼 支不止或波飲  
食少久 數月不愈乃者 尔與布返之加太加比 尔毛善

古比須 燒 久壽也迹

二味乎須波知乃安免 尔天煉利合世 腹尔塗 流 奇方也

●初八十五卷

波多介加差奈

原井戸藥 三河国茨田郡池田高間安雄乃家 尔所傳乃方

○茨田郡トイフハ三川ニハテシ可考

波多介瘡乃初發 尔用流乃藥方

阿利乃比布紀 乃久豆祇

加布加乃支 須比波奈

美良乃祇 袁加須美

六味乎水 尔煎呈與布

波多介加差波 惣身熱久 惡寒乎身赤久 而後二三日乃内乎乃指間 尔小赤瘡乎發之  
大 尔瘡久 後波黃水汁流出足表或波 胫 尔普久 發出呈 後波或膿痛 民滿脹呈 數月甚  
久而不愈者也

同書勅撰真本 廿五丁

穴加差藥 参河国額田郡謁權神社之宮造額田部連長之藥方 下畧

同十六丁 母良世藥 参河国寶飯郡御神社傳方御之里村瀬賣名之家之藥也 下畧

同三十九丁 可无多藥 参河国額田郡鴨田之高間安雄乃家ニ世々傳不流藥之方

波美一尾 意休乃由ニ文目 右燒 天 研木天用雲倍之

同五十六丁 血登免乃附藥 三河之大伴直蘆之傳之方

伊之良 阿秘类 柔須娜 右細ニ研木疵口ニ布利加久倍之

○勅撰真本大同類聚方

●十六丁

架奢菩良新奈



母良世藥 參河国宝飯郡御按ニ御ノ下津ヲ脱セルカ 神社傳方御之里村瀬貝名之家之藥也。風疹之藥ナリ

風癢身痒久熱甚手足腫礼痛按ニ神名式宝飯郡ニ御津神社和名抄ニ御津御アリ恐クハ二所ナカラ津ノ字ノ脱タルアルカ 羊吞二用流方

烏波支本草 三分 夜万阿良々支庚 三分 首書御本

波未逐武南二分 阿可万具謝沢 三分 波久流免作

五十六丁ノ

紀羅良藥 三河国吉良々里人平常用由方同病殊仁婦人耳久志紀師留之安理。

○頭痛ノ藥ナリ 迦滿能波難滿 六分 奇來々母 四分 余一分

粉仁爲 元用靈遍羊蹄

○當国膳豆郡吉良庄アリ雲田ノ出ル故ニ名ツクト云リ

五十八丁ノ

可无多藥 參河国額田郡鴨田之高間安雄乃家ニ世々傳不流藥之方。疔藥ナリ

○今當国鴨田村アリ

蝦蛇 一尾 意保万里 二文目

右燒天研木 天用雲倍之

穴加差藥 參河国額田郡額田郡額田郡連長之藥方神名式額田郡ニ額田神社アリ

五十五丁ノ

阿那瘡、頭面手足腫 天年久久疼美天迷開破礼膿多又流礼出天穴乃口愈散流者南

利 貝ニ用井天能藥

波美 燒一炙 都介止利 燒一炙

須比波南 七分 万川甫土 七分

我乃乃寸美 五分

細ニ研木 日々湯ニ天可用于

血登免乃附藥 云々

又之方 三河之太伴、直蘆之傳之方

伊之哀 祇秘類

承須娜

右細ニ研木疵口ニ布利加久倍之

日本紀廿五丁三河太伴又云、蘆又云 此四人云々トアレバ太伴ト蘆トハ二人ナルベシ

○国内神名帳八名郡ニ太伴天神アリ

腸平收流法 同家之法也

多々毛乃加之良一燒豆 登宇須 五分 娜能離楚 三美

研究温酒仁綿ニ浸之温收羊蔽之

五十六丁ノ

四十九丁ノ



○本朝文粹

扶桑拾葉集云丹波人忠行ノ子大内記  
從五位下莊善滋法名寂心加茂保定忠弟之

晚秋過參州藥王寺有感

慶保胤

所建立也聖跡雖舊風物惟新前有碧瑠璃之水後有黃纈縵之林有草堂有茅屋有經藏有鐘樓有茶園有菜園白眉岫兩余是羈旅卒牛馬之走初尋寺次逢僧庭前徘徊燈下談話耳目所感聊記斯文云爾

○扶桑畧記廿七ノ内院院天元五年十月大内記慶滋保胤作池亭記トアリ

○日本靈異記卅六ノ紀伊国名草郡藥王寺藥王寺今謂之勢多寺也

○紀伊名所圖繪六ノ上ノ名草郡藥勝寺村瑠璃光山天平院藥王寺下ニ晚秋過紀伊州藥王寺有感 紀各名

紀伊州名草郡有一道場曰藥王寺云マテテ碧瑠璃ノ三字ヲ日月星ニ改ヘタルクニテ一字モ遺ハサル同文ヲロタリ

○本朝鍛冶考三ノ三ノ條ニ 自古後伏見御宇正安銘ニ河内位竹葉王寺

孝苗 後花園御宇葉王寺久原住 助長葉王寺大友トト銘

吉十 時代系圖未詳葉王寺吉十ト銘ス

○授矢矧ノ南本鄉村蓮花寺ヲ古ノハ葉王寺ニイヘリ

○古刀銘鑑上丁ノ葉王寺三河矢矧生トアリ

○伊呂波字類抄ニ如是危輪寺ト云ルハ入道法名寂心也在河内入道寂胤以寂心爲師同在此寺

三河國古蹟考  
第六卷

參河國歷代事蹟考

夏之卷



三川国歴代事跡考 卷之二 目錄

内宮儀式帳	外宮儀式帳	内宮建久年中行事
神宮雜事記	同 雜例集	同 神鳳抄
外宮神領目錄	同 神領給人引付	氏 經 記
春 記	旧 本 今 昔 物 語	同 印 本
宇治拾遺物語	古 今 著 聞 集	同 訓 抄
沙 石 集	發 心 集	宝 物 集
伊 豆 日 記	吾 妻 鏡	神 皇 正 統 記
鎌 田 草 子	元 亨 紀 書	保 元 物 語
平 治 物 語	平 家 物 語	源 平 盛 衰 記
義 經 記	太 平 記	前 大 平 記
續 太 平 記	康 正 二 年 造 内 裏 殿 錢 目 役 引 付	
大 本 史	園 大 曆	

三川国古詞歌 卷之二 目錄



○内宮儀式帳

此書桓武天皇延暦廿三年癸上ノモノニテイト古キ物ナリ

●丁十 新宮造奉時行事条

常限卅箇年一度新宮遷奉<sub>シ</sub>奉<sub>ル</sub>中<sub>レ</sub>即<sub>テ</sub>祭<sub>ニ</sub>役<sub>ト</sub>夫<sub>ヲ</sub>伊勢美濃尾張<sub>ノ</sub>三河遠江等五国ノ別<sub>ニ</sub>国司一人<sub>ヲ</sub>郡司一人<sub>ヲ</sub>奉<sub>テ</sub>役<sub>ト</sub>夫<sub>ヲ</sub>奉<sub>テ</sub>向<sub>テ</sub>道<sub>ヲ</sub>奉<sub>ル</sub>

●丁六十 九月条

供奉大神宮處々神戸荷前物

絹二疋<sub>赤白</sub> 絲三絢 綿五十三屯

神衣料白布一端 麻六斤 木綿三斤

己上伊賀尾張三河遠江四箇国神戸供進

神酒貳拾<sub>正</sub>云々尾張三河遠江三国神戸

懸稅稻一十四百廿七束云々尾張神戸九束 三河神戸十束 遠江神戸九束

○外宮儀式帳

此書延暦廿三年癸上ノ書ニテイト古キ物也

●丁八十 九月条

懸稅稻六百七十束 伊勢国神戸六百十束 伊賀尾張三河遠江四国神戸六十束

大神宮司奉進伊賀尾張三河遠江志摩国等神戸人夫所進御調荷前

絹二疋 糸二絢 綿五十二屯 荒太倍一端 木綿二斤 麻五斤 雜<sub>暗</sub>廿斤

塩四斛 熬海<sub>前</sub>十斤 乾羅<sub>鮑</sub>廿斤 堅<sub>魚</sub>十五斤 海藻<sub>根</sub>卅五斤

○大神宮建久年中行事

●丁四十二 四月十四日

風日祈宮祭礼条

次遠江神戸種薑詔刀 件種薑兼日酒殿建納今日件出納從西門

祝詞= 常<sub>御</sub>催<sub>奉</sub>苗<sub>遠</sub>江<sub>神</sub>戶<sub>種</sub>薑<sub>乃</sub>御<sub>贄</sub>於<sub>奉</sub>狀<sub>於</sub>平<sub>又</sub>安<sub>又</sub>聞<sub>食</sub>天<sub>云</sub>

其後風日祈直會<sub>都</sub>養<sub>膳</sub>預<sub>納</sub>食<sub>料</sub>所<sub>三</sub>河<sub>国</sub>泉<sub>御</sub>園<sub>也</sub>

神鳳抄 泉御園アリ今碧海郡泉村アリ又八名郡御園村ヲ泉トイヘリ



柳遠江神戶所進種薑今日供進由殘、檢宜中分配而檢宜各以其内子良宿館南垣内、  
所奉種也爲物忌父等役奉殖然後九月御祭之時御饌所供進也  
○神風抄遠江國新神戶内種薑二斗八升アリ

●七十丁

六月廿一日滝原宮祭礼、祭幣使米同郷役米三斗運送、以代三彼沙汰不足之間去、ル文安元年、三河國高師御

厨神税之内、五十疋被相割彼口入所、沙汰之、和名抄渥美郡高芦郷アリ

神風抄高志御厨

●三丁

七月四日風日初宮柏流神事、祭

神事畢、後於一殿、在直會饗膳、其座并勅盃配膳、如件饗膳ハ、三河國松山御厨乃勤也、結六本

神風抄杉山御厨

●四丁

十月一日更衣神事、祭正權、檢宜各着一殿、在饗膳云々、件所、三河國所在河内、御園也、神風抄河内御園

●四丁

同日御綿奉納神事、祭

進納荷前御綿等支、絹三尺之中一疋當国上一疋、三河神戶一疋、遠江神戶續七也、遠江神戶

### ○大神宮諸雜事記

二卷アリテ上卷下卷アリ、跋此記文寛治七年官沙汰被召上之後同八年所被返下也トアリテ垂仁天皇御世大神伊勢御鎮座アリシ件、トヨリ後三条天皇、延久元年十月十日マデ、ラクサク記シタル書

●一丁

垂仁天皇壽百世冊六本

天皇即位廿五年、丙辰天照坐皇太神天降坐於大和國宇陀郡、于時國造進神戶等、今号宇陀、是也、是已皇太神宮始天降坐本所也、其後奉令鎮座伊勢國度會郡宇治郷五十鈴川上、下郡磐根御宮所也、柳皇太神宮、勅託宣、備我天宮御宇之時、天下四方國楨録可天下官所放光明、見是置、畢本先了、仍彼所可行幸御之由、宣倭姬内親王奉戴天先、伊賀國伊賀郡一宿御坐、即國造奉其神戶、次伊勢國安濃郡藤方宮、御坐三年之間、國造奉寄神戶六箇處也、所謂安濃一志、鈴鹿、河曲、桑名、飯高、神戶等也、次尾張國中島郡一宿御坐、國造進中嶋神戶、次三河國渥美郡一宿御坐、國造進渥美神戶、ハ本アリ、次遠江國濱名郡一宿御坐、國造進濱名神戶、從此等國更還天、伊勢國飯高郡御坐、三月之後、差度會郡宇治郷五十鈴川頭、進益末、絲申云、此河上、寂勝地、侍其妙不可比、他處、早速可垂照、整御也、即奉迎而大田命神御共奉仕、令照整、早畢、



于時皇太神宮訖宣備、此地者於天宮所見定之宮所是也、看奉鎮坐、既畢、即神代祝大中臣、遠祖天兒屋命神、祢宜荒木田、遠祖天兒通命神也、宇治土公、遠祖大田命神、當土乃土神也、然而為玉串大内人、即与荒木田氏祢宜相並供奉於祭庭之例也、

○按中嶋郡下三箇月御坐国六、字アルベシ倭姫世記、中島宮三月奉齋、見エタリ

又三河云、国范蓮下、渥美神戶、四字アルベシサレド、三河遠江マ、テイマシアリシ、儀式帳日本紀等、見エバ疑ハシ、世記モナシ

一ノ十五丁

宝龜十年八月五日夜五時、大神宮正殿、東西、宝殿、及外院殿舍等皆悉燒亡畢、中畧、被下、官符、於伊賀伊勢美濃尾張三河五箇国、天、正殿、東西、宝殿、及重々御垣門、外院殿舍等、早速可奉造之由也、其官符此備、以當年正稅官物、應造進也、仍件、五箇国司等、各進奉神宮、願不日之功奉造、即修理職、大工物部、建麻呂、小工、上并五百余人、各急速奉造既了、下畧

一ノ廿五丁

扶桑略記雜例集、八月廿七日アリ

天慶四年三月廿八日、以員并郡被奉寄太神宮已了、又依官省符、尾張參河遠江等郡、神封戶、各拾烟、被奉寄於太神宮已了、今、新神戶是也、二所太神宮、祢宜各賜一階、乃是則依將門追討之御祈禱也、又七道諸国神社、被奉增位階了、

二ノ初丁

長曆二年七月日、勅使參宮宣命、狀云、公家可有御慎之由、類卜申、仍御封百戶所、奉寄也、又二

官祿宜等賜一階了、御封近江廿五戶、美乃国、參河国、上野等、国各廿五戶、官省符到未了

### ○神宮雜例集

此書三卷アリテ、上卷三葉、下卷五葉アリ

上ノ十一丁

#### 第四神封事、付御領

大正二年七月八日、格云、詔、伊勢太神宮封物、若是神御之物、宜准供神事、勿令監禱也、延曆廿年四月十四日、格云、太神宮封戶、非改減之限、

一 神戶四百十三戶、七ヶ国在、

三百五十三戶、本神、御鎮坐之昔国造、貢進

卅戶新神戶、天慶三年八月廿七日、符

卅戶新神戶、文治元年九月九日、符

此、キ、伊勢国百五十二戶、大处、大和国神戶十五戶、伊賀国神戶廿戶、志广国六十六戶

尾張国六十戶、ヲ、セタリ、

此内新神戶、古新加、十戶アリ

上ノ十三丁

參河国、祢宜



本神戸廿戸 号瀬美 神戸

○延喜式封戸後河内二十戸トアルコレ

新神戸十戸 号鮫海 神戸

○扶桑略記雜事記等天慶三年奉ラルトアルコレ

新加神戸十戸

○文治元年符トアルコレ  
コハ大津神戸ナルト大宮司家古記見ユ

此ツキニ 遠江国本神戸戸十戸 瀨美 号中田 神戸 新神戸十戸 号中田 神戸 新加神戸十戸トアリ合テ四百十三戸

上ノ十六丁 員并郡天慶三年八月廿七日符二百畑トアル糸

大政官符民部省

應奉加寄伊勢太神宮壹郡并封戸事

同員并郡 封戸參拾戸 尾張国拾戸 參河国拾戸 遠江国拾戸

右從三位守大納言兼右近衛大將行陸奥出羽按察使藤原朝臣実賴宣奉勅件一郡并封戸

宜奉加寄被大神宮者省宜兼知依宣行之仍須件員并郡官物官舎之類准弘仁八年十二月

廿五日格行之符到奉行

石少辨正五位下兼行内藏頭源朝臣

石大史正五位上大内宿祢

天慶三年八月廿七日

上ノ十七丁 一七箇国封戸 二百九十戸

十戸 尾張国 年記未詳或云天慶三年八月廿七日符天是新神戸歟

卅戸 參河国 寛弘二年以前符

百戸 參河近江美乃 上野各廿五戸 長曆二年七月符 雜事記初丁可考合

百戸 尾張近江美乃 信乃各廿五戸 永義三年十二月十日符

五十戸 遠江国 載于美曆正統帳之由見主稅寮勘文

烟別所當

調絹一疋 庸米一石二斗

中男作物油七合 相穀四石

封丁廿五烟一人

運賃 隨国<sub>ナ</sub>有法但美乃副未領信乃上野副賦賃仍除之

合准米

除色代濟国分



此間  
尾張國本封云々

參河國

本封

調絹十九疋三丈七尺五寸

庸米二十三石一斗

儀功米七十五石

中男作物胡麻油七升

封丁一人

新封

調絹參拾漆疋壹丈壹尺貳寸伍分

庸米四十二石八斗七升五合

租穀百石

中男作物胡麻油一斗七升五合

儀功米六十二石五斗

封丁一人

自尾至八百七十六  
字以古記補入之

ハ本カコミナシ

又云准米三百十二石五斗九升九合

庸米六十五石九斗七升五合

雜用二百四十六石六斗二升四合使供給雜事

此ツキ 遠江國五十戸 近江國五十戸 美濃國五十戸 信濃國五十戸 上野國五十戸 等ヲノセタリ

此神戸、トハマカ大神宮神領考ニモクイフヘシ

下ノ冊七丁

一 神服機殿政印事

左辨官 下伊勢、太神宮司

應早令注進當宮機殿印字樣事ノ条ニ

上書

縱雖中絶、任式條以三河、因神調赤引御絲、可被奉織神御衣、由所言上、也、中男、雖有遲緩之恐、

繼、尚、與、廢、苟、尚、當、職、者、今、所、經、言、上、也、者、仍、相、副、言、上、如、件、者、右、大、臣、宣、奉、刺、宜、引、檢、本、宮、

之、文、書、注、進、彼、印、之、字、樣、者、宮、司、承、知、依、宣、行、之、

嘉應二年八月廿七日

大史小槻宿祢

少辨藤原朝臣

トアルハ、校、機、殿、政、印、ト、赤、引、糸、ト、ト、一、紙、セ、テ、言、上、セ、シ、ト、コ、ロ、政、印、ト、ハ、勅、許、ア、リ、シ、カ、ド、赤、引、糸、ト、ハ、御、沙、汰、ナ、カ、リ、シ、政、



下ノ廿八丁

神服織機殿神部等解申請、廳宣事

神服織機殿神部等解申請、廳宣事  
神部御衣御糸事、令糸并度々、宣旨以三河國赤引神調御糸、可被奉織之由、載于一紙、同  
經言上之知、未被裁下之糸、且為恐且為愁、何者縱雖不被載于式、神事嚴重之間、隨申請被  
定置祈取之例、幾哉、况於神御衣、勤者皆畏、天照坐皇太神御坐高天原之時、以神部等、遠祖天  
御祥命、自可以八千、媛、自織女奉織之間、御垂跡之後、于今其勤誠、以嚴重无及也、且、以彼  
國、赤引御糸、斎戒潔清、可奉織之由、所被定置神祇、令、軟隨致其勤之、尅、自然中絕、然而麻績機  
殿御衣、御麻沙汰之次、以三河、赤引糸、奉織之由、實治而度、宣旨又以明白也、其中絕子細雖  
无、指所見、先度如言上、其時、大神部親春、犯用供祭物、隨身、彼印、先帝、沙汰文書等、於他國  
之由、所申傳也、於逃亡、子細、者見、于正曆年中、氏人、與經、在、其、向、并寬弘年中、神部、近守、申  
文、在、祭、主、等也、其後神部等、不言上之糸、雖有、遲緩之、恐、今神、在當職之、神部、在、其、向、令、糸、并、度、々、  
宣旨、自神、為朝、益、經、言上、哉、就中、神部等、而、私力、奉織之間、自、守、藏、人、大夫、光、隆、朝、臣、被、檢、封、  
御糸、奉納、八百、重、次、ハ、ハ、ハ、住、宅、之、糸、是、神、令、然、之、事、取、依、為、未、曾、有、事、言、上、次、麻、之、間、度、々、雖、  
被、宣下、未、遂、沙汰、節、然、則、任、彼、令、糸、并、兩、度、宣旨、以三河、赤引、神調、御糸、斎戒、ハ、ハ、ハ、  
織者、神事、違例、之、御、崇、自、消、空、位、无、傾、之、御、誓、叶、神、慮、仍、相、副、彼、宣旨、并、親、春、逃、亡、證、文、等、案、言  
上、如、件、謹、解、ハ、ハ、ハ、  
○ 赤引糸、一、別、考、アリ

嘉應二年九月廿九日

少神部神服連公俊正  
大神部神服連公道尚

下ノ五十丁

第十年中行事六月条

今月廳宣成事

三河遠江、神戸所、當、ハ、ハ、ハ、彼、濱、名、神戸、園、田、所、當、ハ、ハ、ハ、

○神鳳鈔

一卷四十五葉アリテ、本三延文五年三月日本宮注進本并外宮一祈宣、清宗神主之等、勤之書、写之注文  
之内、未、点、者、建久四年二宮進宮注文、自本所、令、台、点、累、点、者、自、具、以、來、書、入、云々、以、奉、目、神、主、本、書、写、之、  
但、今、度、皆、以、黑、書、ハ、ハ、ハ、伏、經、ト、アリ

初丁二

二所太神宮御領諸国神戸、御厨、御園、神田、名田等、

トアリテ、伊勢、志摩、近江、美濃、尾張、ト記シテ

廿七丁目  
三河國

木神戸内、御神酒三疋、用紙三百帖、瓶子十二口、祭料酒造米二石、ハ、ハ、ハ、  
○ 外宮、儀、式、帳、九、月、条、  
懸、統、箱、云々、三、河、神、戸、六、十、束、  
荷、前、御、調、絹、四、疋、ハ、ハ、ハ、  
○ 建久年中行事十月一日御綿奉納神事、糸、絹、三、疋、中、一、疋、當、  
國、上、一、疋、三、河、神、戸、一、疋、遠、江、神、戸、ト、アリ、○ 渥美郡仁崎村其、  
本、保、  
懸、力、柏、州、束、



神戸多ケレバモシ荷前  
由ハナキカト從繩イヘリ 置廿枚

新<sup>神戸イ</sup>内 御神酒三疋 用紙九十帖 瓶子二十口 祭料<sup>二保</sup>造酒米一石 懸力<sup>三十一</sup>箱十三束  
荷前御調糸<sup>四十八本</sup>二勺 絹四丈 短茵<sup>四十八本</sup>七枚

▲<sup>ハ本</sup>短質二枚下<sup>二</sup>

新加内 御酒一疋 用紙三十帖 瓶子<sup>ハ本ナシ</sup>四口 造酒米一石 懸<sup>力</sup>箱十三束 荷前御調  
糸<sup>ハ本</sup>二斤 絹四丈 短茵七枚トアリ

二宮 ●本神戸 見作廿八町廿二反 ○延喜式ニ封戸三河国二十戸トアルコレ

○今アツミ郡神戸郷七村又片神部村アリ  
雜例集...サ戸号渥美郡戸御領坐之昔因造貢進トアルコレ

二宮 ●新神戸 同見作十七丁七反  
○扶桑傳記雜事記等ニアルコレ  
○東鑑十六新神戸

○吉田城内神明棟札永正六年又天文十九年三河国渥美郡新神部郷  
○雜例集新神戸十戸号飽海神戸天慶三年八月廿七日付トアルコレ

二宮 ●新封戸 同見作十七丁七反  
コレ大津神戸ナリ  
雜例集新加神戸十戸

文治元年九月九日付トアルコレ

二宮 ●大津神戸 前祭主卿知行 後鳥羽院御母藤原殖子マ七余院ト号スコレカ  
七條院御祈禱所

○今アツミ郡...村アリ  
○東鑑十六御神領...  
内宮 ●橋良御厨 六石 ○今アツミ郡...村アリ  
○東鑑十六...  
二宮 ●生栗御園 各栗三石油二斗 ○今アツミ郡...村アリコレカ  
○外目アリ 又ハツ郡六栗村アリ

○今アツミ郡...村アリ  
○今アツミ郡...村アリ

○今アツミ郡...村アリ  
○今アツミ郡...村アリ

○今アツミ郡...村アリ  
○今アツミ郡...村アリ

○建久年中行軍六月廿二日滝原宮祭礼糸ニ連卷出立ハ自幣便給之幣使水同郷役水三斗運送<sup>以代</sup>被沙汰不足之間去文安元  
年三河国高師御厨神稅之内五十疋被相副彼口入所ヨリ沙汰之云々



外宮

● 御庭御厨 見作三分一 御内七石五斗上分残口入  
○ 今ハツ郡一ノ村アリ ○ 外目アリ

外宮

● 萱御園 六石 ○ 今アツミ郡に連木村ニハジカミトイフ字処アリコレナルベシ  
○ 外目アリ ○ 東鑑十六ノ御厨

○ 雜例集下三月祭種萱御敷之車遠江国濱名神戸所課也

○ 大神宮建久年中行事四月十四日祭ニ遠江ノ神戸ヨリ種萱ヲ奉ルアリ可考 ○ 神傳抄遠江下ニ種姜ニ斗八升アリ

外宮

● 伊良胡御厨 上分三石 雜用廿一石  
○ 今アツミ郡一ノ村アリ ○ 東鑑一ノ御厨  
○ 外目アリ

外宮

● 藤養御厨 上分六石 雜用廿石  
○ 今ハツ郡崇美村アリ津平村北隣ナリ  
○ 外目アリ

外宮

● 吉田御園 上分三石菓子 雜用三十一石  
○ 今吉田トイヘル処アツミハ名ハツミ郡ニ三所アリサレド菓子トアレバハ名郡ナル吉田トイフナル  
○ 外目アリ 叙可考 アツミ郡吉田駅ハモトハ今橋トイヒシラ天文ノ頃吉田ト改メタリトイヘレバアツミ

外宮

● 御平御厨 五十二町五反 ○ 今ハツ郡津平村アリ  
○ 外目アリ 同村ニ御栗山トイフ山アリトイヘリ

● 吉胡御厨 ○ 今アツミ郡一ノ村アリ

● 富津御厨 ○ 政杏云今アツミ津村アリ

● 奈御園 ○ 今アツミ郡羽田村アリ又同郡奥郡ニ富村アリ  
○ 和名抄同郡鴨太アリ

● 河内御園 ○ 今加茂郡ニ下河内村ハツ郡ニ河内村シタラ郡ニ川内村アリ  
○ 和名抄アラミ郡ニ河内

○ 建久年中行事十月一日更衣神事郷食膳ノ祭ニ件所ハ三河国所在河内御園也

● 大墓御園 ○ 今アツミ郡大塚村アリ  
○ 雜例集ニ有介島墓村

○ 尾張神名帳從三位津賀田天神 墓田

● 院内御園 ○ 今アツミ郡印内村アリ

● 根田 ○ 今アツミ郡今田村アリ

● 原田 ○ 今アツミ郡今田村アリ

● 新家 ○ 今アツミ郡新見村アリ

● 野依御厨 ○ 今アツミ郡一ノ村アリ  
○ 外目アリ

● 岩前御園 ○ アツミ郡岩崎村アリ



土イ  
 ● 上谷御厨  
 ○ 今アツミ郡植田村アリ此辺御神領多ケレバ可考  
 又神ヶ谷村歟。弥熊郷長泉寺貞治康曆天文永録等古文書目ニ弥熊郷上谷長泉寺領トアリ  
 ○ 今アツミ郡一ノ村アリ

二宮  
 ● 濱田御園  
 ○ 今アツミ郡一ノ村アリ  
 ○ 外目アリ

● 泉御園  
 ○ 今アラミ郡一ノ村アリ  
 ○ 又八名郡御園村ニ泉ノシトイフ説アリ

○ 建久年中行車四月十四日風日祈宮祭礼々々其後風日祈直會郡長膳預郷料所三河国泉御園也トアリ  
 ○ アツミ郡漆田村アリ可考  
 ○ 外目保神トアリ

内宮イ  
 ● 番刈御園  
 十月一日 ○ 今ホイ郡ニ柑子村アリ可考  
 郷料所

● 大草御園  
 ○ 今ホイ郡一ノ村ヌカタ郡一ノ村アリ アツミ郡一ノ村アリ  
 サレドアツミ郡ナルベシ

● 勢屋御園  
 ○ 瀧美郡田原ノ守ニ清谷トイフ処アリ清谷川トモアリ田原ヨリ西ニアタリテ少シヘダレリ又木保明神ノ神主モ  
 清谷氏ト從種イヘリ

内宮  
 ● 杉山御園  
 四月七日 ○ 今アツミ郡杉山村アリ  
 (兩度郷料所) ○ 建久年中行車七月四日風日祈日柏流神事々々ニ神事畢後於一殿在巨ノ郷食膳云々郷食膳

ハ三河国杉山御園ノ勳也号ノ瓜郷食以瓜郷食以瓜郷食ヲ作也凡其沙汰積也  
 六字(行字カ)

● 弥熊御園  
 ○ 今アツミ郡谷縣村アリ  
 ○ 氏経記弥熊

● 赤坂御厨  
 ○ 今ホイ郡一ノ村アリ

外宮  
 ● 蕨美御園  
 重復取  
 イナシ

● 富長御園  
 ○ 今アラミ郡富永村アリ

○ 石ノツツキニ遠江国アリテ次ニ詔国ヲセタレバ本書ヲ可考合  
 (本ニ諸神田注進文建久四年在京同トアリ)

○ 山本氏カ吉田 綜録ニ白雪カ春再咄ニ云 伊勢内宮在ニ神庫ニ書云 於ニ三河国御厨ニ今綾綿云々 又ニ延引ケルニ三十六ヶ所トアリ  
 富永マテヲノセタリ其内新封戸(富津大墓院内)根田 原田 新原 野依 ナクテ 廿八村ヲアゲタリ其中文字イサカ力異ナル  
 アリカレ白雪本トシルシテ校合シツコノ在神庫書トイフハ疑クハ神鳳抄ノ「ナニム」又「神水宮」  
 伴信及云 袖鳳抄ニ御厨御園共ニ田ノ町反祖ノ石敷ナドヲ注セルハムヲ世ニイハユル米上納代上納ノ類ニテ香物ニ換ヘタルウヘヲ  
 記セルモノナルベシ

○ 政香云 祢御厨七郷者保美ノ龜山 伊良胡 堀切 小極津 中山 島



○ 中右記云長承元年十一月四日極宮祭云々今朝彼御厨事申子細了  
参河国郷良庭御厨内字角平寺嶋郷事  
件所代、国司奉免

永久三年被奉免 宣旨了於今者可爲御厨人改後日宣司、国司  
信濃国一

同国一

二

右ニテ所大畧所見注進如件

### ○ 外宮神領目録

奥書云右ニ一極宜守浮郷所藏本謄寫了  
安永四年十二月三日 極宜荒木田神主經雅

以外宮神領給人引付帳別校。引付帳奥云延元四年十月日、但政所大夫注進定也

書中ニ按ニ貞治六年正月廿五日注シタルモノ、此神領目録ヲ本トシテ後ニ革リタルヲ書加ヘ

タルモノト見ユ 神厚抄ト合ヒ合ハズ交レリ

神領給人引付 一 外宮出納所  
注進

### 宮<sup>イ</sup> 官廳御所知諸神領目録

合

伊勢國

云々

三河國 松木義勝時自子年御幣米跡子年二駄五年一俵才年一駄

郷良庭御厨九石 加後進祈禱 内於上分一石、五斗者

郷良<sup>イ</sup> 一石五斗 六月二石五斗九月三石 十二月五斗

董<sup>イ</sup> 董御園六石六斗 料田六十大丁限別一併充但同本斗

定大器也

吉田御園三石 菓子栗六籠

神谷御厨十石 菓子等<sup>イ</sup>

蕪美御厨六石

生栗御園油一斗 栗二石

伊良胡御厨三石 干鯛三十候<sup>イ</sup>

兼春<sup>イ</sup> 被仰野依御厨三石

保柚濱田両御園一石五斗



又同濱田御園勤月次御幣紙十二帖勤之

遠江国

神妙 刑部御厨 三石

同 祝田御厨

同 小高御厨 六石

同 美園御厨 九石

同 大墓御園 八丈絹二疋雜紙十帖葛布一端

同 豐永御厨 三石

同 大崎御園 雜紙九十帖

同 佐久目御園 勤同前

同 池田御厨 三石

同 小坂御厨 三石

同 山口御厨 六石

駿河国 「以下略之」

荒木田神主八羽光穂「本モチ校之」標ス其奥書「貞吉子丙寅林鐘紀州淡島社司紀如尚トアリテ度會延経本モテ字トアリ」

○神領給人引付

外宮出納所

合

一 伊勢国

中畧

一 三河国 松木義彦時自子年御幣米跡子年三駟、  
五歳一俵才年一駟、

饗庭御厨 九石加後進祈禱内於上分一石、五斗十二月二石五斗

薰御園 六石六斗料田六町、段別一升宛、  
但同本斗定大畧也

吉田御園 三石 菓子栗六籠

神谷御園 十石 菓子等

藤美御厨 六石

生栗御園 油一斗 栗二石

伊良胡御厨 三石 干鯛三十隻

被兼 野依御厨 三石  
仰付 春



保抽濱田御園 一石五斗  
又同濱田御園 月次御幣紙十二帖同勤之  
一遠江国

神抄刑部御厨 三石  
神抄祝田御厨  
同 小高御厨  
同 美園御厨 廿石  
同 大墓御園 八丈絹二疋雜紙十葛布一端  
同 農長御厨 三石  
同 大崎御園 雜紙九十帖  
同 佐久目御園 勤同前  
同 池田御厨 三石  
同 坂御厨 三石  
同 小坂御厨 三石  
中田神戶内 三十六町内 上分一町  
一駿河国  
中畧  
一諸神戶祭料

中畧

二石 尾張神戶 上品絹二疋  
四石 三河本神戶  
四石 遠江神戶  
政所 濱名神戶祭料八石  
中畧

右注進如件

延元四年十月四日 但政所太夫注進定也

中畧

一三河国渥美郡赤羽赤羽七郎次郎寄進、御贄干鯛百隻、長一尺三寸、此内九隻御上分、廿隻御傍官配、分六隻口入所、久彦神主、觀應元年七月三日廳 廳宣  
一繼橋郷通御園内中濱塩屋濱六家、各有濱、每年三貫文供用料、寄進  
貞和三年二月廿八日

一三河国伊良胡御厨、御贄納事、干鯛長一尺、每年五十隻、此内九隻上分、三十隻口入所、行彦神主、貞治三年六月十七日

下畧

本云 永正四年三月七日書畢

富房寄進



右神領給人引付八羽光德神主本モテ抄出之

○氏経記

寛正五年 廳宣 可早仕先例云々 三河国飽海神戸事石件神戸者爲嚴重御神領毎年口入上分米并四ヶ神役之外者自往古不致沙汰之所云々以宣  
寛正五年六月廿一日

三河国細谷御厨者爲嚴重神領毎年口入上分米并於四ヶ神役之外者不致他役沙汰之所役夫工米を被懸以杀神慮難測以就其式日神役欠如以者天下御祈禱可退轉以之条无勿休以任先例被止御催促以者可目出以且又可爲御神忠以忒恐々謹言  
五月十五日 寛正五年条

内宮一祢屋氏経  
宗原殿

廳宣 早可...大神宮領三河神戸事石件神戸者爲大神宮御領年中勤役繁多也云々以宣  
文明七年二月日

三河国神戸地頭職任本知行之旨毎年每解怠可致其沙汰間事 石件之在所就本知行毎年

神役无解怠可致沙汰料足拾貫文宛之重内宮一祢屋氏経爲永代口入所不可有相違者也若令退轉者以此狀堅可有御催促者也仍爲永代請文如件  
文明七年二月吉日 朝倉勘ヶ田左工門村平貞美判

○春記

長曆三年十月十日參州氣息已絶了云々  
卅日丁亥昨夜隨身則守上道々經伊勢者先日令下向三州是爲令檢長山庄田畝也云々但彼庄四至内彼国神明供田在此中仍不檢田即免了云々十一月四日三州長山庄今日初出年貢  
長縮二正凡縮廿五足也以雜兼可令沙汰也云々

○拾芥鈔

四卷六十二丁  
本朝国郡部  
参河上八郡 碧海 賀茂 額田 幡豆 寶飯府 八名 渥美 設樂 田七十五十四町



